仙台市文化財調査報告書第330集

仙台城跡 8

—平成19年度　調査報告書—

2008年3月

仙台市教育委員会

仙台城跡8　正誤表

誤　P.56　第30表　第18次調査出土瓦2観察表

図	遺物番号	種類	区	遺構・層位	法量（mm）	重量（g）	備考	写真
42	725	平瓦	1	Ⅱ	全長264　幅224　厚さ16	1532.5		49
43	796	桟瓦	1	KS-496.1	全長（160）幅（264）厚さ（19）	1002.0		50

正

図	遺物番号	種類	区	遺構・層位	法量（mm）	重量（g）	備考	写真
42	725	平瓦	1	Ⅱ	全長264　幅224　厚さ16	1532.5		48
43	796	桟瓦	1	KS-496.1	全長（160）幅（264）厚さ（19）	1002.0		49

※写真番号51以降は番号が1つずつ繰り上がりとなります

誤　P.57　第34表　第18次調査出土木製品1観察表

図	遺物番号	種類	区	遺構・層位	法量（mm）	重量（g）	備考	写真
51	77	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径135　底径54　残存器高66	178.9	内外面黒漆　外面三方に朱漆よる竪三引両文	56
52	85	漆器（蓋）	2	KS-496.3	残存口径96　残存底径41　残存器高20	22.9	内外面黒漆　高台内に刻印	57
53	5	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径118　残存底径55　残存器高39	53.2	内面朱漆　外面黒漆　外面三方に朱漆よる横三引両文	58

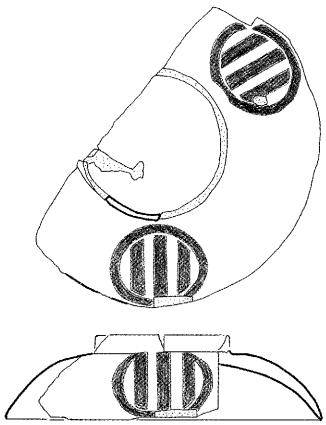
正

図	遺物番号	種類	区	遺構・層位	法量（mm）	重量（g）	備考	写真
51	5	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径118　残存底径55　残存器高39	53.2	内面朱漆　外面黒漆　外面三方に朱漆よる横三引両文	55
52	85	漆器（蓋）	2	KS-496.3	残存口径96　残存底径41　残存器高20	22.9	内外面黒漆　高台内に刻印	56
53	77	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径135　底径54　残存器高66	178.9	内外面黒漆　外面三方に朱漆よる竪三引両文	57

仙台市文化財調査報告書第330集

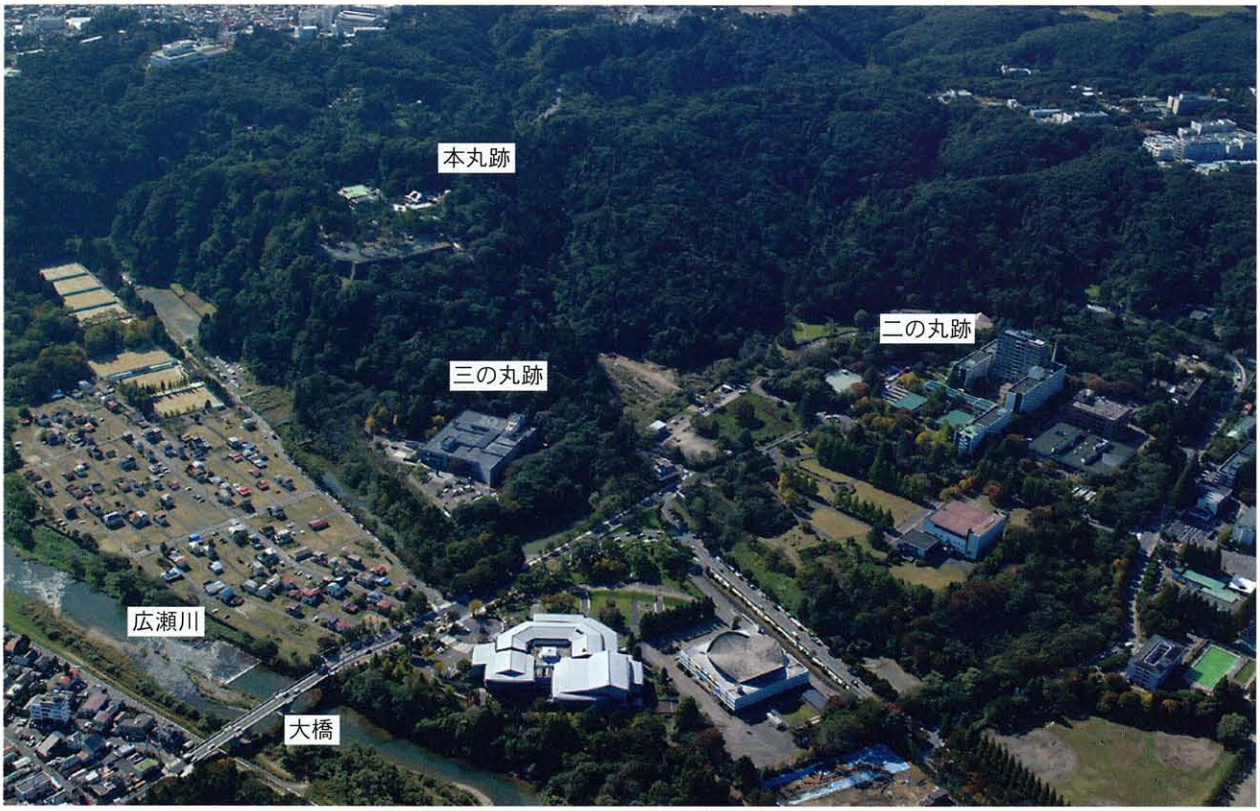
仙台城跡 8

—平成19年度　調査報告書—



2008年3月

仙台市教育委員会



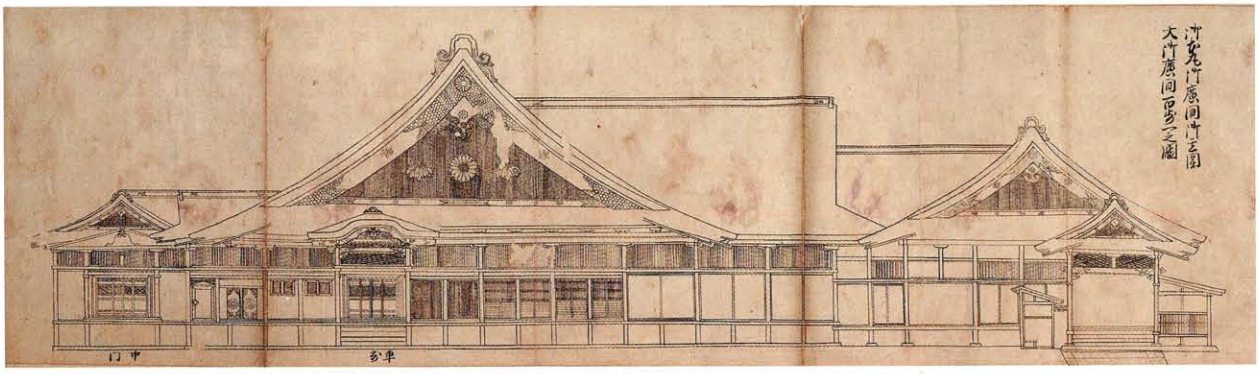
仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2005 年 10 月撮影）

仙台城跡航空写真（北が上・2002 年 1 月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）

第17次　大広間北半部遺構検出状況（北西から）

第17次　大広間中央部遺構検出状況（東から）

第17次　調査区全景（北東から）



仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図（大広間部分）仙台市博物館蔵

第17次　２区KS-462礎石跡検出状況（南西から）

第17次　４区KS-53雨落ち溝跡断ち割り断面（南から）

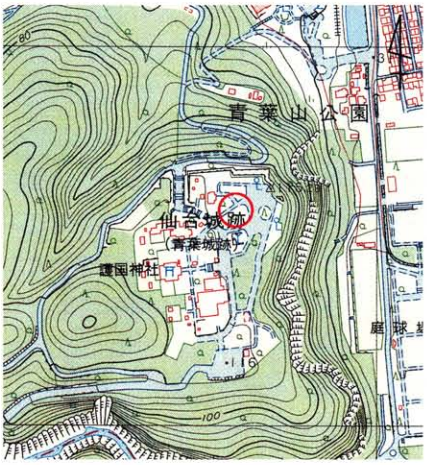
第17次　２区石敷き遺構（Ⅲd層）検出状況（南西から）

第17次　４区基本層序（北西から）

第17次　２区KS-483・484断面（北西から）

第17次　４区KS-473・474断面（北東から）

銅釘（No.６・19・85・91・104・109・115）



第17次　調査区位置図（1/10,000）

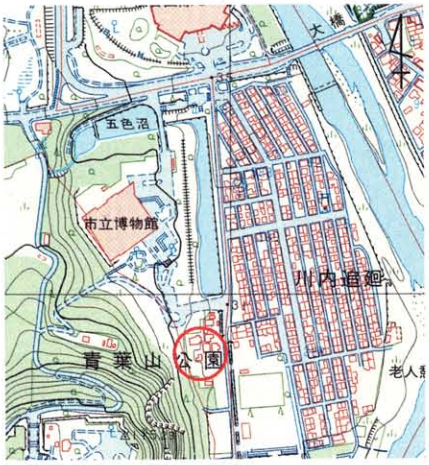
第18次　KS-496堀跡遺構検出状況（北西から）

第18次　KS-496堀跡遺構検出状況（南東から）

第18次　２区から長沼方向を望む（南から）

第18次　２区３層出土漆器蓋(No.85)

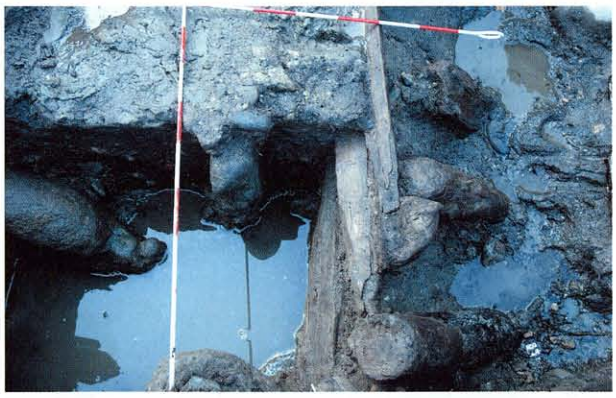
第18次　２区３層出土漆器杯(No.115)



第18次　調査区位置図（1/10,000）

第18次　KS-496堀跡東壁断面（西から）

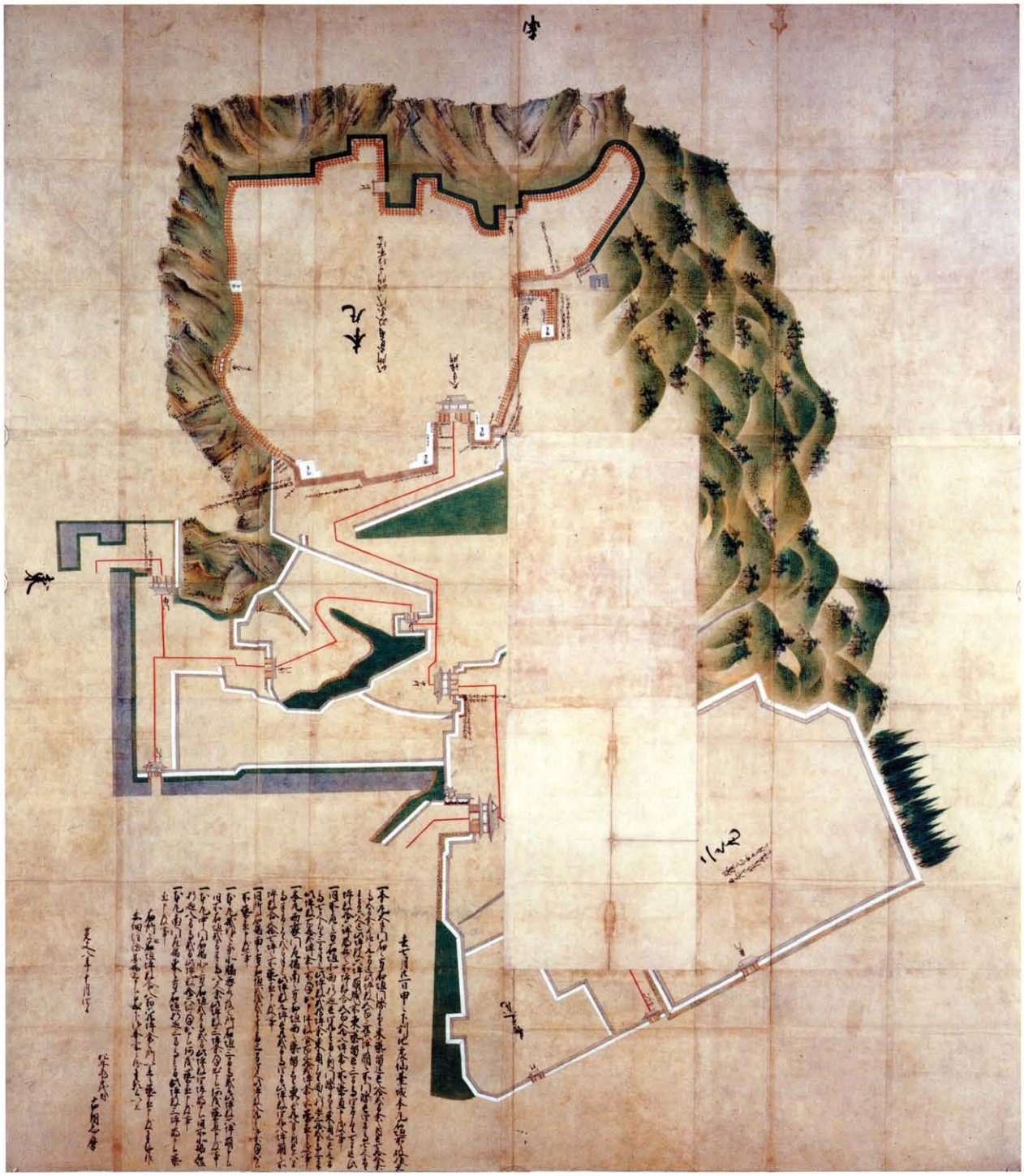
第18次　KS-496堀跡杭列６検出状況（北から）



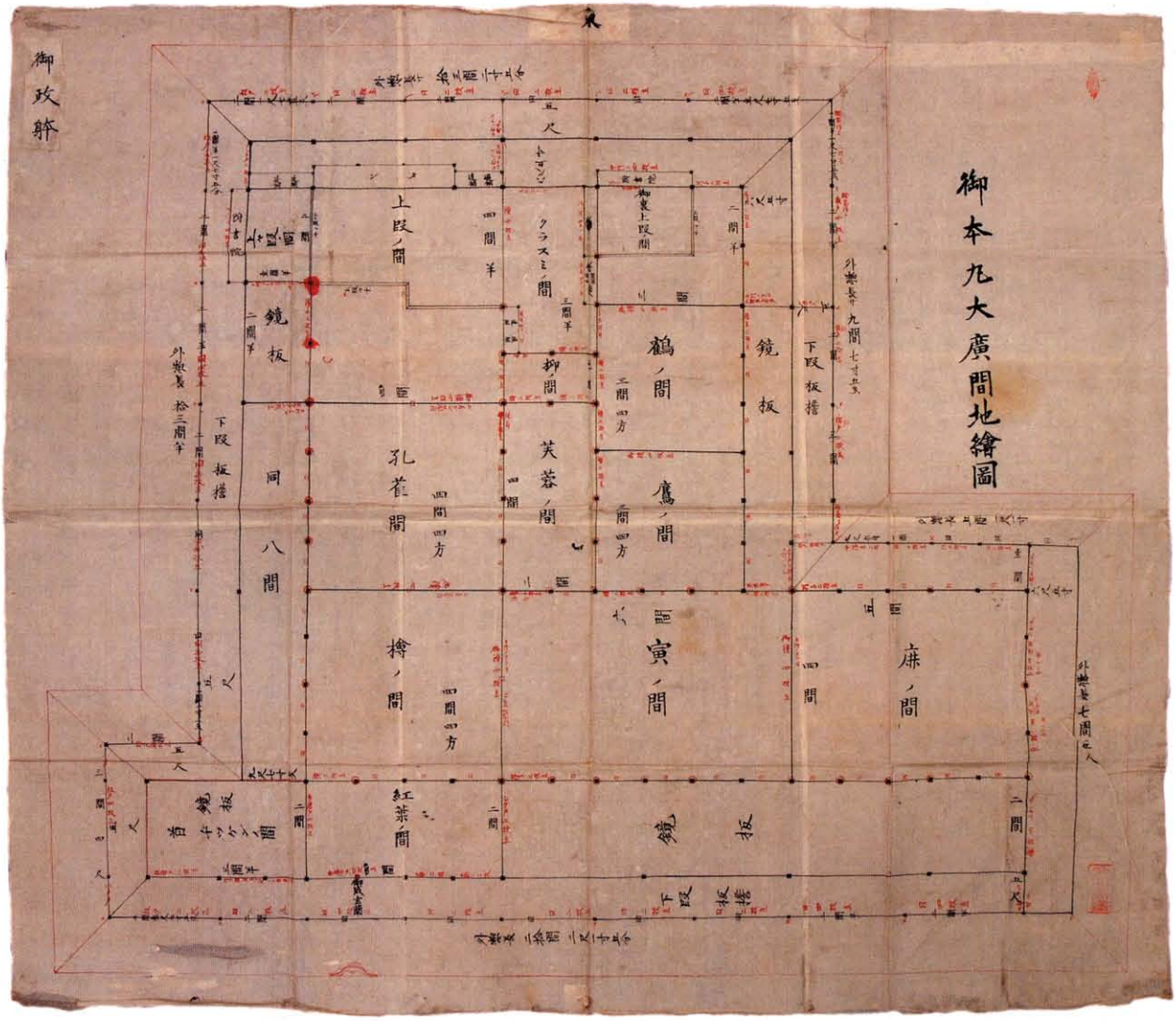
第18次　KS-496堀跡杭列６板材検出状況（東から）

第18次　KS-496堀跡杭列７検出状況（北から）

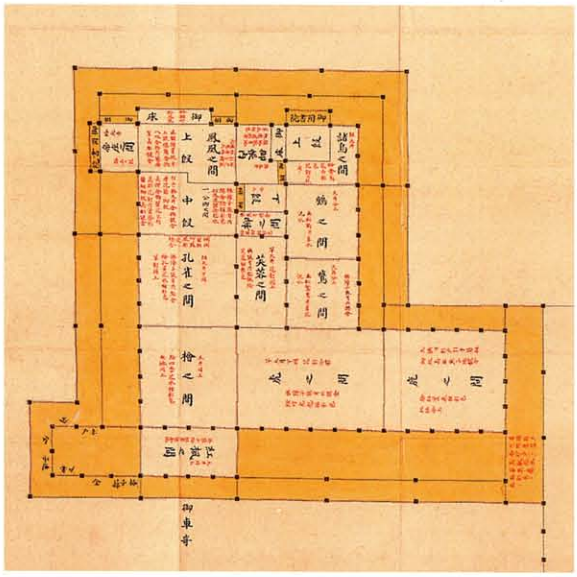
第18次　KS-496堀跡杭列８検出状況（北から）



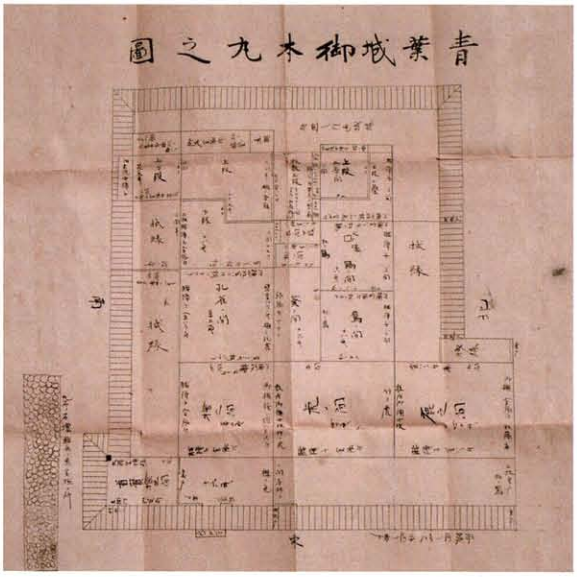
「仙台城修理伺絵図」 ㈶斎藤報恩会蔵



「御本丸大広間地絵図」 ㈶斎藤報恩会蔵



「仙台城旧御本丸御屋形図」 仙台市博物館蔵



「青葉城御本丸之図」 仙台市博物館蔵

序　　文

慶長５年、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成９年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した石垣の変遷や、ヨーロッパ産のガラス器や金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成15年８月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成19年度は、本丸御殿の主要な建物である大広間跡を中心とした発掘調査や三の丸巽門跡東側の発掘調査が行われました。大広間跡に関する調査は今年度で７年目を迎え、大広間の建物内部における礎石跡を発見し、大広間の各部屋の間取りや位置関係を考えていく上で大きな成果が得られました。

巽門東堀跡の調査では、近代に埋没したとみられる堀跡の南岸と南西角部を確認し、南北幅が35ｍ以上となる大規模な堀であることが明らかになりました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成20年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　　言

1．本書は、仙台城跡の平成19年度遺構確認調査及び史料調査の報告書である。

2．本調査は、国庫補助事業である。

3．本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆　　在川宏志（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ章）

　　鹿野仁子（Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・Ⅷ章）

編集は、渡部紀・在川・鹿野がこれにあたった。

陶器、磁器については文化財課佐藤洋の鑑定結果をもとに執筆した。

4．土壌サンプル分析は㈱加速器分析研究所に委託した。

5．本書中の地形図は、国土地理院発行の1：50,000『仙台』と1：10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。

6．遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。

7．遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS－　）を付した。

8．本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

目　　次

序　　文

例　　言

Ⅰ　はじめに…… 1

Ⅱ　仙台城跡の概要…… 3

Ⅲ　調査計画と実績…… 6

Ⅳ　第17次調査

　1．調査目的及び調査経過…… 8

　2．旧地形及び基本層序…… 9

　3．検出遺構……10

　4．出土遺物……23

　5．まとめ……27

Ⅴ　第18次調査

　1．調査目的及び調査経過……29

　2．旧地形及び基本層序……30

　3．検出遺構……32

　4．出土遺物　……49

　5．まとめ　……65

Ⅵ　理化学分析　……66

Ⅶ　石垣測量調査　……69

Ⅷ　絵図調査　……73

Ⅸ　総括　……83

Ⅰ　はじめに

平成19年度は、仙台城跡遺構確認調査第２次５カ年計画の２年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体　　仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。

委 員 長　　齋藤　鋭雄（宮城県農業短期大学名誉教授　近世史）

副委員長　　岡田　清一（東北福祉大学教授　中世史）

委　　員　　西　　和夫（神奈川大学教授　建築史）

北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長　石垣・城郭研究）

藤沢　　敦（東北大学特任准教授　考古学）

岡崎　修子（㈶仙台ひと・まち交流財団、仙台市片平市民センター館長）

仙台城跡調査指導委員会開催日

第17回：平成19年７月13日　平成19年度調査計画報告・第17次調査中間報告

第18回：平成19年10月12日　第18次調査中間報告

第19回：平成20年３月14日　第18次調査最終報告・本丸西部石垣測量調査報告・平成20年度調査計画

発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々からご協力をいただいた。

宮城県護国神社

資料提供　　㈶斎藤報恩会、仙台市博物館

さらに、下記の諸機関の方々から御教示・御協力をいただいた。

渡辺丈彦（文化庁文化財保護部記念物課）、佐藤則之（宮城県教育庁文化財保護課）

鈴木　啓（前仙台城跡調査指導委員）、五十嵐貴久（山形市教育委員会）、高橋圭次（日本考古学協会員）

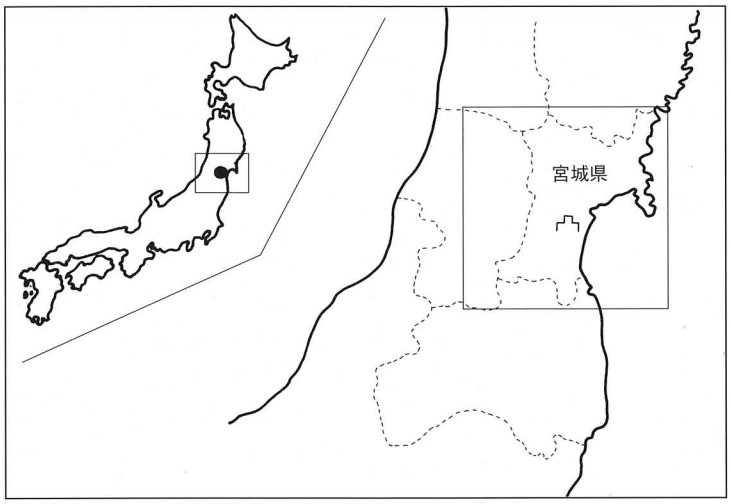
追川吉生（東京大学）、松本秀明（東北学院大学）、北野信彦（東京文化財研究所）

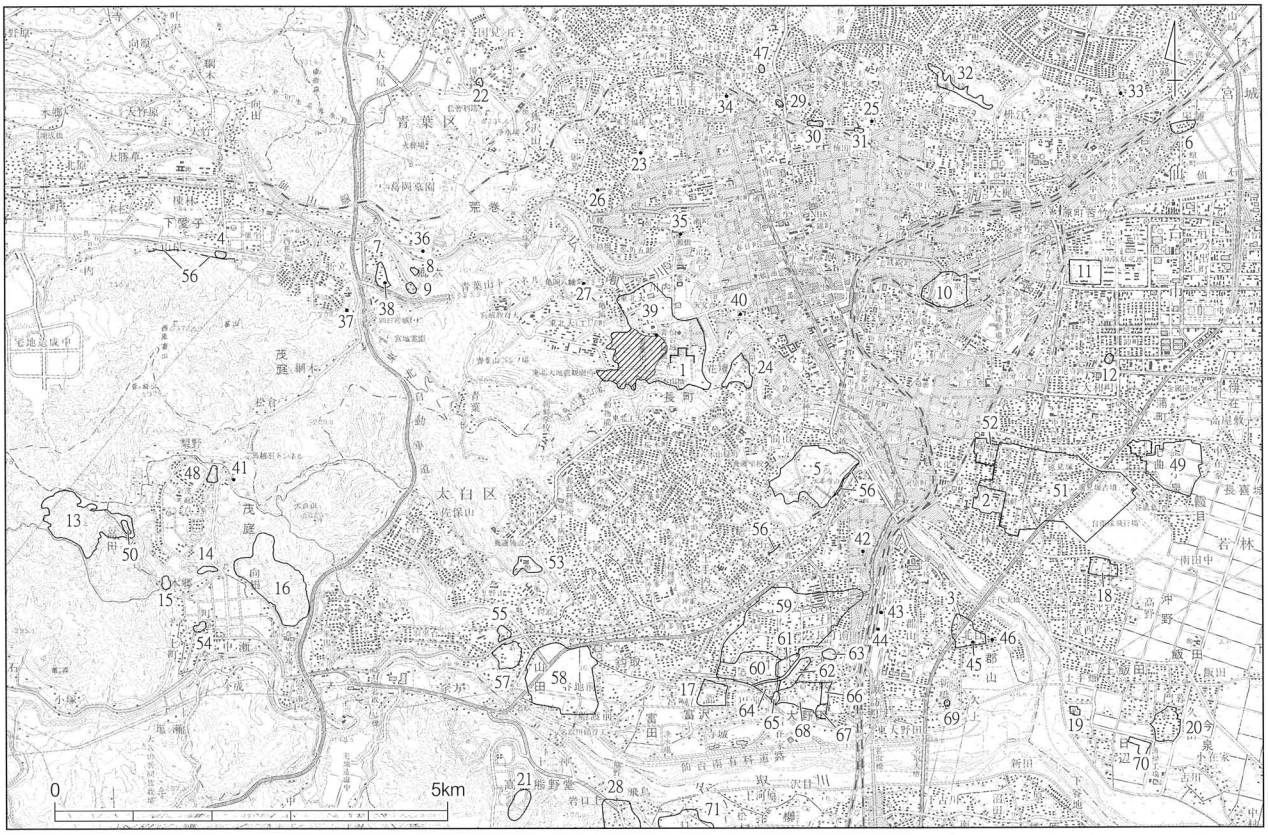
高木暢亮、柴田恵子（東北大学埋蔵文化財調査研究センター）

小井川百合子、高橋あけみ、菅野正道、齋藤　潤（仙台市博物館）

調査担当	文化財課	課長	田中　則和
		仙台城史跡調査室長	工藤　哲司
		主任	熊谷　俊朗
		主任	渡部　　紀
		文化財教諭	在川　宏志
		文化財教諭	鹿野　仁子

調査参加者　　相澤　守、天野美津枝、安部文子、伊藤美代子、内山陽子、遠藤誠子、太田裕子、小佐野直子、小野寺美智子、菅家婦美子、木幡真喜子、高野誠一、竹内美江子、田中春美、対馬悦子、菱沼みのり、堀内泰子、増田瑞枝、三嶋典子、結城龍子、吉田妙絽子、渡邉　優





城館跡		15	茂庭西館跡	窯跡		43	西台畑板碑群	58	山田条里遺跡
1	仙台城跡	16	茂庭けんとう城跡	29	荒巻杉添窯跡	44	長町駅裏古碑	59	富沢遺跡
	天然記念物青葉山（斜線部分）	17	富沢館跡	30	杉添東窯跡	45	宅地古碑群	60	山口遺跡
2	若林城跡	18	沖野城跡	31	五城中学校北窯跡	46	古峯神社板碑	61	下ノ内浦遺跡
3	北目城跡	19	日辺館跡	32	与兵衛沼窯跡	その他の中・近世の主な遺跡		62	六反田遺跡
4	西館跡	20	今泉遺跡	板碑・石碑		47	山田団地東南遺跡	63	元袋遺跡
5	茂ヶ崎城跡	21	小館（古館）跡	33	燕沢蒙古の碑	48	梨野Ａ遺跡	64	下ノ内遺跡
6	小鶴城跡	寺院・墓所		34	東昌寺裏経石出土地	49	仙台東郊条里跡	65	伊古田遺跡
7	郷六城跡	22	臨済院跡	35	澱不動尊文永十年板碑	50	カナクソ遺跡	66	王ノ壇遺跡
8	葛岡城跡	23	林子平墓	36	郷六大日如来の碑	51	南小泉遺跡	67	皿屋敷遺跡
9	郷六御殿跡	24	経ケ峯伊達家墓所	37	大梅寺建武の碑	52	養種園遺跡	68	大野田古噴群
10	国分鞭館跡	神社		38	郷六建武碑	53	御堂平遺跡	69	欠ノ上Ｉ遺跡
11	南目城跡	25	東照宮	39	川内古碑群	54	町田遺跡	70	高田Ｂ遺跡
12	谷地館跡	26	大崎八幡宮	40	片平仙台大神宮の板碑	55	北前遺跡	71	八ツ口遺跡
13	茂庭大館跡	27	亀岡八幡宮	41	馬越石塚	56	杉土手（鹿除土手）		
14	峯館跡	28	熊野新宮社宿坊跡	42	蛸薬師古碑群	57	山田上ノ台遺跡		

第１図　仙台城跡と周辺の遺跡

Ⅱ　仙台城跡の概要

1．仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には「御裏林」と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物「青葉山」となっている。御裏林では、3条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡の東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年［1967］に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川の岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

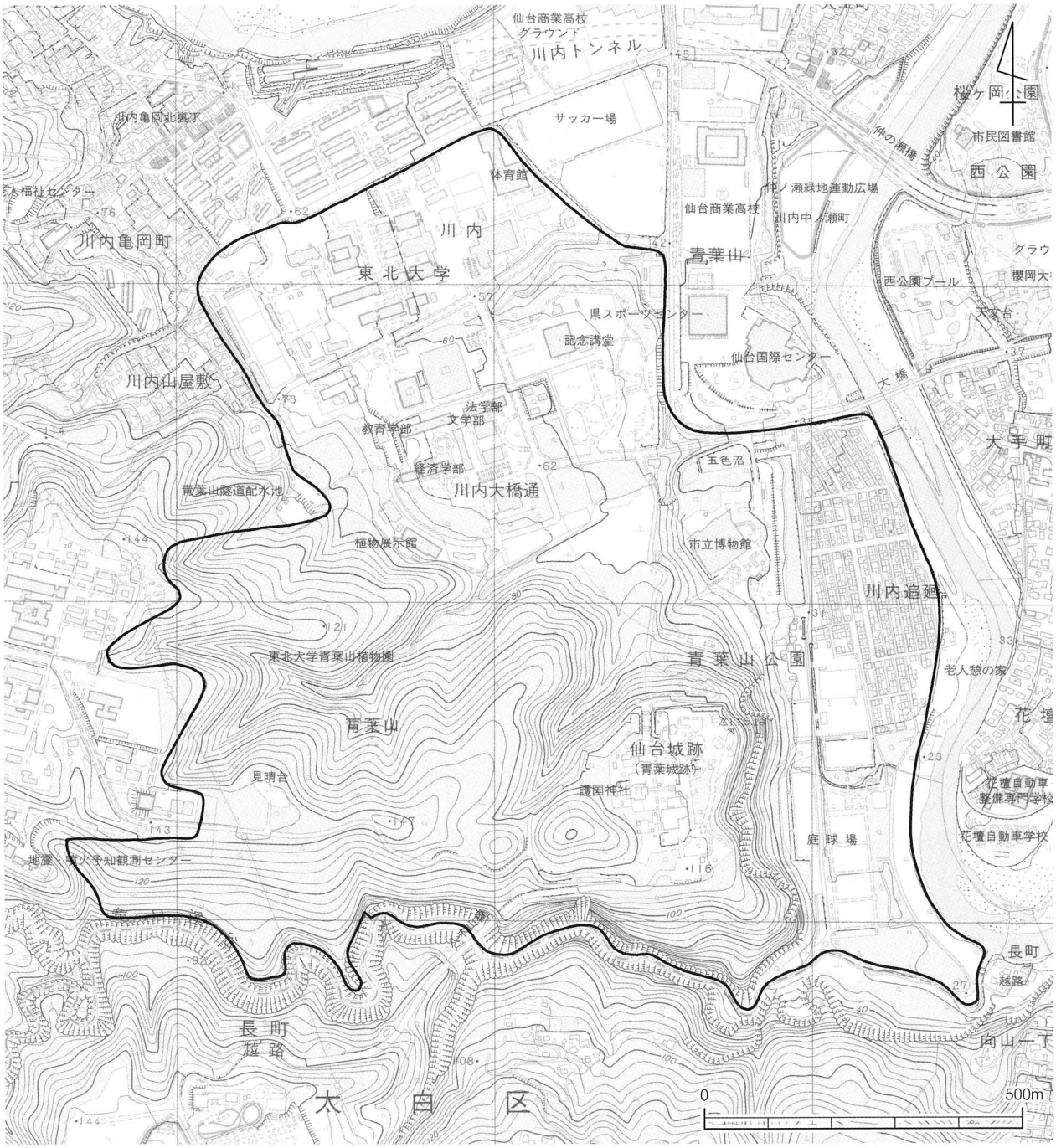
2. 仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長5年［1600］12月24日、城の縄張りが開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年［1602］5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至る経路と、巽門、清水門、沢門を通る経路がある。

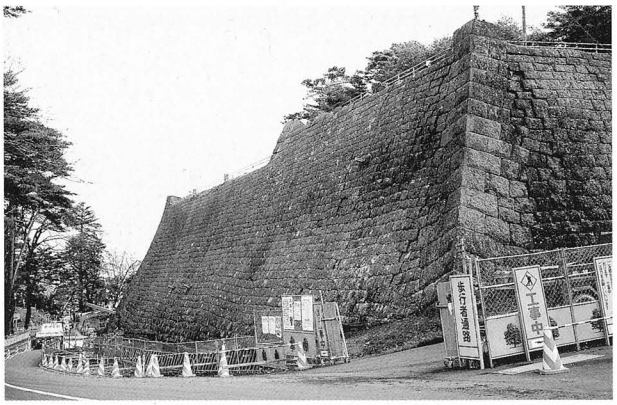
絵図や文献などによれば（註1）、本丸には詰門を入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保3年［1646］4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註2）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年［1882］の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年［1945］7月、太平洋戦争の際の米軍による空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註3）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。

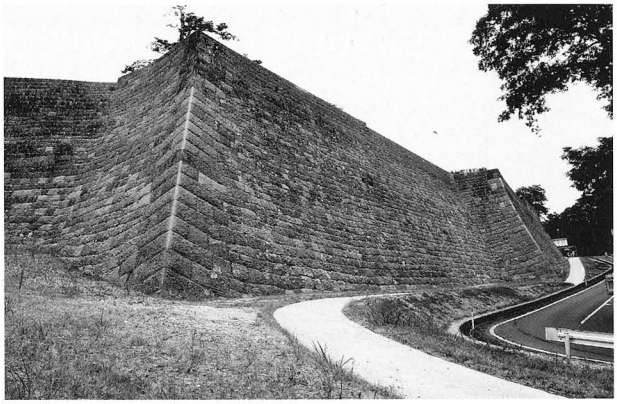
第2図　焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第３図　仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・1/10,000）



第４図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事前（北西から）



第５図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事後（北東から）

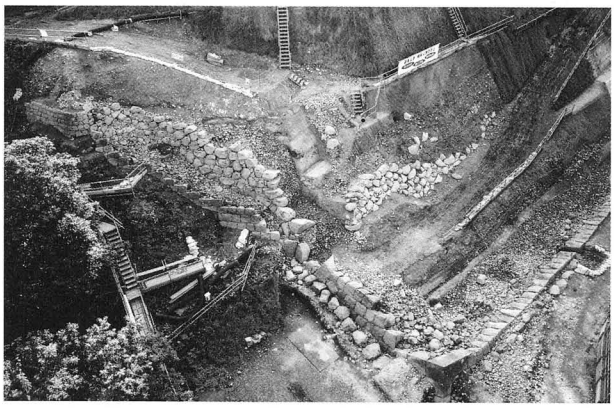
3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年［1983］から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註４）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58･59年［1983･1984］に実施された三の丸跡の発掘調査（註５）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第１次発掘調査である。

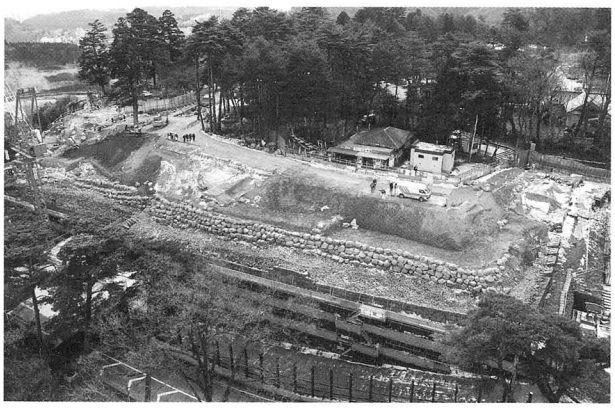
本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成９年［1997］度から実施されている。（註６）この石垣修復工事に伴う本丸１次発掘調査は、平成９年［1997］７月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年［2000］９月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年［2004］３月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数検出し、矢穴や石材加工の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたと考えられており、さらに検討を重ねている。（註７）

註１　『仙台城下絵図』（寛文４年［1664］宮城県図書館蔵）や『肯山公造制城郭木写之略図』（四代藩主綱村時代､17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、『貞山公治家記録』にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧『仙台城の建築』（仙台市教育委員会『仙台城』1967）・『仙台城館および周辺建物復元考』（仙台市博物館『調査研究報告第６号』1986）・伊東信雄『仙台城の歴史』・三原良吉『仙台城年表』（仙台市教育委員会『仙台城』1967）などがある。
註２　義山公治家記録、正保３年［1646］４月28日條
註３　貞山公治家記録、慶長５年［1600］12月24日條
註４　東北大学埋蔵文化財調査年報１～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）
註５　発掘調査報告書『仙台城三ノ丸跡』（仙台市教育委員会1983）
註６　仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）
註７　本丸１次発掘調査成果に係る主な参考文献　金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル442号』1999）金森『仙台城本丸の発掘と出土陶磁』（『貿易陶磁研究』19』1999）金森・我妻仁「仙台城本丸跡　築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル456号』2000）我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第２号』2000）金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第626号』2000）我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割（予察）」（『宮城考古学第３号』2001）金森・我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル474号』2001）金森・根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル484号』2002）伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣普請の風景を読む』2003）



第６図　本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第７図　本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

Ⅲ　調査計画と実績

平成19年度は、仙台城跡遺構確認調査の第２次５カ年計画２年次にあたる。平成17年度までの第１次５ヵ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査などを実施してきた。また、本丸大広間跡や巽櫓跡などの発掘調査、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

第１表　これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第１次	大広間跡（1次）	185㎡	平成13年9月17日～12月27日
第２次	清水門跡付近石垣	210㎡（立面）	平成13年11月30日～平成14年2月13日
第３次	大番士土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400㎡	平成14年5月20日～平成15年1月31日
第４次	巽櫓跡	110㎡	平成14年5月20日～8月31日
第５次	大広間跡（2次）	470㎡	平成14年8月5日～12月20日
第６次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年5月7日～8月8日
第７次	大広間跡（3次）	258㎡	平成15年8月4日～12月25日
第８次	登城路跡	58㎡	平成15年11月12日～12月25日
第９次	広瀬川護岸石垣	50㎡（立面）	平成15年12月9日～平成16年2月5日
第10次	大広間跡（4次）	397㎡	平成16年7月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣	349㎡（立面）	平成16年12月18日～平成17年3月31日
第12次	大広間跡（5次）	446㎡	平成17年5月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	86㎡	平成17年11月1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣	627㎡	平成18年1月16日～1月20日
第15次	大広間跡（6次）	311㎡	平成18年6月1日～8月4日
第16次	三の丸堀跡（2次）	522㎡	平成18年9月1日～11月30日

第２次５カ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、遺構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、本丸大広間周辺及び三の丸巽門跡周辺における遺構確認調査を実施した。発掘調査費については総経費27,712千円、国庫補助額13,856千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第２表　調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第17次	大広間跡（7次）	250㎡	平成19年5月22日～8月31日
第18次	三の丸堀跡（3次）	140㎡	平成19年9月1日～11月30日

これまで、本丸跡では６次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間跡の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間跡の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き遺構を検出した。さらに大広間の北側では、大広間跡に先行する、石敷きを伴う礎石建物跡を一棟、確認した。

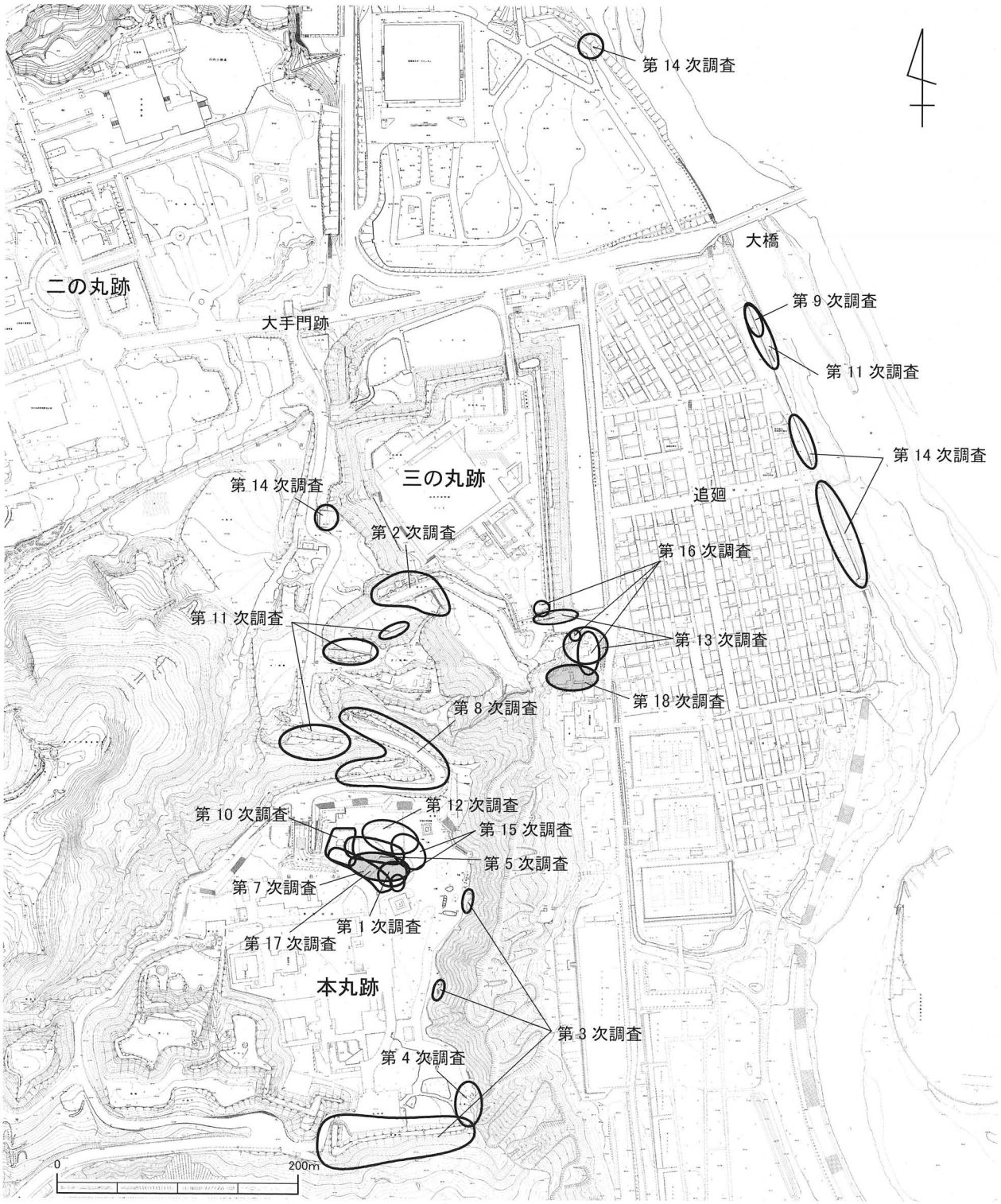
第17次調査は、大広間跡の内部北半における遺構確認等を目的として実施した。調査では、大広間跡の中心付近で東西方向に並ぶ礎石跡を検出した。さらに大広間跡の間取りに関わる数箇所の礎石跡を検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、大広間内部の整地層直下より、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間内部の北側で広く分布している。遺物は、瓦・磁器・陶器・銅釘などが出土した。

第18次調査は、三の丸巽門跡東側の堀跡の遺構確認を目的として実施した。堀跡の調査（１区・２区）では、堀

の南岸と南西角部を確認し、南岸では３列からなる杭列を検出した。堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より６ｍ以上となる大規模なものであることが明らかとなった。

第３表　調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第17次	大広間跡（7次）	263㎡	平成19年5月28日～8月3日
第18次	三の丸堀跡（3次）	468㎡	平成19年9月1日～11月26日



第８図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1/5,000）

Ⅳ　第17次調査

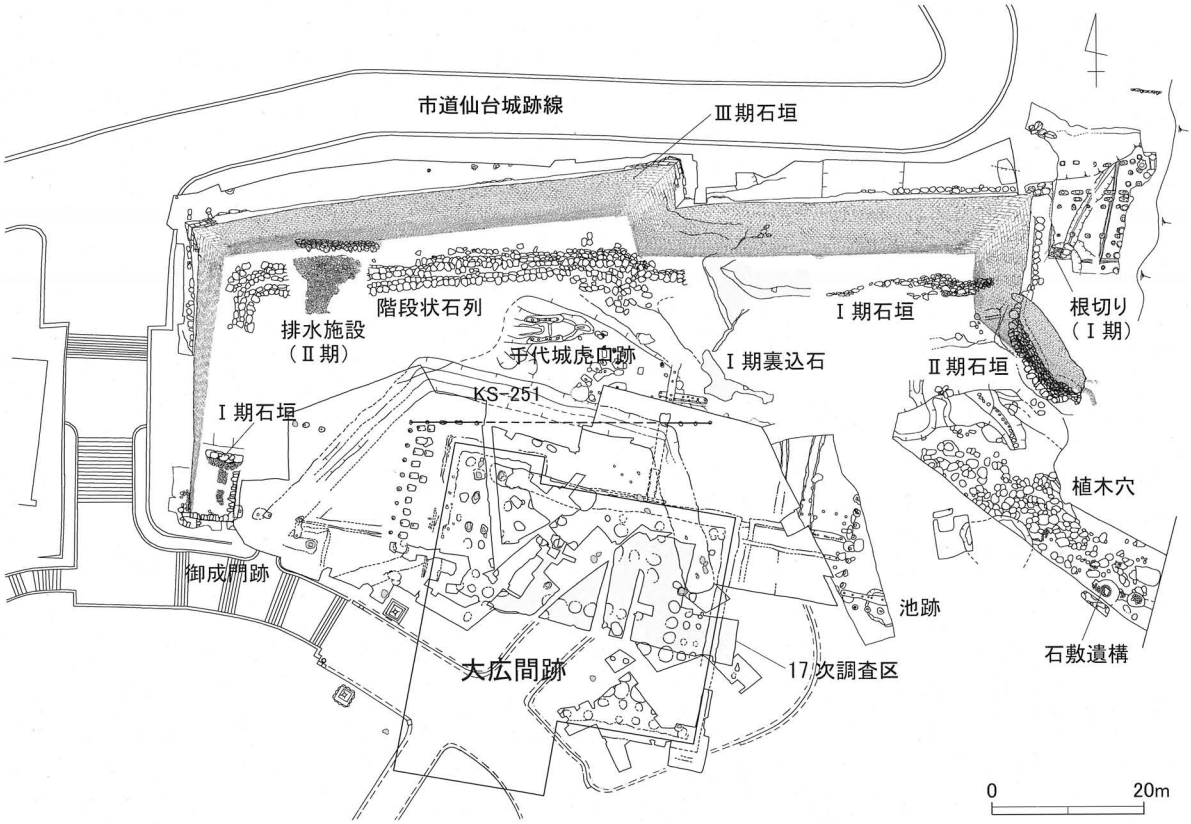
1．調査目的及び調査経過

第17次調査は、大広間跡中央部の建物内部における遺構確認を目的として平成19[2007] 年５月28日から同年８月３日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の263㎡ である。大広間跡に関する調査としては第7次にあたる。

調査目的は、大広間内部における遺構確認および大広間に先行する建物跡に関連する遺構の確認である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影の後、５月24日からフェンスを設置し、５月28日から重機による表土の除去作業を開始した。人力による遺構面の検出作業は５月31日から開始した。電気ケーブルや水道管を埋設した際の掘り方といった極めて新しい時期の撹乱の除去作業を行い、その壁面および平面の精査を行いながら明治時代以降の整地層であるⅡ層を除去した。その後、江戸時代の盛土層または整地層であるⅢ層の上面で遺構検出作業を行った。調査区を西から1区、園路西南部を2区、ＡベルトからＢベルトまでを3区、Ｂベルトから東側を4区と分けて、調査を行った。

調査では、大広間の中心付近で東西方向に並ぶ礎石跡を検出した。さらに大広間跡の間取りを明らかに関わる礎石跡を検出した。大広間の間取りや各部屋の配置を検討する上で重要な成果が得られた。また、大広間内部の整地層直下より、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間跡内部の北半で広く分布していることが明らかになった。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、銅釘、瓦などが出土した。



第９図　仙台城本丸跡北部・大広間跡調査区位置図（1/1,000）

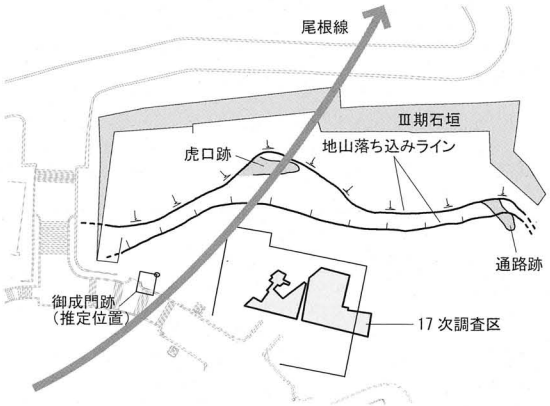
第17次調査は、平成19年３月23日の第16回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て実施した。平成19年７月13日の第17回仙台城跡調査指導委員会では、現地においてこれまでの調査成果と今後の進め方について指導を受けた。調査成果については、７月19日に記者発表、７月22日に現地説明会（350名参加）を実施公表した。その後、調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、８月４日に調査箇所は原状に復した。平成19年10月12日に第18回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の追加報告を行い、指導助言を受けた。

第10図　調査前状況（東から）

第11図　調査前状況（南東から）

２．旧地形及び基本層序

大広間周辺の原地形をみると、その北側前方に中世千代城の虎口跡が検出された尾根の張り出しがある（第12図）。この尾根線は、御成門跡付近から大広間跡の北西角部を通り北東方向へ延びるもので、大広間のある平場の地形は、本来東へ向けて緩やかに傾斜していたものと考えられる。



第12図　本丸跡北部平面模式図（旧地形と検出遺構）

基本層は、Ⅰ層（現表土）、Ⅱ層（近代以降の整地層）、Ⅲ層（近世の整地層）、Ⅳ層（地山直上の旧表土層）、Ⅴ層（地山）に大別される（第４表）。以下、概要を記す。

Ⅱ層はa～g層に細分した。Ⅱe層は、一部白色粘土ブロックを含む近代以降の盛土層で特に３区南部に分布する。Ⅱf層は炭化物を多く含む焼土が堆積し、３区から４区の南部にかけて分布する。Ⅱg層は、大広間廃絶直後の盛土層である。

Ⅲ層はa～d層に細分した。Ⅲa層は近世期の最も新しい盛土層で、大広間内部の整地層である。12次調査でのⅢe層に対応する（Ⅲe層については「仙台城跡６」参照）。Ⅲb層はKS-460をはじめとする礎石跡の検出面である。Ⅲc層は２区で部分的に見られる整地層である。Ⅲd層は15次調査1区南部で検出された石敷き遺構ないしはⅢ-２層に相当し、今回の調査区では北半に分布する。

Ⅳ層はⅤ層（地山）上面に堆積した旧表土層とみられ、昨年度の調査で大広間の外側で見られたが、大広間内部では確認できなかった。Ⅴ層上面で遺構が確認されている。

第４表　第17次調査基本層注記表

遺構番号	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
基本層序	Ⅰ	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	有	有	表土。
	Ⅱa	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	有	有	
	Ⅱb	10YR4/6	褐色	シルト質粘土	有	有	白色粘土ブロック、小礫を含む。
	Ⅱc	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	炭化物を多量に含む。4区東部のみ分布。
	Ⅱd	10YR7/8	黄橙色	粘土	有	有	10YR4/1褐灰色シルトブロックが混じる。KS-53雨落ち溝直上に堆積。
	Ⅱe	2.5Y6/2	灰褐色	粘土	有	有	白色粘土ブロック、礫を多く含む。公園整備に伴う盛土。
	Ⅱf	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	炭化物を多量に含む。
	Ⅱg	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	有	有	大広間廃絶直後の旧表土層か。
	Ⅲa	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	大広間跡を中心に分布。礎石設置後の化粧土か。
	Ⅲb	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロックを多量に含む。地山直上整地層。
	Ⅲc	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	礫や白色粘土ブロックを多量に含む。2区のみ分布。
	Ⅲd	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cmの円礫を多量に含む。調査区北半に分布。石敷き遺構か。
	Ⅳ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物粒を多量に含む。大広間跡の外に分布。旧表土層。今年度の調査では確認されず。
	Ⅴ	10YR8/2	灰白色	シルト質粘土	有	有	地山層。

3．検出遺構

(1)大広間跡

今回の調査で新たに確認された礎石跡（KS-460～470・478～481）と以前の調査で確認された礎石跡（KS-28・125・127・128・129)、大広間に関連する遺構（KS-130・471・472・482・487・488・490～492)、雨落ち溝跡（KS-53) について記述する。今回の調査で確認された礎石跡は礎石は残っておらず、根固め石のみが検出された。検出面はⅢb層上面で、Ⅲa層に覆われる。

・KS-125礎石跡　平面形は、大部分を撹乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は、東西80cm 以上、南北100cm 以上である。根固め石は、径５～10cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大34cm である。KS-125の南側に小礫の集石が広がり、第5次調査ではその集石を礎石跡としていたが、今回の調査結果により変更する。

・KS-128礎石跡　平面形は、西側の半分を撹乱に切られているがほぼ円形である。規模は、東西140cm 以上、南北120cm 以上である。根固め石の大きさは、径５～10cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大18cm である。

・KS-469礎石跡　KS-128の西約80cm で検出された。平面形は大部分を撹乱に切られているが、不整円形である。規模は東西130cm 以上、南北120cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大20cm である。

・KS-470礎石跡　KS-469の西約1mで検出された。平面形は大部分を撹乱に切られているが、不整円形である。規模は東西110cm 以上、南北200cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大16cm である。中央部に直径約90cm の礎石抜き取り穴が確認された。

・KS-481礎石跡　平面形は不整円形である。規模は東西130cm 以上、南北110cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。

・KS-460礎石跡　平面形は、大部分を撹乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は、東西90cm 以上、南北100cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大20cm である。なお、第7次調査でKS-460の西隣に検出されたKS-219礎石跡とした遺構は今回の調査で、基本層のⅢd層であることが確認された。

・KS-461礎石跡　KS-460の東約80cmで検出された。平面形は、大部分を撹乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は東西100cm、南北90cm である。根固め石の大きさは径５～20cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大38cm である。

・KS-462礎石跡　KS-461の東約70cm で検出された。平面形はほぼ円形である。規模は、東西170cm、南北160cm 以上である。根固め石の大きさは径５～10cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大16cm である。

・KS-463礎石跡　KS-462の東約50cm で検出された。平面形はほぼ円形である。規模は、東西150cm 以上、南北170cm 以上である。根固め石の大きさは径５～10cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大16cm 以上である。

・KS-464礎石跡　KS-463の東約１mで検出された。平面形は、大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西110cm 以上、南北90cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大18cm である。

・KS-465礎石跡　KS-464の東約１mで検出された。平面形は、大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西110cm 以上、南北150cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大20cm である。中央部に直径約75cm 以上の礎石抜き取り穴が確認された。

・KS-479礎石跡　KS-465の東約１mで検出された。平面形は、大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。

規模は東西100cm 以上、南北120cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大26cm 以上である。KS-479の直上からKS-482石材を検出している。

・KS-466礎石跡　KS-464の南約1.2mで検出された。平面形は、大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西80cm 以上、南北100cm 以上である。根固め石の大きさは径５～15cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大14cm である。

・KS-467礎石跡　KS-465の南約１mで検出された。平面形は不整円形である。規模は東西160cm、南北170cm である。根固め石の大きさは径５～15cm である。

・KS-127礎石跡　KS-128の南約80cm で検出された。平面形は、西側の一部を撹乱に切られているが不整円形である。規模は、東西110cm 以上、南北170cm 以上である。根固め石は、径５～10cm である。KS-127の下層からKS-477が検出された。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大14cm である。なお、第5次調査でKS-127の西側で検出されたKS-126礎石跡とした遺構は、今回の調査で撹乱であることを確認した。

・KS-129礎石跡　KS-468の北約1.7mで検出された。平面形は、不整円形である。規模は、東西120cm 以上、南北80cm 以上である。根固め石の大きさは、径５～10cm である。

・KS-130礎石　KS-129に一部重なるように礎石のみが検出された。加工の見られない自然石で、長軸98cm、短軸80cm、厚さ44cm である。掘り方が確認できず、柱筋に乗っていないことや上面が傾いていることから、原位置を保っていないと考えられる。

・KS-468礎石跡　KS-4の北約50cm で検出された。平面形は円形である。規模は東西150cm、南北160cm である。根固め石の大きさは径５～20cm である。

・KS-28礎石跡　KS-22の北約60cm で検出された。大広間広縁の東辺に位置する。平面形は不整円形である。規模は東西80cm、南北60cm である。遺構の北側にハツリによる加工が見られる長径25cm、短径15cm の石材が検出された。

・KS-478礎石跡　KS-23の北約80cm で検出された。大広間落縁の東辺に位置する。礎石、根固め石ともに抜き取られていた。平面形は円形である。規模は径50cm である。

・KS-472礎石　KS-460の北約1.4mで礎石のみが検出された。加工の見られない自然石で、長軸70cm、短軸60cm、厚さ52cm である。掘り方は深さ16cm で根固めは確認されず、柱筋に乗っていないことや上面が傾いていることから、原位置を保っていないと考えられる。

・KS-480礎石跡　KS-460の南約60cm で検出された。平面形は大部分を撹乱に切られているが、ほぼ円形である。規模は東西100cm 以上、南北120cm 以上である。根固め石の大きさは径５～10cm である。撹乱断面で確認された掘り方の深さは最大10cm である。

・KS-481礎石跡　KS-460の北約6.8mで検出された。平面形はほぼ円形である。規模は東西130cm、南北110cm 以上である。根固め石の大きさは径５～20cm である。

・KS-471石材　KS-470の南約2mで検出された。長径25cm、短径18cmの自然石がである。検出面はⅢa層上面である。

・KS-482石材　KS-479礎石跡の直上から、長径30cm、短径22cm の石材が検出された。ハツリによる加工が見られる検出面はⅢa層上面である。

・KS-487　２区中央部より検出された。規模は、幅60cm、深さ18cm である。

・KS-488　２区中央部より検出された。規模は、幅12cm、深さ24cm である。KS-486より新しい。

・KS-490　２区北部より検出された。規模は、上幅40cm、深さ10cm である。

・KS-491　３区北東部より検出された。規模は、幅22cm、深さ18cm である。

・KS-492　３区北東部より検出された。規模は、幅28cm、深さ19cm である。

・KS-495　４区北東部より検出された。規模は、上幅40cm 以上、深さ12cm である。

・KS-53雨落ち溝跡　第１次調査で確認した雨落ち溝跡の北側を検出した。縁石はほとんど抜き取られており、両縁石の間に充填されていた玉石のみが帯状に検出された。

⑵大広間に先行する近世遺構

・石敷き遺構　Ⅲb層直下で検出した。基本層のⅢd層に対応し、径２～10cm の礫を主体とする砂礫層である。分布は、４区東部KS-251の西側壁面から大広間北西部にかけて拡がっており、断続的ではあるが南北約17.5m、東西約30m の拡がりが確認された。なお、第15次調査において、KS-251の東側壁面でⅢe層（今年度調査のⅢb層対応）の直下からⅢd層に対応すると考えられる石敷きが南北約７m、東西約３mの拡がりで確認されている。

・KS-485　2区中央部より検出された溝状の遺構である。石敷き遺構を切り、北に伸びる。撹乱の断面で確認できる南北幅は約3.5m、規模は、上幅148cm、深さ36cm である。KS-486より古い。

・KS-486　２区中央部より検出された。規模は、幅34cm、深さ10cm 以上である。KS-485より新しい。

・KS-489　２区北部より検出された。規模は、上幅84cm 以上、深さ16cm である。KS-485より古い。

・KS-493　３区北部のKS-469直下に検出された。規模は、上幅28cm、深さ12cm である。

⑶近世以前の遺構

掘り込み面はⅤ層（地山）上面である。撹乱の壁面や遺構壁面で確認している。近世整地層より下位の遺構として近世以前と一括したが、埋土中からの遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

・KS-473　４区北東部のKS-251壁面より検出された。規模は、上幅55cm、深さ25cm である。KS-474より新しい。

・KS-474　４区北東部のKS-251壁面より検出された。規模は、上幅70cm 以上、深さ25cm である。KS-473より古い。

・KS-475　４区北東部より検出された。規模は、幅12cm、深さ16cm である。径４～６cm の円礫が多量に見られる。

・KS-476　４区北東部より検出されたピットである。規模は、幅12cm、深さ24cm である。

・KS-477　４区北東部より検出された。規模は、幅12cm、深さ16cm である。径５～８cm の円礫が多量に見られる。KS-127より古い。

・KS-483　２区南西部より検出された。規模は、上幅168cm 以上、深さ16cm である。KS-484より新しい。

・KS-484　２区南西部より検出された。規模は、上幅48cm 以上、深さ18cm である。KS-483より古い。

・KS-494　４区北東部より検出された。規模は、上幅40cm 以上、深さ12cm である。

⑷近代の遺構

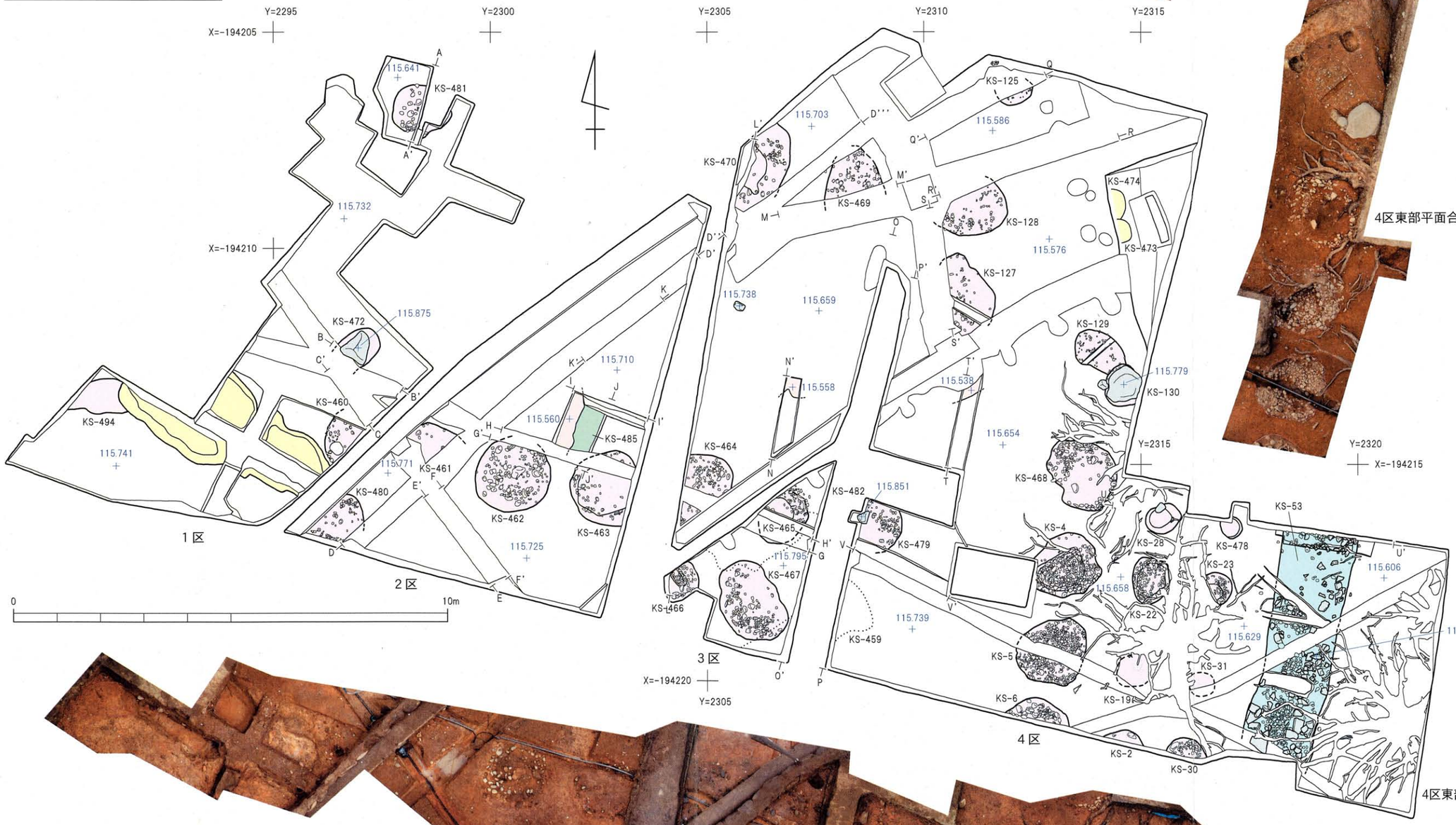
・KS-251　大広間跡を一部壊しながらその北側にみられる大規模な溝状の遺構である。検出面はⅢ層上面である。これまでの調査成果から、全長は約90mに及び全体形は両側が開いた「コ」字状をなす。規模は上端幅４m、下端幅１mで深さは約1.6mである。

・KS-459　３区南部から４区南部にかけて、Ⅱg層の上面で検出された。炭化物が多く混じる焼土遺構である。規模は東西４m、南北１mである。陶磁器、ガラス、レンガ、鉄釘などが多数出土した。

凡例

- 礎石（根固め）跡
- KS-53 雨落ち溝跡
- 溝状遺構
- ピット・土坑
- 石敷き（Ⅲe 層）範囲
- 礎石・その他石材
- ＋ レベル（標高・単位 m）

3・4 区北部平面合成写真(1/100)

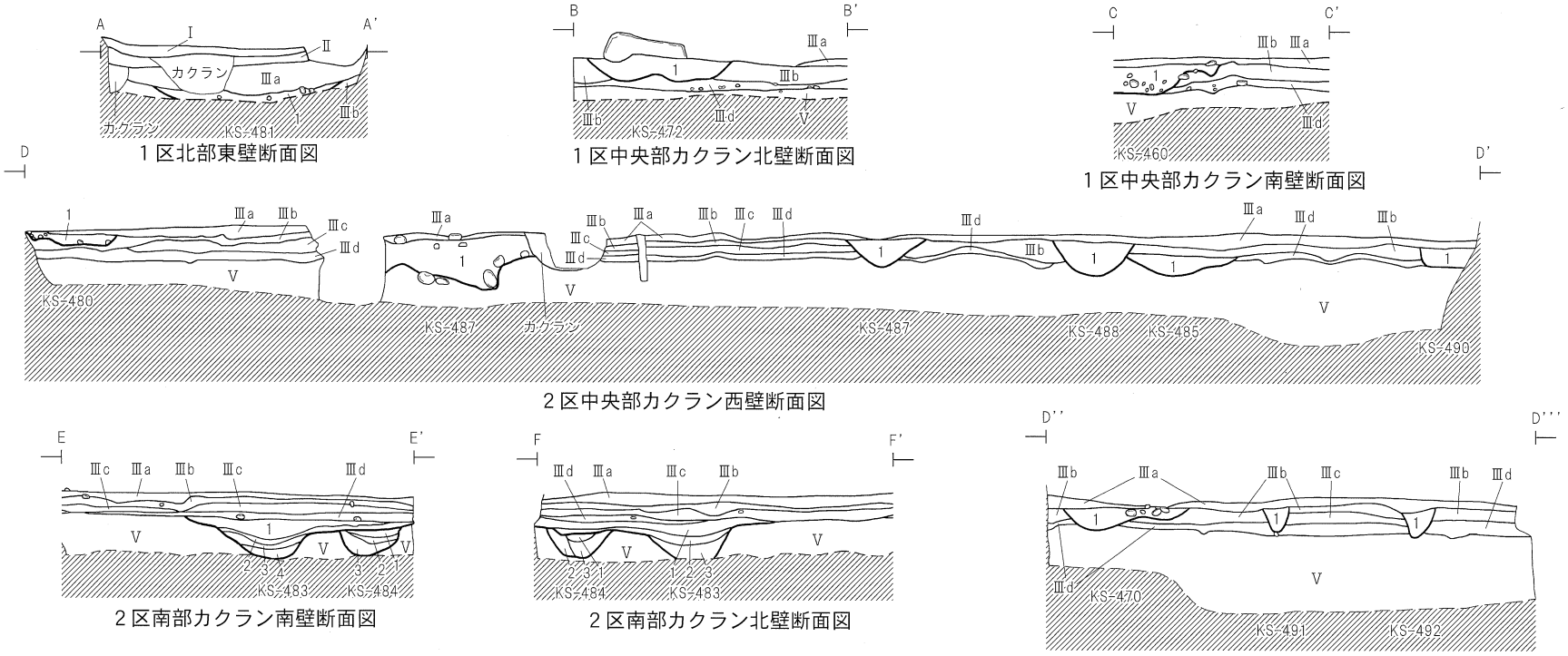


4区東部平面合成写真(1/100)

4区東部雨落ち溝跡平面合成写真(1/100)

17次調査区南部平面合成写真(1/100)

第13図　第17次調査全体遺構平面図(1/100)



1区北部東壁断面図

1区中央部カクラン北壁断面図

1区中央部カクラン南壁断面図

2区中央部カクラン西壁断面図

2区南部カクラン南壁断面図

2区南部カクラン北壁断面図

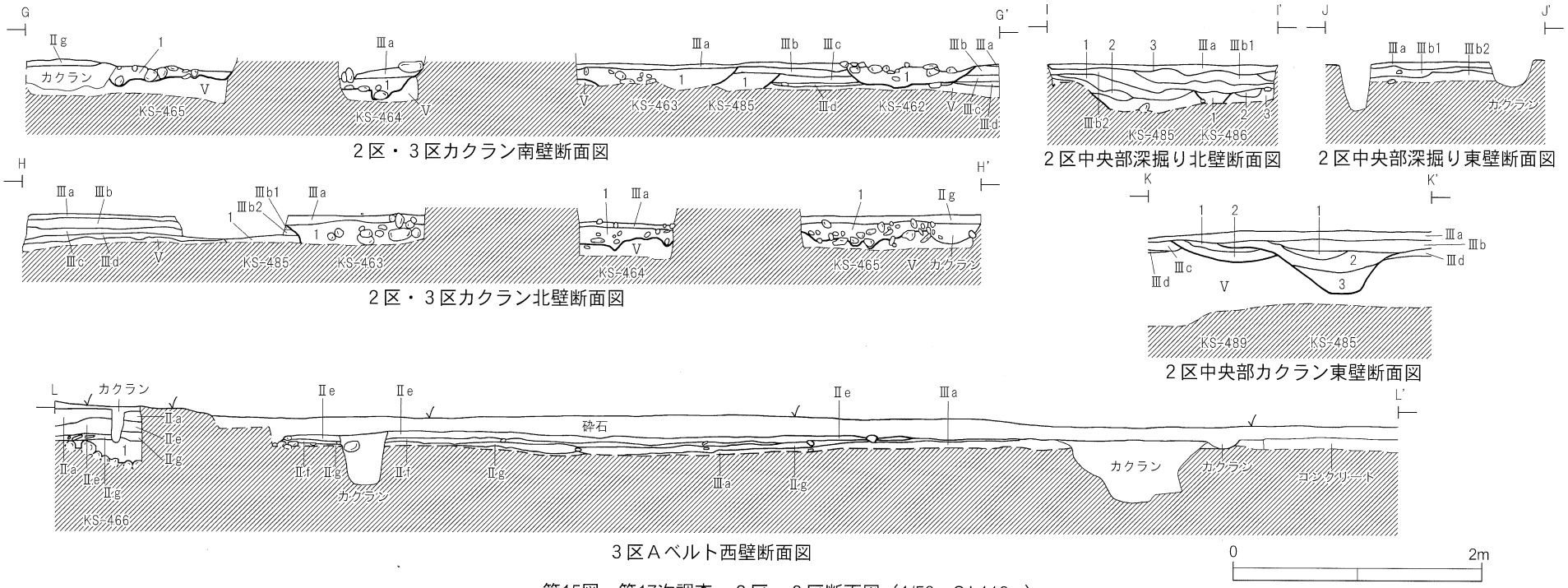
3区北部カクラン北壁断面図

第14図　第17次調査　1区・2区・3区断面図（1/50・S.L116m）

0　2m

第5表　遺構注記表

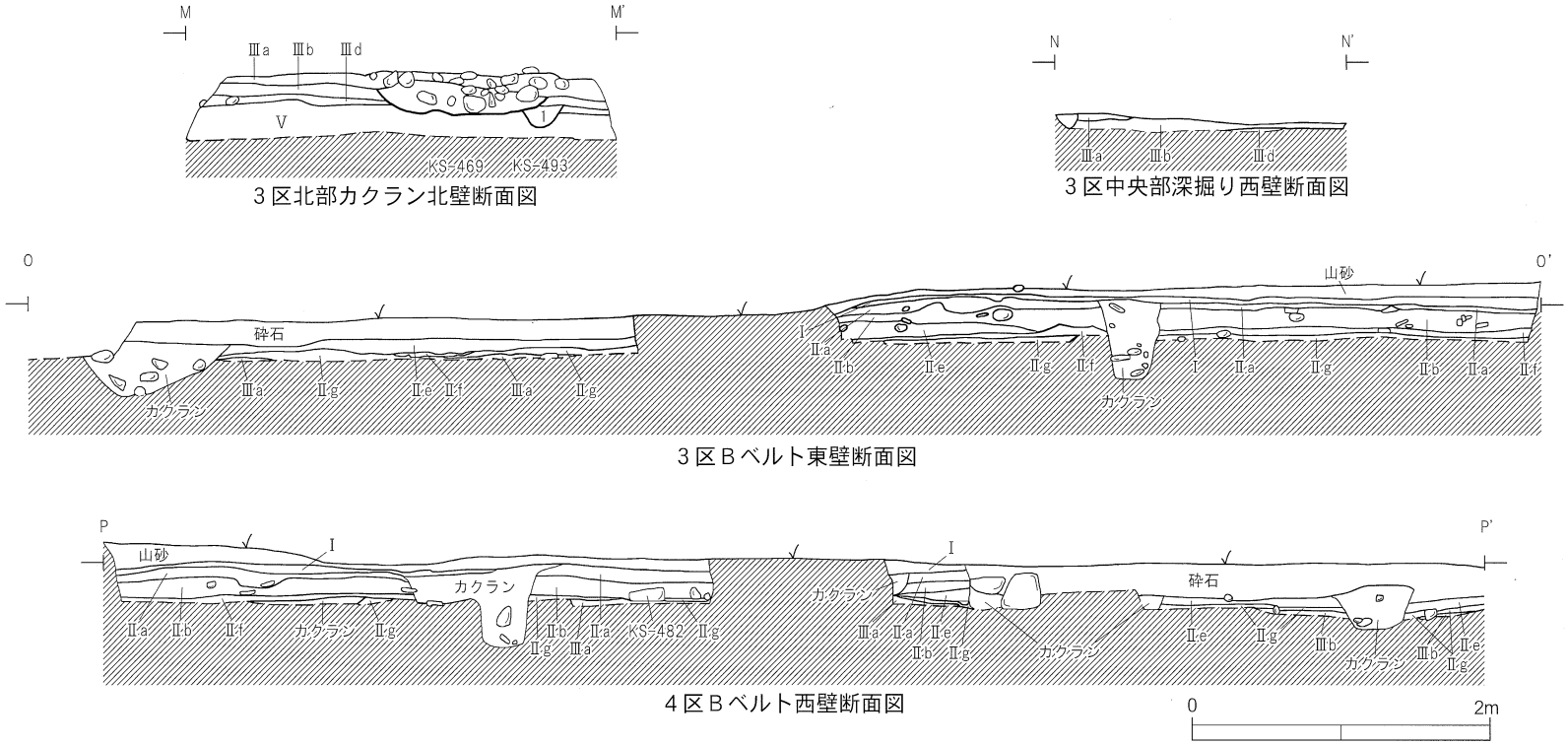
遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
基本層	1・2・3	Ⅰ	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	やや有	やや有	表土。
		Ⅱ	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや有	やや有	10YR4/4褐色のブロックを少量含む。
		Ⅲa	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	大広間跡を中心に分布。礎石設置後の化粧土か。
		Ⅲb	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロックを多量に含む。地山直上整地層。
		Ⅲc	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	礫や白色粘土ブロックを多量に含む。2区のみ分布。
		Ⅲd	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cmの円礫を多量に含む。調査区北半に分布。石敷き遺構か。
		Ⅴ	10YR8/2	灰白色	シルト質粘土	有	有	地山層。
KS-481	1	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	径5～20cmの円礫を含む。
KS-472	1	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	やや有	有	
KS-460	1	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	やや有	有	径4～10cmの円礫を含む。
KS-480	2	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	有	径5～10cmの円礫を含む。白色粘土ブロックを多量に含む。
KS-461	2	埋土1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	有	径6～20cmの円礫を含む。
KS-487	2	埋土1	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	やや有	有	径2～4cmの礫を含む。酸化鉄を含む。
KS-488	2	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄、炭化物を多く含む。
KS-485	2	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を多量に含む。径4cmの礫や炭化物を含む。
KS-490	2	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	有	径2～4cmの礫を含む。
KS-483	2	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
		埋土2	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	
		埋土3	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	有	酸化鉄を含む。
		埋土4	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	有	有	酸化鉄、炭化物を含む。
KS-484	2	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	有	有	白色粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
		埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘土	有	有	白色粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
		埋土3	10YR5/8	黄褐色	粘土	有	有	白色粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。
KS-470	3	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	径5～15cmの円礫、白色粘土ブロックを含む。
KS-491	3	埋土1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	礫を含む。
KS-492	3	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロック、酸化鉄、礫を含む。



第15図　第17次調査　2区・3区断面図（1/50・S.L116m）

第6表　遺構注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
基本層	2・3	Ⅱe	2.5Y6/2	灰褐色	粘土	有	有	白色粘土ブロック、礫を多く含む。公園整備に伴う盛土。
		Ⅱf	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	炭化物を多量に含む。
		Ⅱg	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	有	有	大広間廃絶直後の旧表土層か。
		Ⅲa	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	大広間跡を中心に分布。礎石設置後の化粧土か。
		Ⅲb1	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロックを多量に含む。地山直上整地層。
		Ⅲb2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	粘土ブロック、白色シルトブロックを含む。
		Ⅲc	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	礫や白色粘土ブロックを多量に含む。2区のみ分布。
		Ⅲd	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cmの円礫を多量に含む。調査区北半に分布。石敷き遺構か。
		V	10YR8/2	灰白色	シルト質粘土	有	有	地山層。
KS-462	2	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	径5～20cmの円礫を含む。
KS-463	2	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	やや有	有	径6～20cmの円礫を含む。
KS-464	3	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	径5～10cmの円礫を含む。酸化鉄を含む
KS-465	3	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	有	径5～10cmの円礫を含む。白色粘土ブロックを多量に含む。
KS-485	2	埋土1	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロック、酸化鉄を含む。
		埋土2	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	有	有	粘土ブロック、酸化鉄を多量に含む。炭化物を少量含む。
		埋土3	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を多量に含む。
KS-486	2	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	有	
KS-489	2	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を多量に含む。
		埋土2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	径2～3cmの礫を含む。
KS-466	2	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を含む。



3区北部カクラン北壁断面図

3区中央部深掘り西壁断面図

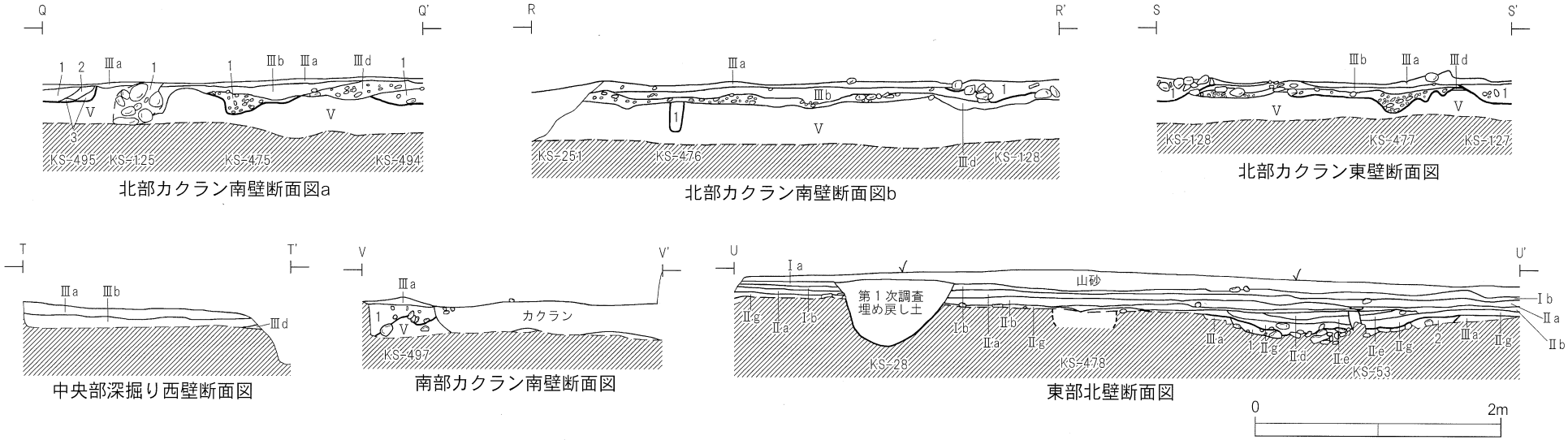
3区Bベルト東壁断面図

4区Bベルト西壁断面図

第16図　第17次調査　3区・4区断面図（1/50・S.L116m）

第7表　遺構注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
基本層	3・4	Ⅰ	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	有	有	表土。
		Ⅱa	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	有	有	
		Ⅱb	10YR4/6	褐色	シルト質粘土	有	有	白色粘土ブロック、小礫を含む。
		Ⅱe	2.5Y6/2	灰褐色	粘土	有	有	白色粘土ブロック、礫を多く含む。公園整備に伴う盛土。
		Ⅱf	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	炭化物を多量に含む。
		Ⅱg	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	有	有	大広間廃絶直後の旧表土層か。
		Ⅲa	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	大広間跡を中心に分布。礎石設置後の化粧土か。
		Ⅲb	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロックを多量に含む。地山直上整地層。
		Ⅲd	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cmの円礫を多量に含む。調査区北半に分布。石敷き遺構か。
		Ⅴ	10YR8/2	灰白色	シルト質粘土	有	有	地山層。
KS-469	3	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	径5～20cmの円礫を含む。
KS-493	3	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	やや有	有	径6～20cmの円礫を含む。



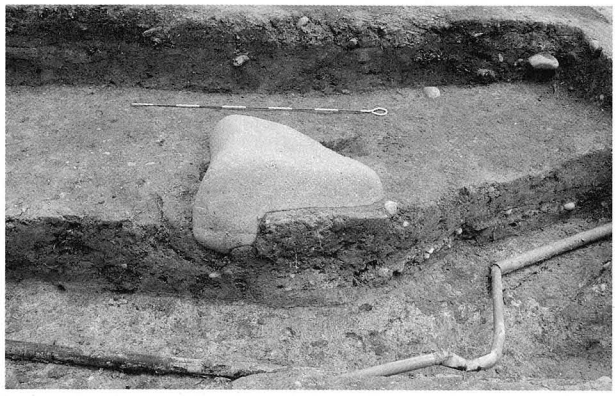
第17図　第17次調査　４区断面図（1/50・S.L116m）

第８表　遺構注記表

遺構番号	調査区	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
基本層	4	Ⅰa	10YR8/6	黄橙色	粘土	有	有	表土。
		Ⅰb	10YR5/1	褐灰色	砂質シルト	有	やや有	
		Ⅱa	10YR8/6	黄橙色	粘土	有	有	
		Ⅱb	10YR8/6	黄橙色	粘土	有	有	
		Ⅱc	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	炭化物を多量に含む。
		Ⅱd	10YR7/8	黄橙色	粘土	有	有	10YR4/1褐灰色シルトブロックが混じる。
		Ⅱe	10YR8/1	灰白色	粘土	有	有	白色粘土ブロックを多量に含む。10YR8/4浅黄橙色粘土ブロックが混じる。
		Ⅱg	10YR6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	Ⅲ層直上整地層。大広間廃絶直後の旧表土層か。
		Ⅲa	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	有	大広間跡を中心に分布。礎石設置後の化粧土か。
		Ⅲb	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	白色粘土ブロックを多量に含む。地山直上整地層。
		Ⅲd	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cm の円礫を多量に含む。調査区北半に分布。石敷き遺構か。
		Ⅴ	10YR8/2	灰白色	シルト質粘土	有	有	地山層。
KS-495	4	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	
		埋土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや有	やや有	Ⅲd 層が流入し、砂礫を多く含む。
		埋土3	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	有	有	
KS-125	4	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	やや有	有	径5～20cm の円礫を含む。
KS-475	4	埋土1	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cm の円礫を多量に含む。
KS-494	4	埋土1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	礫を少量含む。
KS-476	4	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや有	有	
KS-128	4	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	有	径5～10cm の円礫を含む。
KS-477	4	埋土1	10YR5/3	褐色	砂質シルト	やや有	無	径2～10cm の円礫を多量に含む。
KS-127	4	埋土1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	やや有	有	計2～6cm の円礫を含む。
KS-479	4	埋土1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	有	径5～10cm の円礫を含む。
KS-53	4	埋土1	10YR7/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	有	やや有	10YR8/3浅黄橙色粘土の小ブロックが混じる。
		埋土2	10YR8/3	浅黄橙色	粘土質シルト	有	有	10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックが混じる。

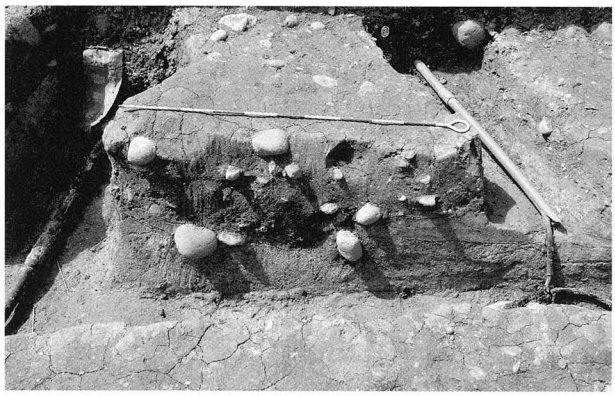
調査区全景（東から）

1区KS-481検出状況（西から）

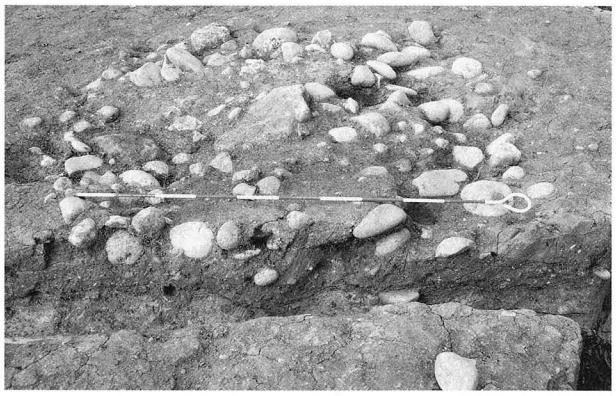


1区KS-472断面（南から）

1区KS-460検出状況（南西から）



2区KS-461断面（南東から）

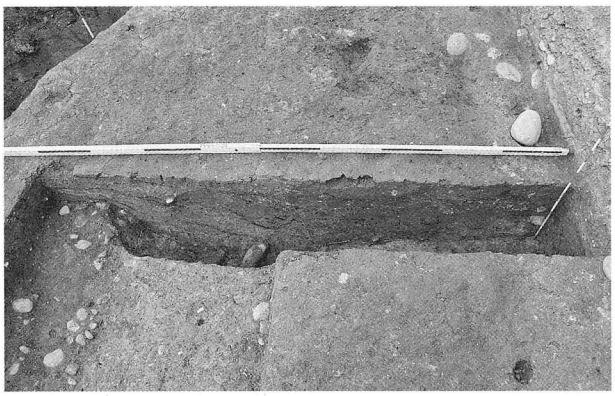


2区KS-462検出状況（北西から）

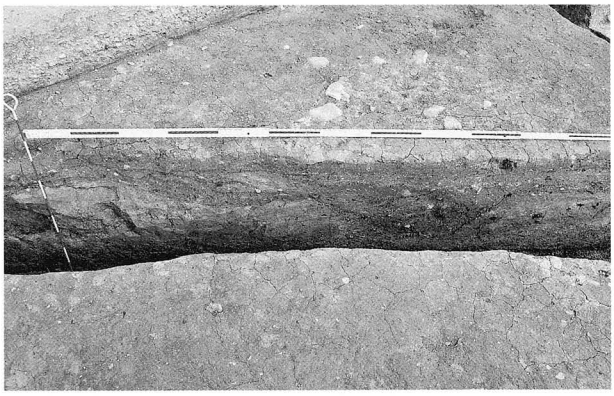
2区KS-463検出状況（北西から）

2区石敷き遺構検出状況（南西から）

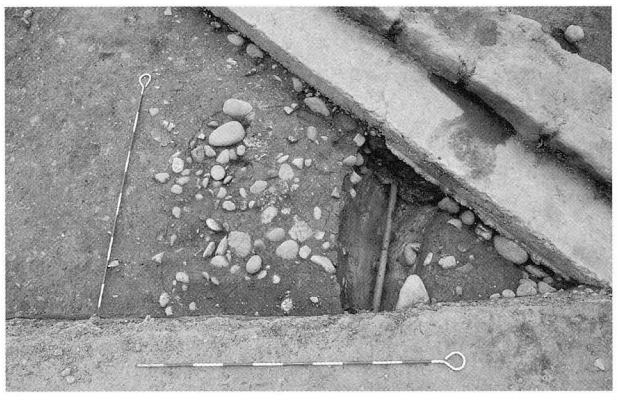
第18図



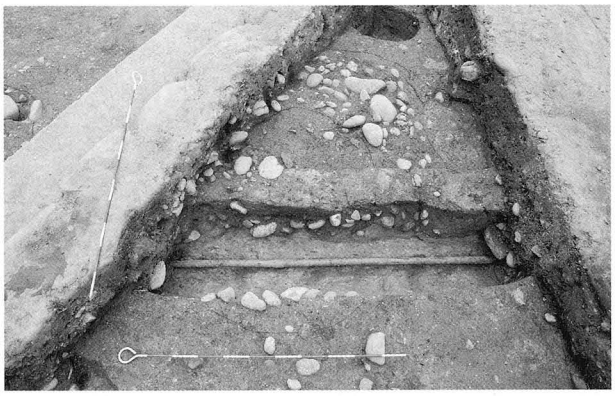
2 区KS-485・486断面（南西から）



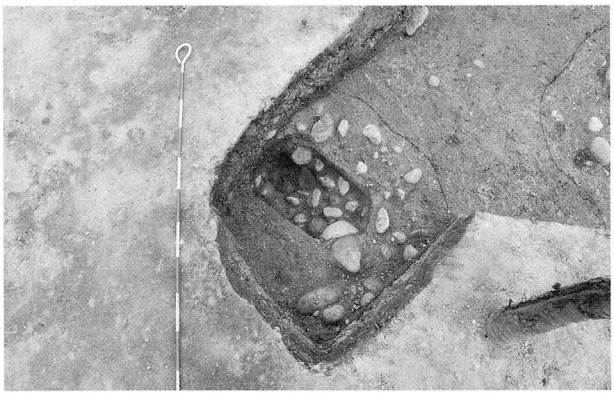
2 区KS-485・489断面（北西から）



3 区KS-464検出状況（西から）



3 区KS-465断面（南西から）



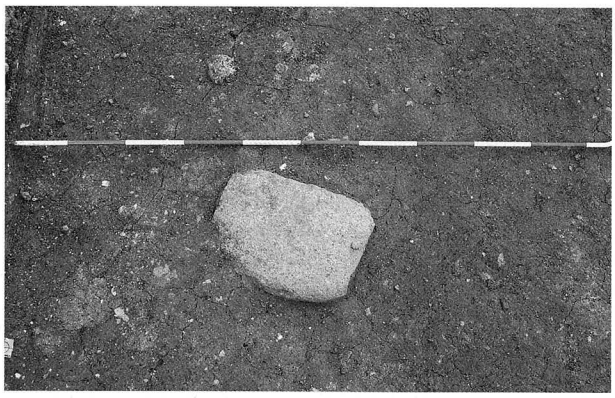
3 区KS-466検出状況（南西から）

3 区KS-467検出状況（南西から）

3 区KS-470検出状況（北西から）

3 区KS-469・493断面（南東から）

第19図



3区KS-471検出状況（南から）

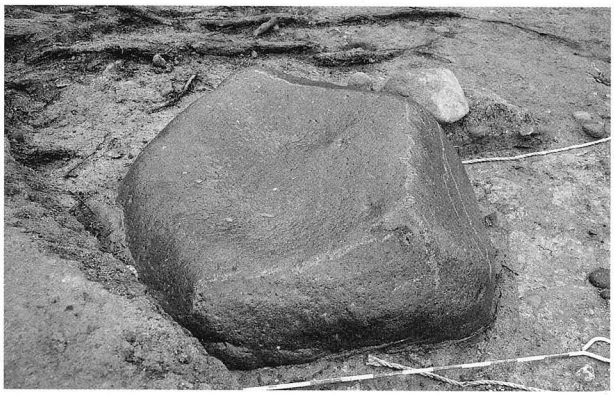
3区石敷き遺構検出状況（北から）

4区KS-495・125・476断面（北西から）

4区KS-128検出状況（北西から）

4区KS-477断面（西から）

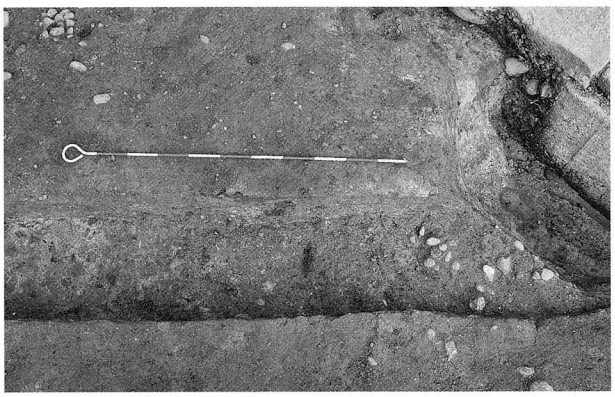
4区KS-129検出状況（北西から）



4区KS-130検出状況（東から）

4区KS-468検出状況（北から）

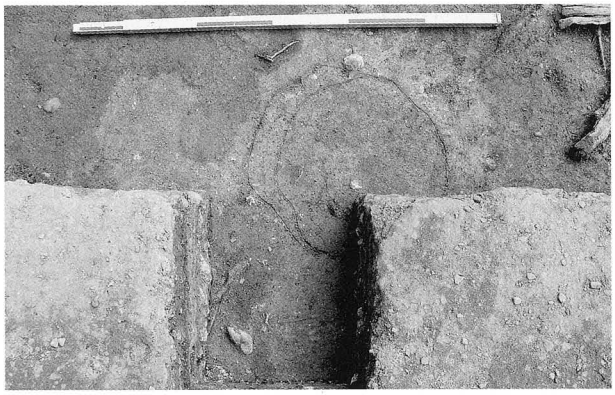
第20図



4区石敷き遺構検出状況（東から）

4区KS-479・482検出状況（北から）

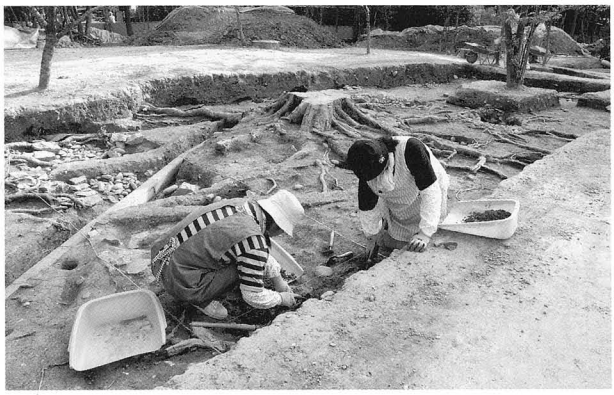
4区KS-28検出状況（南から）



4区KS-478検出状況（北から）

4区KS-53雨落ち溝跡断ち割り断面（北から）

銅釘（No.70）出土状況



4区作業風景（北東から）

現地説明会風景（北から）

第21図

遺物

(1)陶磁器他（第9表）

①磁器、陶器

磁器は64点、陶器は43点出土した。ほとんどが表土、撹乱、近代以降の盛土層からの出土である。いずれも小片で器種、年代等詳細のわかるものは非常に少ない。Ⅱ層より出土した瀬戸美濃産の染付端反碗（19c前半）１点を図示した（第23図１）。

第９表　第17次調査出土陶磁器他数量表

遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	計
表採	4				4
撹乱	5	7			12
Ⅰ	11	7	3		21
Ⅱ		1			1
Ⅱe	2	1			3
Ⅱf	11	8			19
Ⅱg	11	11	4	2	28
KS-459・2	20	8			28
計	64	43	7	2	116

②土師質土器・瓦質土器

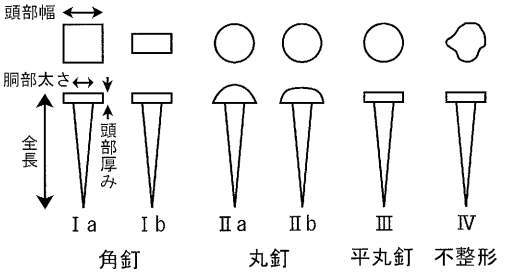
土師質土器は７点、瓦質土器は２点出土した。土師質土器は、ほとんどが口径・底径の復元が不可能な小片である。Ⅰ・Ⅱ層から出土した。瓦質土器はともに破片資料で、器種は不明である。Ⅱ層から出土している。

(2)金属製品（第10表）

金属製品は銅釘、銭貨、鉄釘などが出土した。

①銅釘

今回の調査では50点出土しており、本丸大広間跡関連調査での全出土点数は931点となる。これまでと同様、頭部形状の違いに基づき分類すると、Ⅰ類（角）４点、Ⅱ類（丸）３点、Ⅲ類（平丸）32点、Ⅳ類（不整形）10点、X類（形状不明）１点である。Ⅰ類とⅢ類を点ずつ図した（第23図２～８）。全長は、Ⅰ類が17～28㎜、Ⅱ類が20～28㎜、Ⅲ類が28～30㎜に集中する。Ⅳ類は20～30㎜のものが多い。これは、これまでの分析結果と同じ傾向を示している。詳しくは、平成16年度に刊行した「仙台城跡５」出土遺物銅釘の項および考察を参照されたい。銅釘の分類基準についても同報告書に準拠している。



第22図　銅釘類型模式図・計測部位

②銭貨

２点出土し、江戸時代のものは寛永通宝１点である（第23図９）。明治以降の一銭銅貨が1点、Ⅱ層から出土している。

③鉄釘

13点出土した。ほとんどがⅠ・Ⅱ層から出土しているが、４区でⅢa層から１点出土している。

第10表　第17次調査出土金属製品数量表

遺構・層位	銅釘								その他銅製品	銭貨	鉄釘	その他鉄製品	計
	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲ	Ⅳ	X					
表採											1		1
撹乱				1									1
Ⅱ						1							1
Ⅱd						1					1		2
Ⅱe	2					12	3					1	18
Ⅱf		1			1	5				1	5	3	16
Ⅱg						6	3	1	2		3	2	17
Ⅲ層上									1				1
Ⅲa層		1	1			5	4		2		1	1	15
KS－53・埋土						2							2
KS－130・2										1			1
KS－459・2									1		2		3
計	2	2	1	1	1	32	10	1	6	2	13	7	78

⑶瓦（第11表）

瓦は総計1,101点出土し、このうち丸瓦が223点、平瓦が806点で併せて全体の93％を占める。また、出土層位別では撹乱や近代以降の盛土層・遺構から出土したものが圧倒的に多い。

①軒丸瓦

９点出土した。瓦当文様の判別可能なものは５点あり、三巴文３点、珠文三巴文１点、無文１点である。

②軒平瓦

軒平瓦は２点出土した。主文様は不明であるが唐草がみられるもの１点、同じく蔓草がみられるもの１点である。また、滴水瓦は２点出土した。瓦当文様の判別可能なものは１点あり、菊花文の滴水瓦（第23図10）が出土している。文様が不明の滴水瓦（第23図11）１点出土した。

③軒桟瓦

１点出土した。瓦当文様は不明である。

④棟瓦

37点出土した。冠伏間１点、角桟伏間３点、伏間瓦１点、輪違い８点、面戸瓦１点が出土した。面戸瓦には刻印が見られる。輪違い１点（第23図12）、面戸瓦（第23図13）を図示した。

⑤その他の瓦

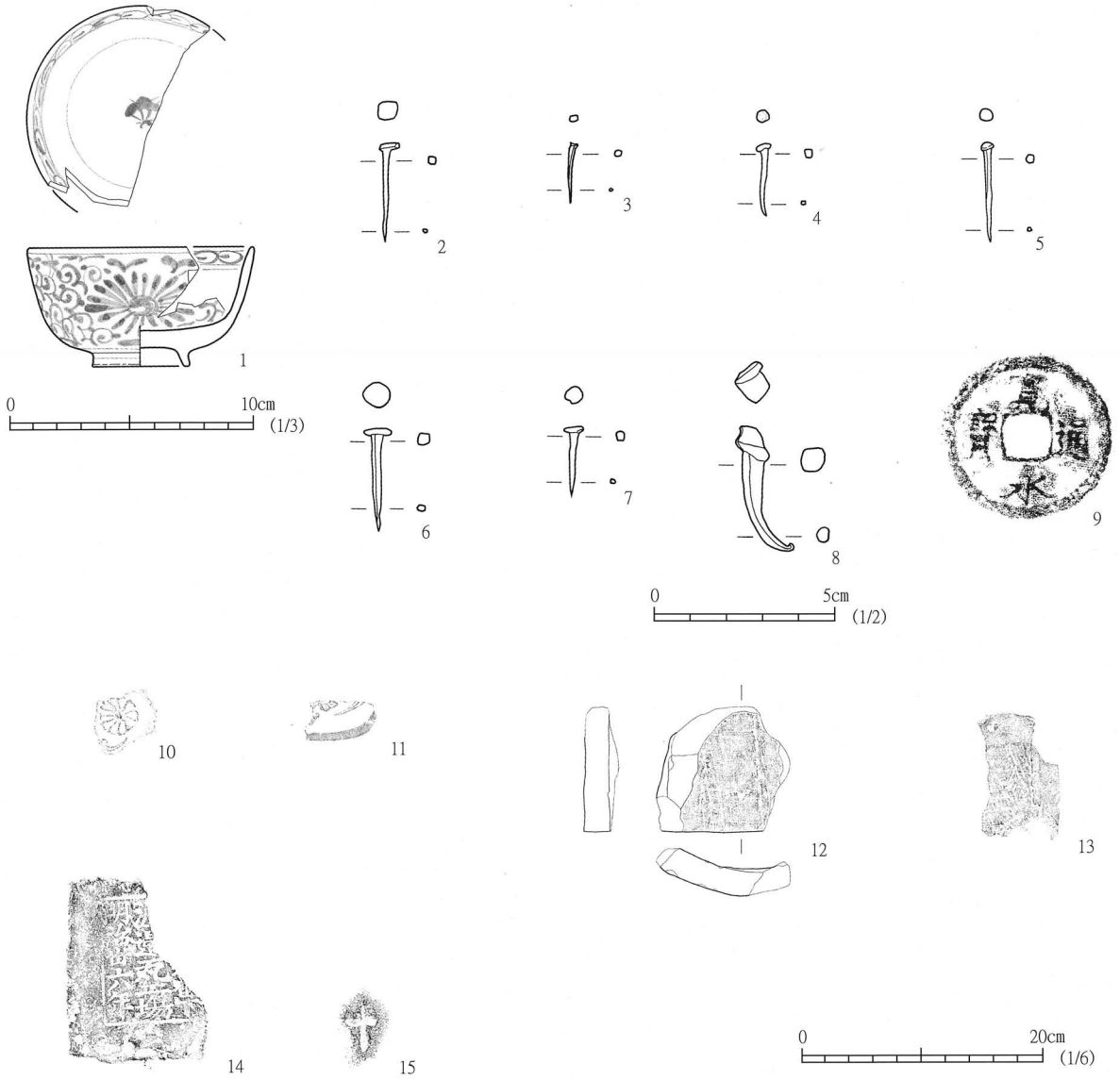
塀瓦の駒巴７点、平板（厚）３点、桟付平板11点、水切り１点、Ｔ字瓦１点が出土した。

⑥刻印

刻印のある瓦は２点（第23図14・15）出土した。ともに平瓦である。14は「仙台北八番丁渡邉（欠損）瓦工場明治卅六年」の刻印が見られる。昨年の調査でも同様の瓦は４点出土している。

第11表　第17次調査出土瓦数量表

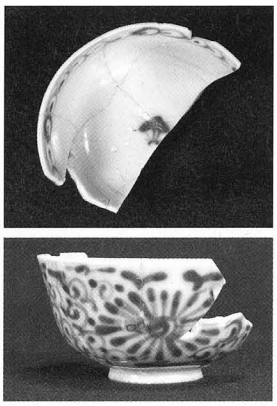
遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	滴水	軒桟	桟瓦	冠伏間	角桟伏間	伏間	輪違	面戸	駒巴	平板厚	水切	桟付平板	T字	不明	計
表採	13	33							1					1	1				49
撹乱	20	94	2	1	2		9				2					2		1	133
Ⅰ	87	327	1			1	1	1	1	1	3		4	1	3	2	1	1	435
Ⅱd		2																	2
Ⅱf		2																	2
Ⅱg	91	328	6	1			1		1		2	1	3	1	4	7		1	447
Ⅲa	12	20									1								33
計	223	806	9	2	2	1	11	1	3	1	8	1	7	3	8	11	1	3	1101



第23図　第17次調査出土遺物（１：S＝1/3、２～９：S＝1/2、10～15：S＝1/6）

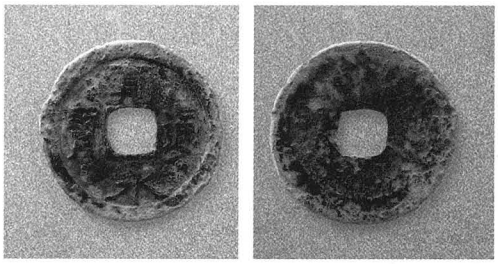
第12表　17次調査出土遺物観察表

番号	種類	遺物番号	遺構・層位	法量（mm・g）	備考	写真
1	磁器	142	Ⅱg	口径（94）　器高50　底径40	染付端反碗　瀬戸美濃　19ｃ前～中	1
2	銅釘	85	Ⅱe	全長27.9　頭部幅5.6　胴部太さ2.3　重量0.4	頭部形状角Ⅰa類	2
3	銅釘	19	Ⅱb	全長16.9　頭部幅2.7　胴部太さ1.9　重量0.1	頭部形状角Ⅰb類	3
4	銅釘	104	Ⅲa	全長19.8　頭部幅3.6　胴部太さ2.0　重量0.3	頭部形状丸Ⅱa類　鍍金	4
5	銅釘	115	撹乱	全長27.5　頭部幅3.8　胴部太さ2.2　重量0.4	頭部形状丸Ⅱb類	5
6	銅釘	109	Ⅱe	全長29.1　頭部幅7.6　胴部太さ2.5　重量1.0	頭部形状平丸Ⅲ類	6
7	銅釘	91	Ⅱg	全長20.2　頭部幅5.7　胴部太さ2.3　重量0.4	頭部形状平丸Ⅲ類	7
8	銅釘	6	Ⅱg	全長40.1　頭部幅12.5　胴部太さ6.1　重量4.4	頭部形状不整形Ｘ類	8
9	古銭	9	KS-130 埋土1	外径23.6　穿径6.0	寛永通宝(新寛永)　完形	9
10	滴水瓦（菊花）	257	撹乱	重量72.1		10
11	滴水瓦(その他)	4	撹乱	重量44.8		11
12	輪違い	5	Ⅲa	重量276.1	刻印	12
13	面戸瓦	221	Ⅱg	重量169.6		13
14	平瓦（刻印）	247	表採	重量160.7	「仙台北八番丁渡邉（欠損）瓦工場明治卅六年」	14
15	平瓦（刻印）	250	Ⅰ	重量43.7	線刻	15



1

0　10cm (1/3)



9

0　5cm (1/2)

2

3

4

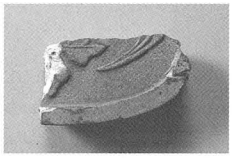
5

6

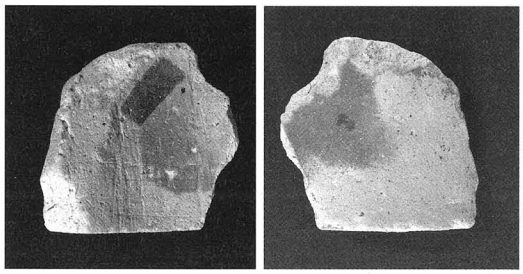
7

8

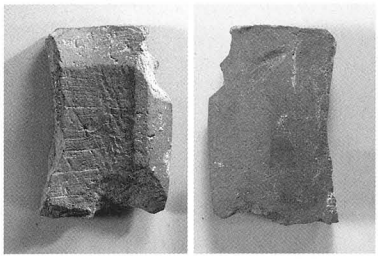
10



11



12



13

14

15

0　20cm (1/6)

第24図　第17次調査出土遺物（1：S＝1/3、2～8：S＝1/1、9：S＝1/2、10～15：S＝1/6）

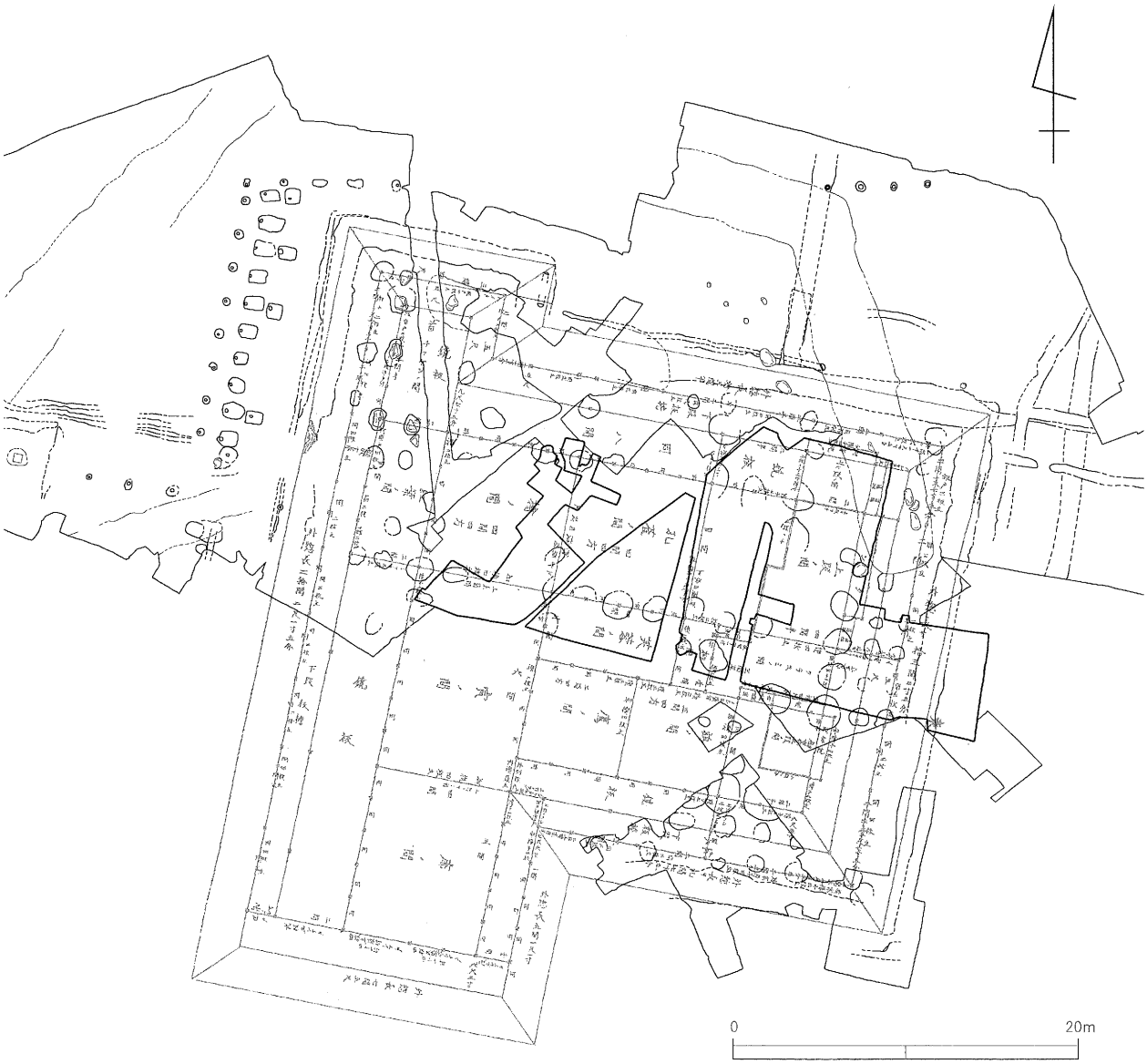
5．まとめ

第17次調査では、以下①～⑥の成果が得られた。

① 大広間内部北半にあたる場所で礎石跡および礎石を16基検出した。建物の中心付近で東西に並ぶ礎石跡（KS-460～465・479）や調査区北側でも、これと並行する礎石跡（KS-469・470・481）などを確認し、大広間の各部屋の位置や配置を検討する上で重要な成果が得られた。

② 今回の調査で検出された礎石跡について、中心点を推定し、隣り合う礎石跡の心々距離を測定した。その結果、KS-460とKS-461の間が162cm、KS-461とKS-462の間が194cm、KS-462とKS-463の間が208cm、KS-463とKS-464の間が204cm、KS-464とKS-465の間が197cm、KS-465とKS-479の間が194cm となった。この数値を柱間寸法に換算するとばらつきがあるが、これまで検出された礎石跡と総合的に検討すると、ほぼ６尺５寸（1寸は3.03cm、1尺は30.3cm とする。６尺５寸は約197cm に相当）となる。このことから、「６尺５寸」が大広間の柱間寸法の基準となっていることを再確認した。

③ 大広間の平面絵図は８種確認されている（「仙台城跡７」参照）。その中で『御本丸大広間地絵図』は座敷間名や柱位置のほか、座敷間の間数、建物外面の規模までが詳細に描かれている（絵図の観察についてはⅦ 絵図調査参照）。平成15年度に、仙台城跡調査指導委員である西和夫氏（神奈川大学工学部建築学科教授・建築史）により、第３次調査までの遺構平面図と『御本丸大広間地絵図』との合成図（１／50）が作成され、礎石跡の検出位置と絵図



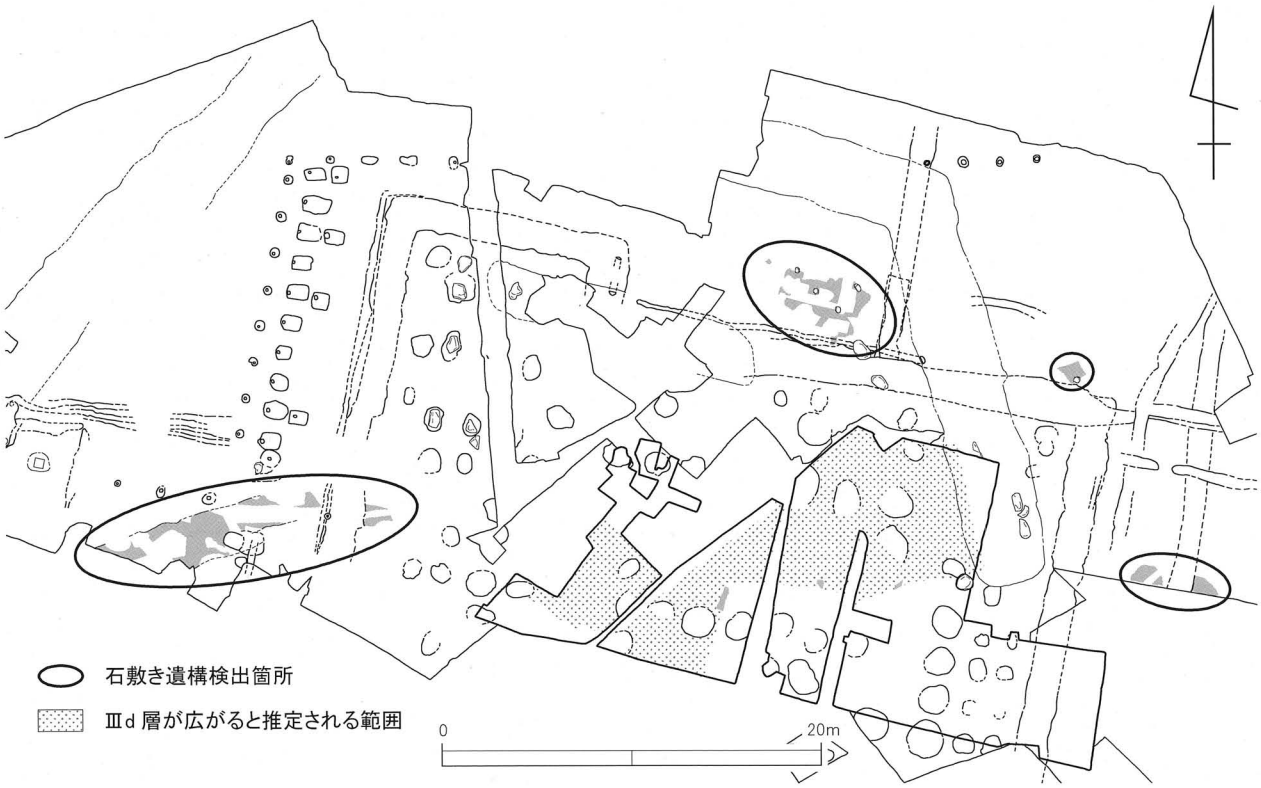
第25図 大広間跡遺構平面図と「御本丸大広間地絵図」の合成図（1/400） 太線が第17次調査区

が示している柱位置がほぼ一致することを指摘していただいている（「仙台城跡３」参照）が、今回までの調査成果をもとに作成した遺構平面図と『御本丸大広間地絵図』を合成すると、礎石跡の検出位置と絵図が示している柱位置が概ね一致していることがさらに検証された。

④　検出された礎石跡は大広間座敷部の各部屋を仕切る柱筋に位置している。部屋の内部にもいわゆる束石が１間ごとに存在した可能性が仙台城跡調査指導委員会で指摘されているが、今回の調査では長径30㎝前後の扁平な石材KS-471、KS-482の2基確認されたが、束石とは断定できなかった。大広間廃絶以後取り去られた可能性があるが、今後の調査でも確認していく必要がある。

⑤　大広間内部の整地層（Ⅲb・Ⅲc層）直下から、大広間に先行する石敷き遺構と対応するⅢd層を検出した。分布はKS-251西側壁面から大広間内部にかけて拡がっており、断片的ではあるが南北約17.5m、東西約30mの拡がりが確認された。Ⅲd層の上面レベルは115.40～115.50mである。第15次調査ではKS-251東側壁面でⅢd層に対応する石敷きが南北約７m、東西約３mの拡がりで確認されている。石敷きの上面レベルは115.47～115.51mとⅢd層と近似する。また、第12次調査では大広間の北側で検出した礎石建物跡と石敷きを検出し、石敷きの上面レベルは115.49～115.51mである。Ⅲd層とこれまで確認されている石敷きの検出レベルを比較すると近似しており、同一の遺構の可能性が強い。一方で、第15次調査で礎石（KS-432）１基と、第12次調査では礎石４基が石敷きに伴い検出されている。それぞれ雨落ち溝跡北東角の北30㎝、雨落ち溝跡の北1.5～3.5mで検出された。今回の調査では大広間内部で石敷きに伴う礎石は確認されていない。本調査で検出された石敷き遺構については、これまでの成果をもとに大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構である可能性とともに、一方では大広間建築時の整地に関わる地業の可能性についても想定しつつ、次年度以降の調査で、さらに検討していきたい。

⑥遺物は、陶器、磁器、土師質土器、銅釘、鉄釘、瓦などが出土した。大広間の建物に関連する遺物として銅釘が50点出土し、うち1点に鍍金が認められた。



第26図　大広間跡石敷き遺構およびⅢd層分布図（1/400）　太線が第17次調査区

V　第18次調査

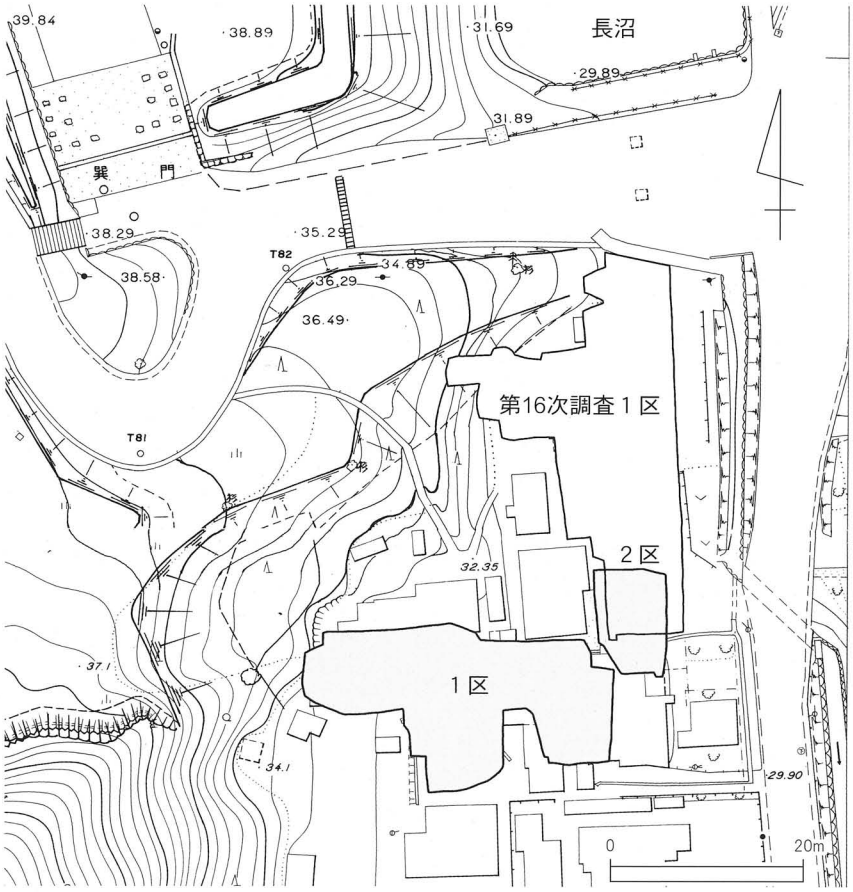
1．調査目的及び調査経過

第18次調査は、三の丸巽門跡東側の堀跡を主な対象として、平成19[2007] 年９月１日から同年11月26日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。調査面積は468㎡である。

調査目的は、長沼の南側に位置し、大正時代または、近代に埋没したとみられるKS-496堀跡（第27図）の位置・規模の確認（１区・２区）である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影後、８月29日からフェンスを設置し、９月３日から重機による表土の除去作業を開始した。また、重機の入りにくい箇所を中心に、９月10日から人力による表土除去及び遺構面の検出作業を開始した。当初、堀跡の南岸と想定していた１区で堀内堆積層が確認できず、盛土と考えられる層の堆積と判断したため、北側に２区を新たに設定した。10月４日から重機による表土の除去作業を開始し、10月９日から人力による堀内堆積層の除去及び遺構面の検出作業を開始した。

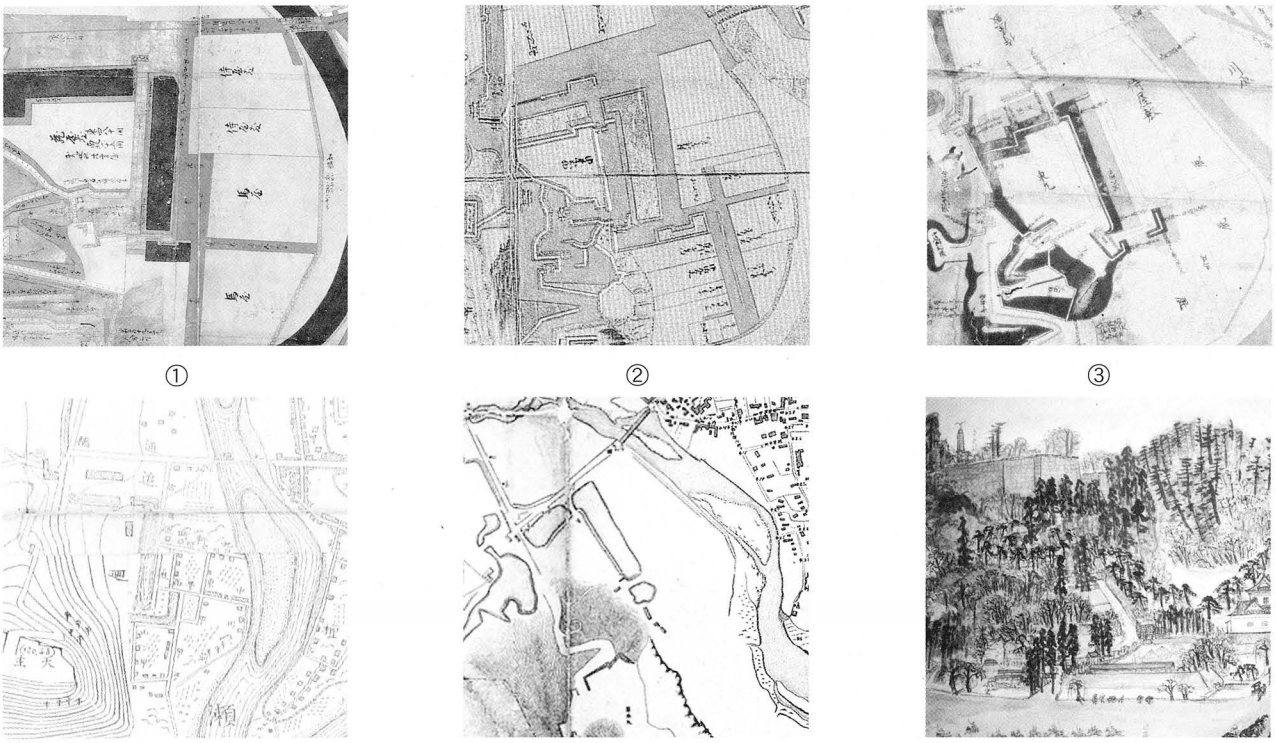
堀跡の調査（１区・２区）では、堀の南岸と南西角部を確認し、南岸で土留めのためと考えられる杭列を３列検出した。また、南西角部では堀の外から排水のために引かれたと考えられる木樋を検出した。昨年度の調査で確認された北岸の位置から堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より６m以上となる大規模なものであることが明らかとなった。遺物は、堀として使われなくなった近代の堀内堆積層と考えられる３層からは18世紀代を中心とする磁器、陶器の他、漆器、下駄などの木製品が出土した。１層からは18世紀後半から19世紀を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦、碁石など多様な遺物が出土した。



第27図　第18次調査区配置図（1/800）

第18次調査は、平成19年３月23日の第16回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て、第17次調査終了後に実施した。調査の進展に伴い、10月12日に実施した第18回仙台城跡調査指導委員会において、調査の進め方についての現地指導を受けた。調査成果については、11月14日に記者発表（４社）、11月17日に現地説明会を実施した（150名参加）。その後、調査区の埋め戻しの作業を行い、11月27日に調査箇所は原状に復した。平成20年３月14日に第19回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な報告を行い、指導助言を受けた。

第28図　調査前状況（東から）



①奥州仙台城絵図（正保２年［1645］）（財）斎藤報恩会蔵
②仙台城下絵図（寛文４年［1664］）宮城県図書館蔵
③奥州仙台城并城下絵図（天和２年［1682］）宮城県図書館蔵
④僊臺区及近傍村落之図（明治15年［1882］）仙台市博物館蔵
⑤仙台市全図（明治26年［1893］）
⑥第二師団遠望の図（大正６年［1917］）仙台市博物館蔵

第29図　絵図・地図からみた堀の変遷

２．旧地形及び基本層序

現在、仙台市博物館のある三の丸跡は広瀬川右岸に形成された下町段丘面上に位置しており、その東側に残る全長約250mの堀跡（現長沼）との間には、比高約10mの段丘崖が形成されている。平成17年度の第13次調査では、長沼方向への岩盤の急激な落ち込みが確認されており、現存の堀跡（長沼）についても、旧河道のような元来の窪んだ地形を利用したものと推定される。今回調査対象としたKS-496堀跡についても同様な旧地形を利用した可能性が高い。以下、各区毎に基本層の概要について述べる。

(1) １区

１区の基本層は９層に大別した（第13表）。必ずしも全てに直接的な上下関係は無いが、概ね年代の新しい順に記述し、層の特徴、検出遺構との上下関係、特徴的な出土遺物について概要を述べる。また、１区では山際の西部とKS-496堀跡に近い東部とでは堆積層に違いがみられた。大別層は概ね一致するが、細分した層序については必ずし

も対応関係があるとは限らない。

Ⅰ層は表土層である。Ⅱ層は、粘土質シルトを主体とし、凝灰岩粒や炭ガラなどが多く混じる層で、15層に細分した。

Ⅲ層は、砂質シルトを主体とし、16層に細分した。東部ではKS-496堀跡南西角部の立ち上がりを構成する凝灰岩粒を多く含む盛土層がみられる。堀が機能していた時期から近代にかけての盛土層である。東部では18世紀から19世紀の陶磁器が多数出土している。

Ⅳ層は、粘土質シルトを主体とし、西部では11層に細分した。粗砂と粘土の交互に堆積している。東部はKS-496堀跡の盛土層（Ⅲ層）直下にⅣe層が確認された。2区の土層との関係では、Ⅳ層に対応すると考えられる。

Ⅴ層は、砂質シルトを主体とし、凝灰岩粒や酸化鉄を多く含む堆積層である。4層に細分した。西部ではKS-499集石遺構やKS-500しがらみ遺構の上面に堆積しており、人為的な盛土層と考えられる。

Ⅵ～Ⅸ層は粘土と細砂の互層であり、自然堆積層と考えられる。

(2) 2区

2区の基本層は、KS-496堀跡埋没後の盛土層、堀跡の南岸を構成する盛土層、堀跡以前の層に大別され、9層に細分した。Ⅰ層は表土層である。Ⅱ層は近代以降の盛土層で3層に細分した。Ⅱa層は砂礫層で多量の炭ガラを含んでいる。Ⅱb層はKS-496堀跡堆積土を覆い、堀がほぼ埋没した後の盛土層である。Ⅱc層はⅢ層を覆い、平坦な面を形成している。堀の廃絶後の表土であった可能性がある。

Ⅲ層はKS-496堀跡の南岸を形成する盛土層で、5層に細分した。Ⅲa層は南岸盛土の上層にあたる粘土質層で層厚は約50cmほどである。幕末までに堀の南岸として構築されていた盛土層と考えられる。Ⅲb～Ⅲd層は堀跡南岸盛土を構成する盛土層である。杭列6構築後に土留めされた層である。

Ⅳ層はⅢ層直下にみられる粘土質シルトを主体とし、旧表土層の可能性が考えられる。この層から17世紀後半の肥前磁器のⅢや岸系の鉢などが出土している。2区の南側で平坦（南北約5m）で、堀に向かって傾斜する。

Ⅴ層は凝灰岩礫などを含む盛土層で、3層に細分した。

Ⅵ～Ⅸ層は粘土を主として薄く水平に堆積する自然堆積層である。

第13表　第18次調査1区　基本層の概要

層　名	土層の種類	備　　考
Ⅰ層	現表土層	表土。
Ⅱ層	盛土層	粘土質シルトを主体とする。Ⅰ層直下の盛土層。15層に細分。
Ⅲ層	盛土層	砂質シルトを主体とする。堀が機能していた時期の盛土層。16層に細分。
Ⅳ層	盛土・崩落土層	粘土質シルトを主体とする。西部を11層に細分。東部は1層。堀構築以前の盛土層か。
Ⅴ層	盛土層	砂質シルトを主体とする。4層に細分。KS-498溝跡の構築時の盛土層か。
Ⅵ層	自然堆積層	粘土と細砂の互層。
Ⅶ層	自然堆積層	粘土と細砂の互層。
Ⅷ層	自然堆積層	粘土と細砂の互層。
Ⅸ層	自然堆積層	粘土と細砂の互層。

第14表　第18次調査2区基本層注記表

層位	土色		土質	土性		備　　考
	土色No	土色		粘性	しまり	
Ⅰ層	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	無	やや有	現表土層
Ⅱa層	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	やや有	炭ガラを非常に多く含む層。
Ⅱb層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩礫と粗砂の互層。炭化物を含む。
Ⅱc層	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	有	有	炭化物、酸化鉄を含む。近代の旧表土。
Ⅲa層	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒と酸化鉄を多く含む。炭化物を含む。堀の南岸盛土。
Ⅲb層	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	有	有	凝灰岩粒を含む。堀の南岸盛土。
Ⅲc層	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を含む。堀の南岸盛土。
Ⅲd層	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	有	有	凝灰岩粒を含む。堀の南岸盛土。
Ⅲe層	7.5Y5/1	灰色	粘土	有	有	酸化鉄、炭化物を含む。窪地の埋め立て土か。
Ⅳ層	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物、植物遺存体を含む。粗砂を含む。旧表土か。
Ⅴa層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒と粗砂の互層。炭化物を含む。Ⅳ層以前の盛土層か。
Ⅴb層	7.5Y4/1	灰色	砂	無	やや有	Ⅳ層以前の盛土層か。
Ⅴc層	7.5Y3/2	オリーブ黒色	シルト質粘土	有	有	礫を多く含む。凝灰岩礫を含む。Ⅳ層以前の盛土層か。
Ⅵ層	7.5Y5/2	オリーブ黒色	粘土	有	有	自然堆積層。
Ⅶ層	7.5Y5/1	灰色	粘土	有	有	自然堆積層。
Ⅷ層	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物を含む。自然堆積層。土壌サンプルC-3採取。
Ⅸ層	7.5Y5/1	灰色	砂質シルト	有	有	凝灰岩礫を多く含む。自然堆積層。

３．検出遺構

⑴ １区

【KS-496堀跡南岸検出遺構】

・KS-497木樋跡　１区北東部KS-496堀跡の南西角部にあたる地点で木樋が１条検出された。堀跡の南岸を形成する盛土であるⅢ層を掘り込んで据えられていることから、堀が機能していた時期に造られたものと考えられる。木樋は長さ約160cm、幅20～25cmで、上蓋の残りが悪い。釘で留めた痕は見られなかった。木樋の方向はS－25°－Wで、南西方向から堀跡の南西角にあたる北東方向に延びている。木樋の北端部が堀跡の南西角部付近で切れた状態で検出され、木樋の埋土からは18世紀末～19世紀初頭の肥前染付碗（第41図６）が１点出土している。

【西部検出遺構】

・KS-498溝跡　１区西部で検出された溝跡である。調査区の南北方向に延びており、今回の調査では約２ｍを検出した。規模は上幅60～80cmで、深さは40cmである。断面形はU字状を呈する。この地域の地盤にあたる向山層の凝灰岩を掘り込んで造られている。Ⅳ層上面で溝内堆積土が確認され、溝内の堆積層は4層に細分した。

・KS-499集石遺構　KS-498東側、東西約２ｍ、南北約1.3mの範囲でⅤ層中から検出された。ほぼ水平な面に径10～20cmの礫がまとまりが確認され、中には径約80cmの大きなものもみられた。

・KS-500しがらみ遺構　集石遺構の東側に東西約3.5m、南北約1.5mの範囲から検出された。径１cm程の木の枝が約60本程、土に打ち込まれており、一部に同じような枝を編みこむように組まれている。

【その他の遺構】

・KS-502・503・504・505・506・507・508・510　１区北壁、西壁断面で検出された。近世期の遺構と考えられる。

【近代の遺構】

・KS-501石組溝跡　１区南西部と、１区北東部からKS-496堀跡にかけて検出された石組溝跡である。１区北東部で確認された石組溝跡は１区Ⅲ層、KS-496堀跡３層の上面から検出されており、堀として機能しなくなった明治以降に造られたものと考えられる。石組溝は両側に径20～50cmの河原石を縁石として据え、底面に平坦な河原石を敷き詰めている。縁石の内側は面を揃えるためにハツリされた石材が多く使用されている。また、裏込めとして径10～20cmの礫が約40cmの幅で検出された。１区南西部では南からに堀跡のある北東方向に向かってＬ字状に折れる形で造られており、攪乱によって縁石が消失しているが、底面の河原石は残りが良好な状態である。１区北東部では縁石の残りは比較的良いが、底面の河原石は南西部のよりは少ない。堀跡付近では縁石が崩れている状態で検出された。石組溝南西部の底面レベルが30.345m、石組溝東部の底面レベルが28.508mで、西から東に約２ｍほど傾斜する。

⑵ ２区

・KS-496堀跡

〔規模〕

平成18年度に実施した第16次調査で、堀跡の北岸と西岸を確認した。北岸盛土から３列の杭列（杭列１～３）と、西岸盛土から２列の杭列（杭列４・５）を検出している。今年度の第18次調査では、堀跡の南岸と南西角部を確認した。堀跡の規模は、第16次調査で確認された北岸からの南北幅35～40m、深さは現地表面から6.35m以上である。南岸盛土層（Ⅲ層）直上で、近代の旧表土層（Ⅱc層）が確認されており、この面から今回調査した最深部までの深さは2.5mである。

〔盛土〕

南岸では、盛土（Ⅲ層）によって岸が形成されていることを確認した。南岸のⅢ層上面の検出レベルは28.720mで、層厚は50cmである。杭列6の構築後の盛土とみられる。堀への傾斜角度は18°で、比較的緩やかに堀底に向かって傾斜している。また、この盛土の断ち割りを行ったところ、Ⅲ層直下に旧表土層（Ⅳ層）を確認し、その下層に凝

灰岩礫を多く含む盛土（Ⅴ層）がほぼ水平に堆積していることを確認した。盛土以前の原地形については不明であるが、ほぼ水平に自然堆積層（Ⅵ～Ⅸ層）がみられる。

〔堆積層〕

堆積層は３層に細分した。１層は、ラミナ状の構造をもつ水性堆積層である。第16次調査のⅢ層に対応する。調査区東部では、約2.5mの厚さで堆積する。調査区西部では近代に構築されたKS-501石組溝が堀内に注ぐ影響により東壁と様相が異なるため、４層に細分した。石組溝からの流入土である１b層と石組溝の底面に堆積した１c層がみられる。

２層は石組溝を構築する際の盛土層で３層に細分した。２a層は粘土質シルトを主体とする盛土層で、石組溝の検出面である。２b層は２a層の直下の堆積層で５～25cm程度の自然石が多量にみられる。

３層は、自然木や伐採痕のある木を多量に含む黒色の腐食土層で、第16次調査のⅣ層に対応する。３層からは17世紀後半～19世紀代の陶磁器類、漆器、下駄、桶の部材等の木製品が出土している。３層は南岸盛土層の直上にみられ、杭列６を覆っている。

〔南岸から検出された杭列〕

平成18年度に実施した第16次調査で、北岸盛土から杭列１～３と、西岸盛土から杭列４・５を検出している。

・杭列６　南岸の落ち際ラインから、径10～15cmの杭を東西方向に９本検出した。杭の上面レベルは27.520～27.540mで、杭の傾きの方向は東壁で検出された杭が52°で、他の杭も概ね同じ角度である。いずれも堆積土の３層に覆われている。６本の杭が盛土の傾斜面に沿って斜めに打ち込まれ、３本がこれに交差するように盛土に打ち込まれていた。２本１組で交差する杭と、その間に交差しない１本の杭が交互に並んでいる。盛土に打ち込まれた２本の杭には上端から約10cm下で、直交するように長さ約120cm、幅７cmの板材１枚と、その下に幅９～12cmの割り材の２枚を検出した。両者を固定した痕跡は特に確認されなかった。杭の間隔は堀側に打ち込まれた６本が東から20cm、14cm、34cm、26cm、10cmで、盛土に打ち込まれた３本が東から62cm、64cmである。杭の上端部は６本が水平に切られた状態であった。３本に上部の先細りが見られるが、これらは腐食によるものと判断した。杭には残りが悪いが樹皮が確認された。堀側の杭は、南岸盛土（Ⅲ層）に対して斜めに打ち込まれており、杭の裏側に板材がみられることから、南岸盛土（Ⅲ層）を構築するために設置されたと考えられる。

・杭列７　杭列６の南約１mの所で東西方向に並んで検出された。杭の上面レベルは27.760～28.120mで、杭列６より24～56cm高い位置にある。約20cmの幅で交互に２列に並んだ状態で21本検出されている。杭の傾きの方向は５～10°で、ほぼ垂直に打ち込まれている。北側の杭は11本で、杭の間隔は10～32cmである。うち４本は径10～16cmの丸太材である。南側の杭は10本で、杭の間隔は２～20cmである。一部断ち割りをした場所で見られる３本については幅９～12cmの割り材が使われていた。他の杭については丸太材か割り材か不明である。すべての杭で上部の先細りが見られるが、これらは腐食によるものと判断した。盛土との関係については、杭列の間に版築状の盛土がみられるため、南岸盛土（Ⅲ層）を構築するために設置されたと考えられる。

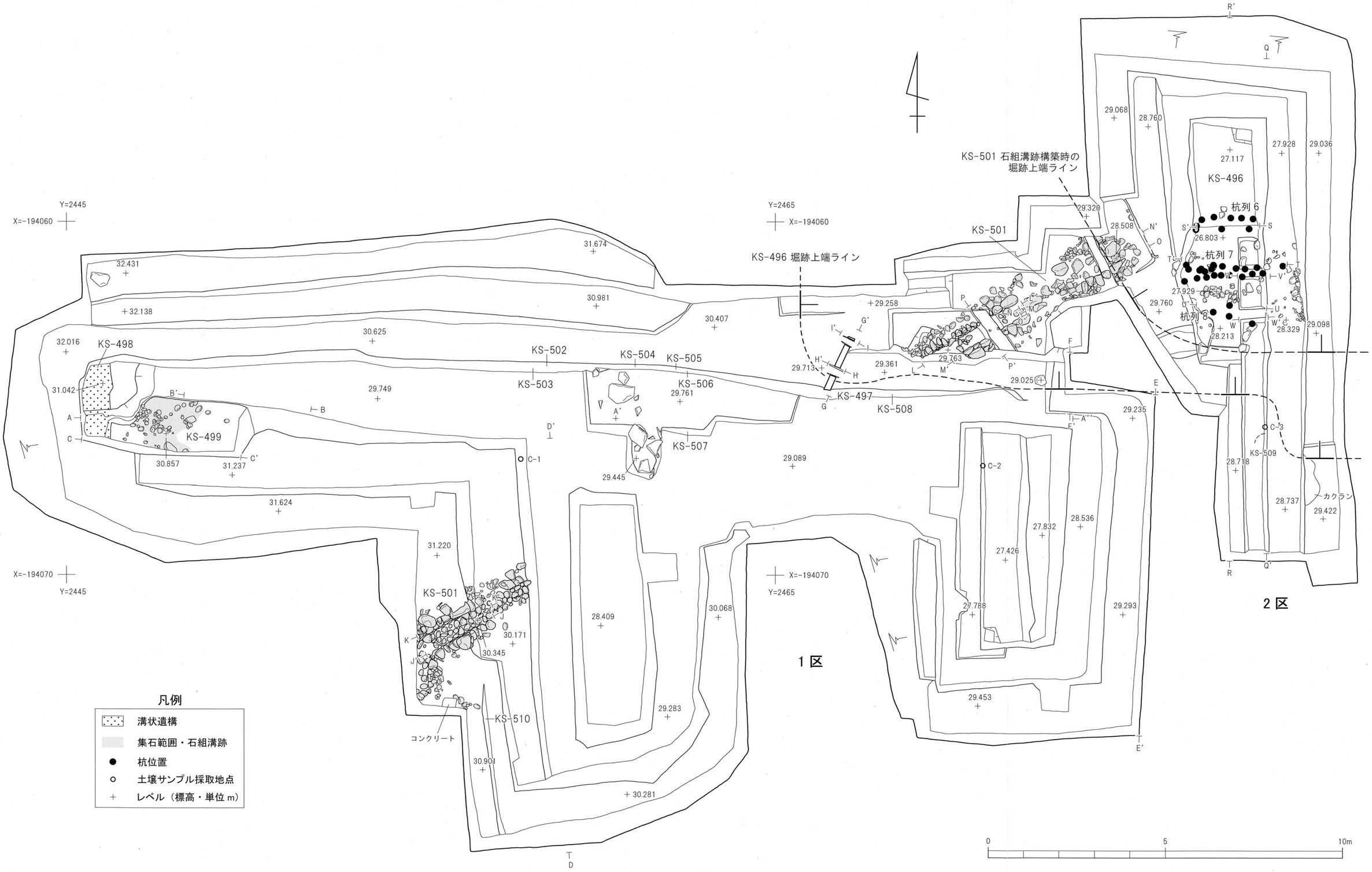
・杭列８　杭列７の南約80cmで検出された南北方向の杭列である。杭の上面レベルは28.200～28.340mで、杭列７より22～44cm高い位置にある。東から60cm、36cmの間隔で３本と杭列の北側に１本の計４本検出した。杭は上部のみを検出し、傾きの方向については不明である。検出状況からほぼ垂直に打ち込まれたと考えられる。南側に並ぶ３本は径16～17cmの丸太材である。杭列北側の杭列７との間に東西120cm、南北80cmの範囲に径約10～20cmの円礫を主体とする集石が確認された。4本とも上部の先細りが見られるが、これらは腐食によるものと判断した。盛土との関係については、杭列の間に版築状の盛土がみられるため、南岸盛土（Ⅲ層）を構築するために設置されたと考えられる。

【その他の遺構】

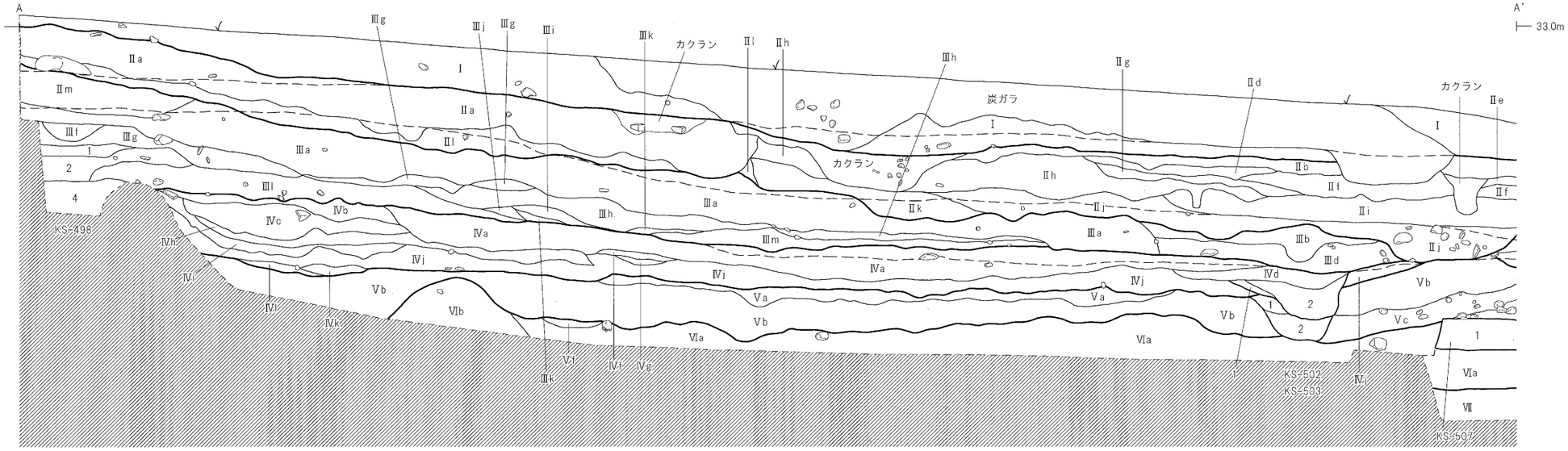
・KS-509　２区南部の断ち割り断面東壁、Ⅵ層上面で検出した。規模は、上幅150cm以上、深さ50cmである。

第15表　第18次調査土層注記表

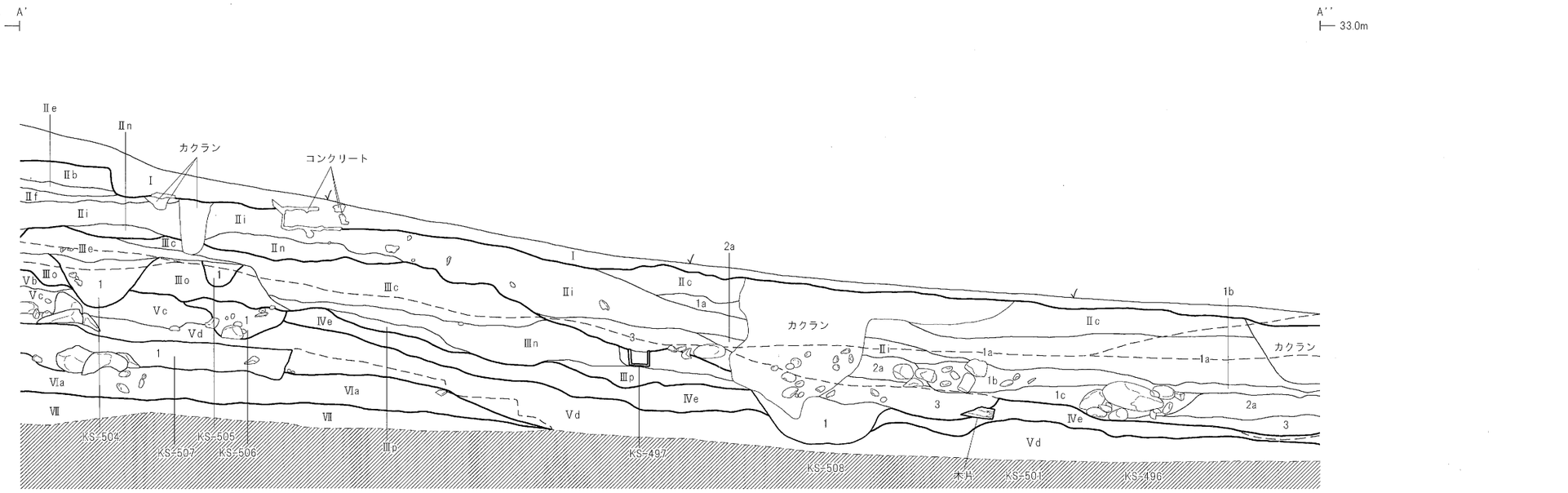
区	層位	遺構・層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘性	しまり	
1区	北壁基本層	Ⅰ層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	礫や炭化物を含む。
		Ⅱa層	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	やや有	酸化鉄、炭化物を含む。
		Ⅱb層	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を多く含む。砂層、炭化物を含む。
		Ⅱc層	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	有	砂層と植物遺存層の互層。酸化鉄を多く含む。
		Ⅱd層	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	やや有	酸化鉄、炭化物を多く含む。凝灰岩粒（小）、小礫を含む。
		Ⅱe層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	酸化鉄、砂を多く含む。炭化物を含む。
		Ⅱf層	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	有	有	酸化鉄、凝灰岩粒（小）を多く含む。炭化物を含む。
		Ⅱg層	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	有	やや有	酸化鉄、炭化物を含む。
		Ⅱh層	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	酸化鉄、炭化物を含む。
		Ⅱi層	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄、炭化物を多量に含む。
		Ⅱj層	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を多く含む。砂層、炭化物を含む。
		Ⅱk層	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	有	有	砂層と植物遺存層の互層。酸化鉄、炭化物を含む。
		Ⅱl層	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	やや有	
		Ⅱm層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩粒（小）、炭化物を多く含む。
		Ⅱn層	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄、炭化物を多量に含む。
		Ⅲa層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	径3～6cmの凝灰岩粒を多く含む。酸化鉄、炭化物を含む。
		Ⅲb層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	有	砂層と植物遺存層の互層。
		Ⅲc層	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや有	やや有	凝灰岩粒、酸化鉄を多く含む。
		Ⅲd層	10YR6/1	灰黄褐色	粗砂	無	無	礫を含む。
		Ⅲe層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩粒（小）、炭化物を多く含む。
		Ⅲf層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	砂層と植物遺存層の互層。
		Ⅲg層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅲh層	7.5Y3/2	オリーブ黒色	粘土	有	有	凝灰岩粒、酸化鉄を多く含む。酸化鉄や植物遺存体を含む。
		Ⅲi層	7.5Y5/1	灰色	砂質シルト	有	有	砂層と植物遺存層の互層。凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅲj層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅲk層	7.5Y3/2	オリーブ黒色	粘土	有	有	植物遺存体を多く含む
		Ⅲl層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅲm層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	やや有	有	砂層と植物遺存層の互層。凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅲn層	10YR6/1	褐灰	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒、酸化鉄を多く含む。植物遺存体を含む。
		Ⅲo層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	砂層と植物遺存層の互層。
		Ⅲp層	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	無	炭化物を少量含む。
		Ⅳa層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅳb層	7.5Y5/1	灰色	粘土質シルト	有	有	砂層と粘土層の互層。
		Ⅳc層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	やや有	やや有	凝灰岩ブロック（大）を多量に含む。炭化物を含む。
		Ⅳd層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩ブロック、酸化鉄、炭化物を多量に含む。
		Ⅳe層	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄、酸化鉄を多く含む。炭化物を少量含む。2区Ⅳ層に対応。
		Ⅳf層	7.5Y5/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	砂層と植物遺存層の互層。
		Ⅳg層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅳh層	7.5Y5/1	灰色	粘土質シルト	やや有	有	
		Ⅳi層	7.5Y5/1	灰色	粘土質シルト	有	有	砂層と粘土層の互層。
		Ⅳj層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	やや有	凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅳk層	7.5Y5/1	灰色	粗砂	無	無	
		Ⅳl層	7.5Y3/2	オリーブ黒色	粘土	有	有	
		Ⅴa層	7.5Y5/1	灰色	粘土	有	有	酸化鉄、植物遺存体を多く含む。
		Ⅴb層	7.5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩粒や酸化鉄、植物遺存体を多く含む。
		Ⅴc層	7.5Y5/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩粒や酸化鉄、植物遺存体を多く含む。
		Ⅴd層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	
		Ⅴf層	7.5Y5/1	灰色	粗砂	無	無	
		Ⅵa層	7.5Y5/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩粒、植物遺存体を多く含む。
		Ⅵb層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	
	KS-498	埋土1	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	植物遺存体、炭化物を多く含む。
		埋土2	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒、植物遺存体を多く含む。
		埋土3	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩ブロックを多量に含む。植物遺存体を含む。
		埋土4	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土質シルト	有	有	
	KS-502	埋土1	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒、炭化物、酸化鉄を含む。
		埋土2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	有	有	植物遺存体と粗砂の互層。
	KS-503	埋土1	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒、炭化物、酸化鉄を含む。
		埋土2	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	植物遺存体と粗砂を多く含む。
	KS-504	埋土1	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	有	やや有	植物遺存体、炭化物、酸化鉄、礫を多く含む。
	KS-505	埋土1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	やや有	酸化鉄、礫を含む。
	KS-506	埋土1	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	無	無	礫を多く含む。
	KS-507	埋土1	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	粗砂、植物遺存体、凝灰岩を多く含む。
	KS-508	埋土1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物、酸化鉄を含む。
	西壁基本層	Ⅰ層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	礫や炭化物を含む。
		Ⅱa層	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄、凝灰岩ブロックを多く含む。
		Ⅱb層	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	有	無	
		Ⅱc層	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	有	やや有	植物遺存体を含む。
		Ⅱd層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	有	酸化鉄、凝灰岩粒を多く含む。
		Ⅲa層	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	有	やや有	植物遺存体を多く含む。酸化鉄を含む。
		Ⅲb層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	無	凝灰岩粒を少量含む。
		Ⅳa層	7.5Y5/1	灰色	粘土質シルト	有	有	径8～16cmの円礫や凝灰岩粒を多量に含む。
		Ⅳb層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	やや有	粗砂、凝灰岩粒を含む。
		Ⅴ層	7.5Y3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	有	有	凝灰岩粒を含む。土壌サンプルC-1採取。
		Ⅵ層	7.5Y4/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	有	有	凝灰岩粒を含む。
		Ⅶ層	7.5Y4/2	灰オリーブ色	粘土質シルト	有	有	粗砂と細砂の互層。径1～6cmの凝灰岩粒、酸化鉄、炭化物を含む。
		Ⅷ層	7.5Y4/3	暗オリーブ色	粘土	有	有	細砂を含む。
		Ⅸ層	7.5Y4/3	暗オリーブ色	粘土	有	有	細砂と粘土の互層。
	KS-501	埋土1	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	有	やや有	
	KS-510	埋土1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	無	
	東壁基本層	Ⅰ層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	礫や炭化物を含む。
		Ⅱ層	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	有	やや有	凝灰岩粒、礫を多く含む。砂をラミナ状に含む。
		Ⅲa層	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有	酸化鉄を多く含む。2区Ⅲa層に対応。
		Ⅲb層	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	有	2区Ⅲb層に対応。
		Ⅲc層	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	有	有	酸化鉄、炭化物を含む。窪地の埋め立て土か。2区Ⅲe層に対応。
		Ⅳ層	7.5Y5/1	灰色	シルト質粘土	有	有	2区Ⅳ層に対応。
		Ⅴa層	7.5Y4/1	灰色	シルト質粘土	有	有	凝灰岩粒（小）を含む。2区Ⅴa層に対応。
		Ⅴb層	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土質シルト	有	有	
		Ⅴc層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒を含む。
		Ⅵ層	7.5Y3/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	有	有	凝灰岩粒を含む。
		Ⅶ層	7.5Y4/1	灰色	砂質シルト	やや有	やや有	
		Ⅷ層	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	有	やや有	粗砂、植物遺存体を多く含む。土壌サンプルC-2採取。
		Ⅸ層	7.5Y5/1	灰色	粘土	有	有	
2区	KS-496	1a層	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	有	有	植物遺存層と細砂の互層。炭化物を含む。石組溝廃絶後の流入土か。
		1b層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	有	やや有	粗砂と凝灰岩礫の互層。礫、炭化物を含む。石組溝からの流入土の堆積か。
		1c層	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒、植物遺存体を多く含む。石組溝底面堆積土か。
		1d層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	植物遺存体を多く含む。炭化物を含む。
		2a層	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	有	炭化物を含む。KS-501石組溝跡検出面。石組溝構築時の盛土か。
		2b層	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	有	有	植物遺存体、炭化物を含む。礫を多く含む。堀の埋め戻し土か。
		2c層	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	凝灰岩粒、小礫を多く含む。
		3層	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	有	有	自然木、伐採木を多量に含む。
	KS-509	埋土1	7.5Y5/1	灰色	粘土	有	有	



第30図　第18次調査　全体遺構平面図（1/100）



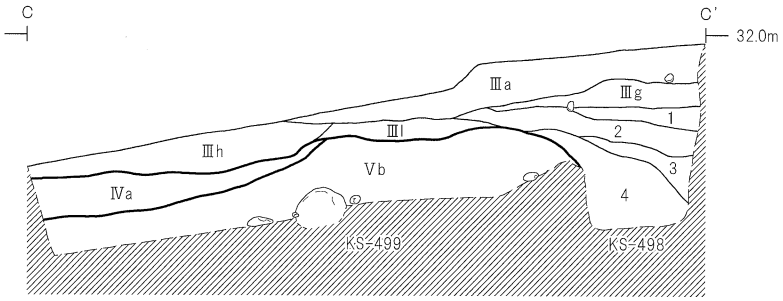
北壁断面図 a



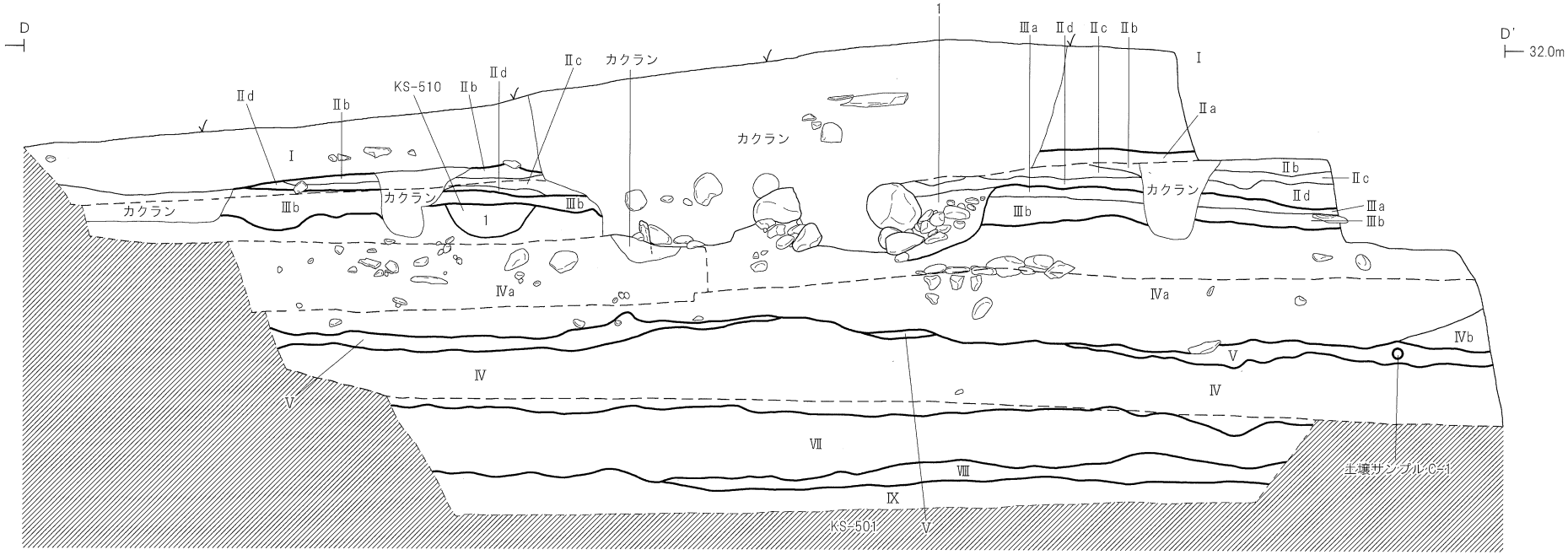
北壁断面図 b

0 2m

第31図　第18次調査　1区断面図1（1/50）



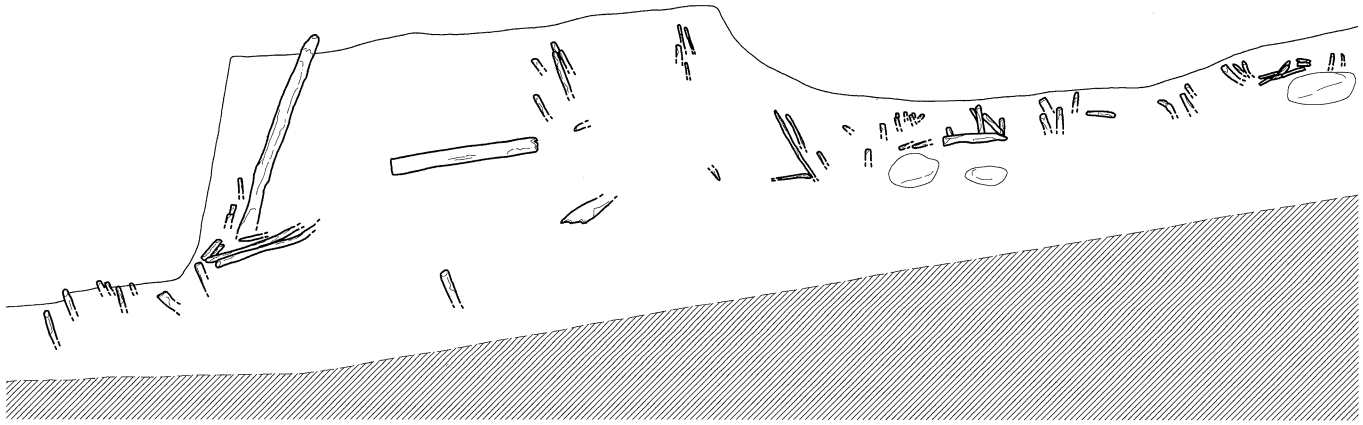
西部南壁断面図



南部西壁断面図

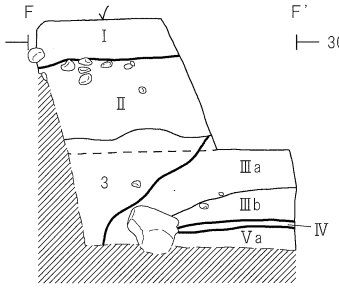
0 2m

第32図　第18次調査　1区断面図2（1/50）

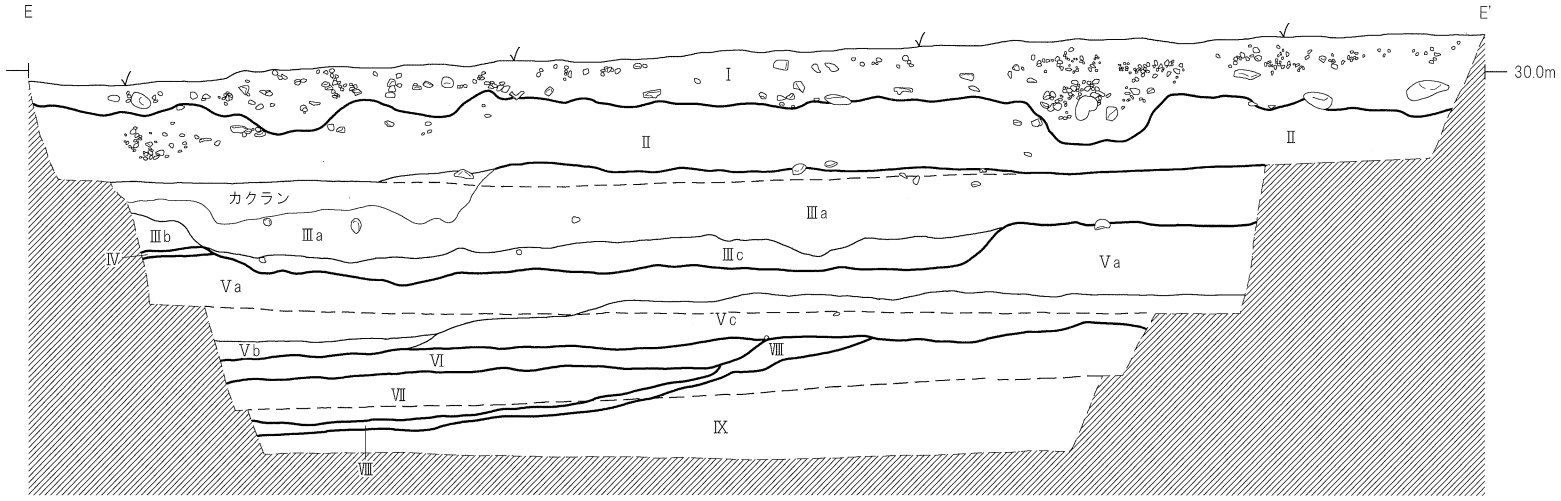


西部南壁KS－500しがらみ遺構断面図（1/20）

0　1m



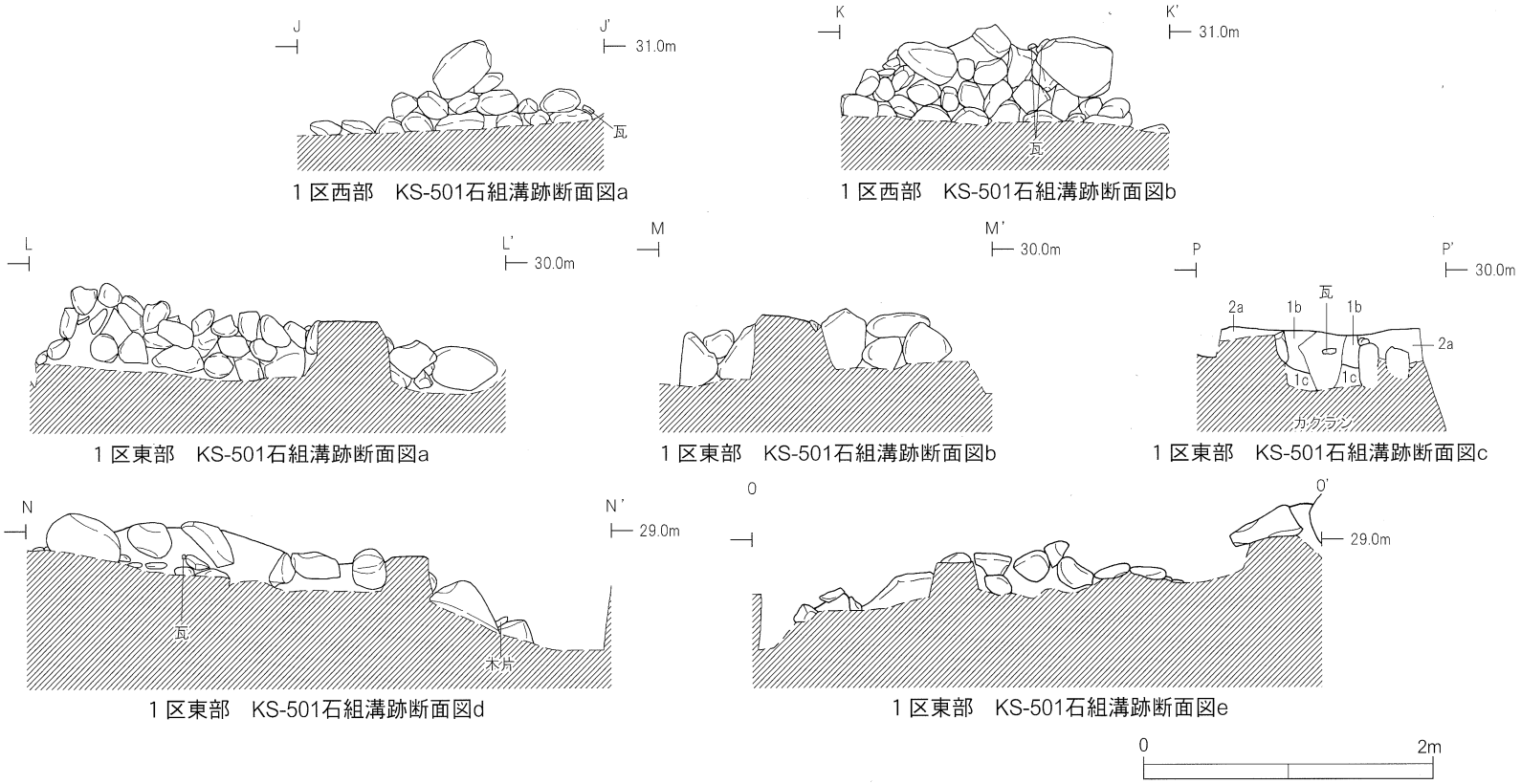
東壁断面図 a



東壁断面図 b

0　2m

第33図　第18次調査　1区断面図3（1/50）



1区西部　KS-501石組溝跡断面図a

1区西部　KS-501石組溝跡断面図b

1区東部　KS-501石組溝跡断面図a

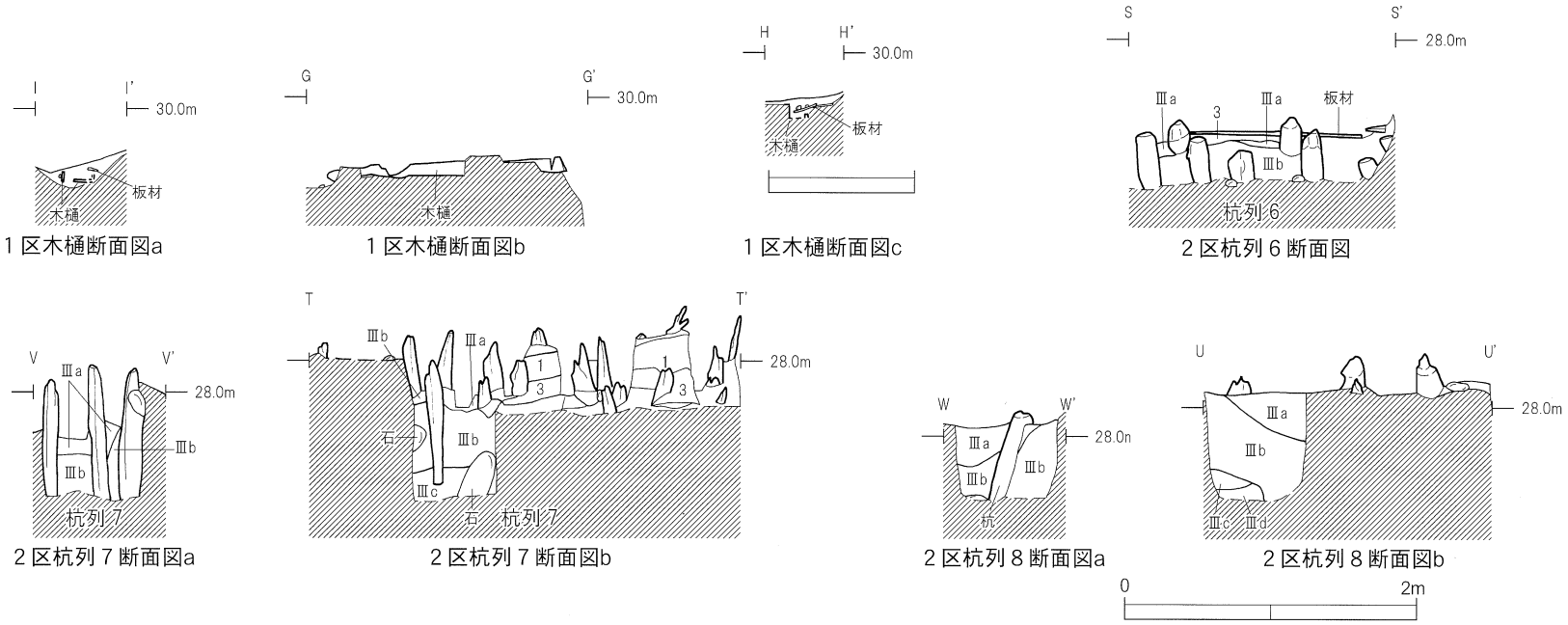
1区東部　KS-501石組溝跡断面図b

1区東部　KS-501石組溝跡断面図c

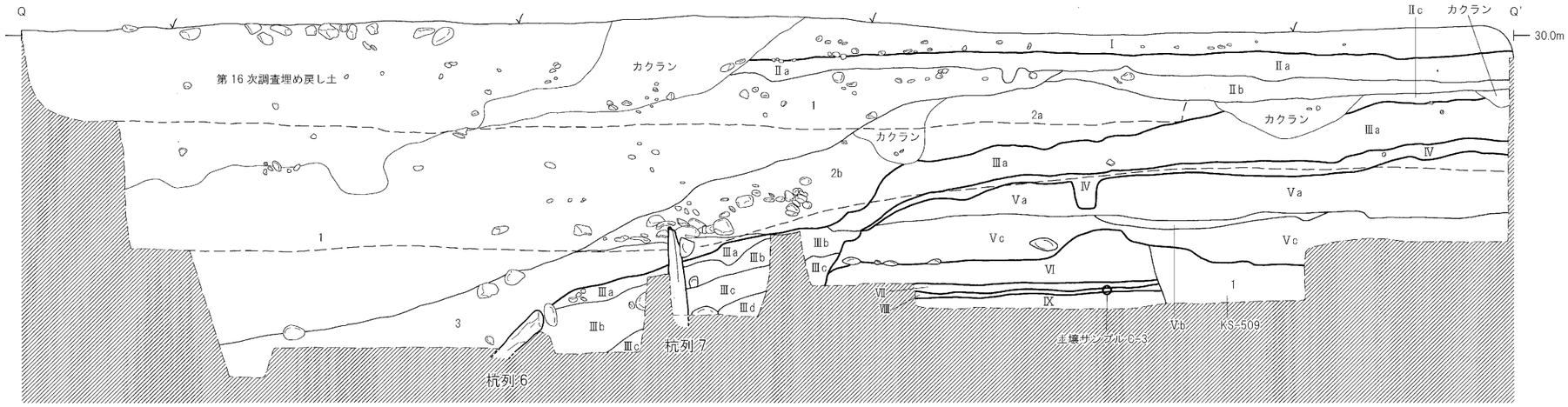
1区東部　KS-501石組溝跡断面図d

1区東部　KS-501石組溝跡断面図e

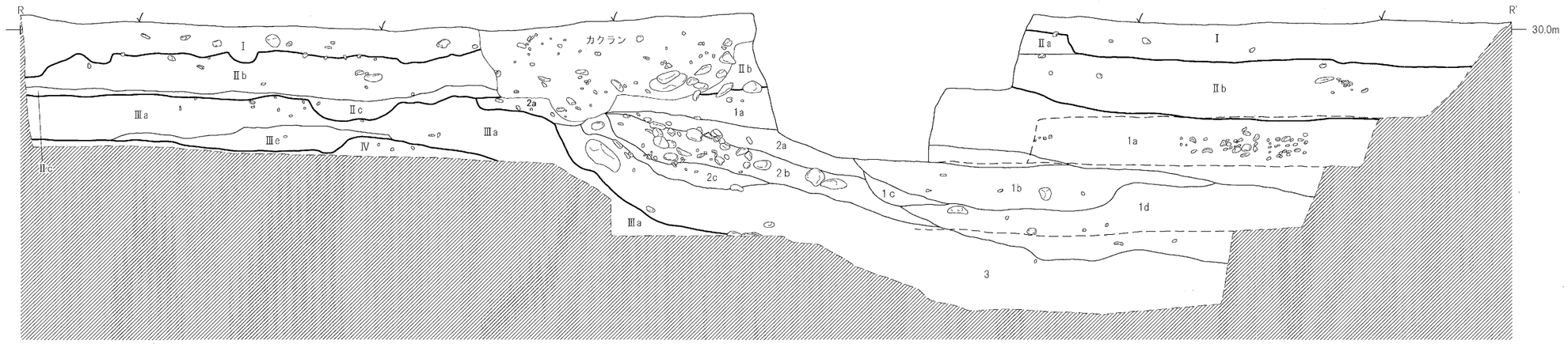
第34図　第18次調査　1区断面図4（1/50）



第35図　第18次調査　1区・2区断面図（1/50）



東壁断面図



西壁断面図

0　2m

第36図　第18次調査　２区断面図（1/50）

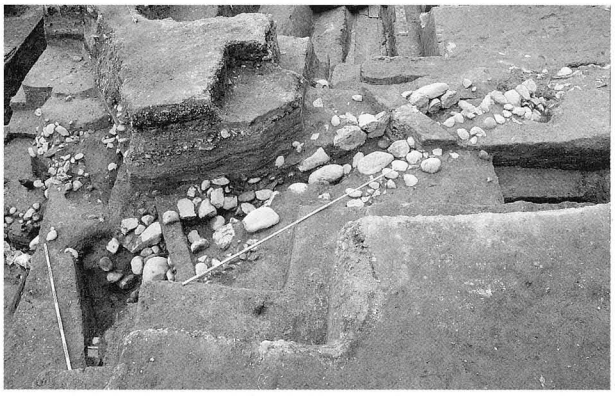
1区全景（南東から）

1区西部KS-498溝跡検出状況（北から）

1区西部KS-499集石遺構検出状況（北から）

1区西部KS-500しがらみ遺構検出状況（北から）

1区西部KS-501石組溝跡検出状況（西から）



1区東部KS-501石組溝跡検出状況（北から）

1区東部KS-497木樋検出状況（南東から）

1区東部KS-496堀跡肩部断面（西から）

第37図

2区全景（南東から）

2区KS-496堀跡南岸・南西角検出状況（南東から）

2区KS-496堀肩部・杭列検出状況（北西から）

2区KS-496堀肩部・杭列検出状況（北東から）

2区KS-496堀肩部盛土断ち割り断面（西から）

2区KS-496杭列6検出状況（北から）

2区KS-496杭列6板材検出状況（東から）

2区KS-496杭列6板材検出状況アップ（東から）

第38図

2区KS-496杭列7検出状況（北から）

2区KS-496堀肩部盛土断ち割り断面（西から）

2区KS-496杭列7断ち割り断面（北から）

2区KS-496杭列7断ち割り断面（南から）

2区KS-496杭列8検出状況（北から）

2区KS-496杭列8断ち割り断面（南から）

2区KS-496堀肩部断面（東から）

2区南部深掘り断面（北西から）

第39図

2区2b層上面集石検出状況（西から）

2区3層磁器瓶（No.96）出土状況

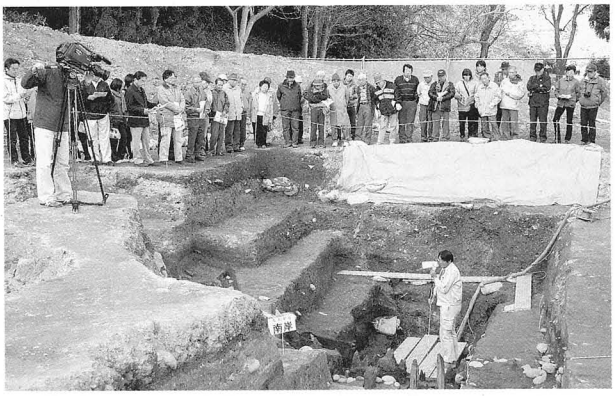
2区3層漆器蓋（No.85）出土状況

2区3層下駄（No.64）出土状況

2区南部Ⅳ層陶器鉢（No.269）出土状況

1区土壌サンプル（C-2）採取地点（東から）

1区作業風景（東から）



現地説明会風景（南東から）

第40図

4．出土遺物

各遺物の出土点数については、区・遺構・層位別の数量表（第16～24表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第25～35表）を付した。なお、陶磁器の点数は、分類・接合作業を行い同一個体として接合したものは１点とし、それ以外は全て破片数として算出した。

(1)磁器（第16～18表、第41図）

371点出土した。うち、近世257点、近現代108点、時期不明６点である。

近世の遺物についてみると、１区では、近代以降のⅠ・Ⅱ層、KS-496堀跡の１層からの出土が89％を占める。近現代の磁器はⅡ層およびKS-496の１層より上層で出土している。産地は肥前が全体の86％と多く、瀬戸美濃、中国、京・信楽、切込などがみられる。器種は碗が47％で最も多く、他に皿、瓶類、猪口、鉢、仏飯器、香炉、水滴などがみられる（第41図１～８）。

第16表　第18次調査出土陶磁器他数量表

区	遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	土製品	計
1	表採	36	17		1		54
	撹乱	30	7	1			38
	Ⅰ	54	24	2	1		81
	Ⅱ	37	53	5	4		99
	KS-496・1	52	62	9	9		132
	Ⅲ	17	10	3	4		34
	Ⅳ	5	6		1		12
	KS-501・1	14	21	3			38
	KS-497・1	1					1
	1区小計	246	200	23	20	0	489
2	撹乱	2	5				7
	1	18	2	1	1		22
	Ⅱ	10	7	1	1		19
	KS-496・1	64	76	14	7		161
	KS-496・3	22	30	5	8	3	68
	Ⅲ	5	4	2			11
	Ⅳ	4	3	1			8
	・			5	1		6
	KS-501・1		1				1
	2区小計	125	128	29	18	3	303
	計	371	328	52	38	3	792

２区では、Ⅰ・Ⅱ層、KS-496堀跡の１・３層からの出土が94％を占める。KS-496の３層からは17世紀後半から19世紀前半にかけての遺物が出土している。産地は肥前が全体の86％と多く、瀬戸美濃、中国などがみられる。器種は碗が48％で、他に皿、瓶類、猪口、鉢、仏飯器、香炉、水滴などがみられる（第42図９～11、13、14）。Ⅳ層からは17世紀中葉から後葉の肥前の菱形皿（第41図12）が出土している。

第17表　第18次調査２区KS-496・１層出土磁器製作年代別器種組成

製作年代	肥前	瀬戸・美濃	不明	計
17ｃ前	1			1
17c	1			1
17c後～18ｃ前	1			1
18c前	1			1
18c後	1			1
18c	5			5
18c後～19ｃ前	4			4
19c前	2	3		5
近世	10		3	13
近代		2	14	16
計	26	5	17	48

第18表　第18次調査２区KS-496・３層出土磁器製作年代別器種組成

製作年代	肥前	瀬戸・美濃	不明	計
17ｃ前	1			1
17ｃ後	1			1
17c後～18ｃ前	2			2
18c前	1			1
18c後	1			1
18c	6			6
18c後～19ｃ前	2			2
19c前	1	1		2
近世	5		2	7
近代			1	1
不明			1	1
計	20	1	4	25

(2)陶器（第16、18、19表、第42図）

328点出土した。うち、近世275点、近現代31点、時期不明10点、焙烙12点である。近世の遺物についてみると、１区では、Ⅰ・Ⅱ層、KS-496堀跡の１層からの出土が90％を占める。産地は、大堀相馬が全体の48％で、瀬戸美濃、小野相馬、肥前、堤、京信楽などがみられる。器種は、碗が55％で最も多く、他に皿、鉢、土瓶、仏飯器、擂鉢、甕、片口、香炉などがみられる（第42図15～20）。Ⅴ層からは、17世紀の志野の碗が出土した。（第42図21）。

2区ではKS-496堀跡の1・3層からの出土が83％を占める。産地は、大堀相馬が全体の48％を占め、瀬戸美濃、肥前（唐津含む）、堤、京信楽、小野相馬、岸系などがみられる。器種は、碗が37％で、他に皿、鉢、瓶類、土瓶、仏飯器、擂鉢、甕、豆甕などがみられる（第42図22～27）。Ⅳ層からは17世紀後半の岸系の鉢が出土した（第42図28）。焙烙は1点図示した（第43図30）。

第19表　第18次調査2区KS-496・1層出土陶器製作年代別器種組成

製作年代	肥前	瀬戸・美濃		京・信楽	大堀相馬	小野相馬	その他			不明	計
		瀬戸・美濃	美濃				岸	堤	在地		
17c前	1						1				2
17c後	2										2
17c		2									2
17c後～18c前	1	1									2
18c前		1									1
18c後	1	1			14						16
18c		1	1	1	9	1			1		14
18c後～19c前		2									2
近世		1			1				2	2	6
近代										1	1
不明		1								1	2
計	5	10	2	1	34	1	1	9	3	4	70

第20表　第18次調査2区KS-496・3層出土陶器製作年代別器種組成

製作年代	肥前	瀬戸美濃	京・信楽	大堀相馬	岸	堤	不明	計
17c後					1			1
17c				1				1
18c後			1	6			1	8
18c	1			3			1	5
19c前		1		3		2		6
19c中				1				1
近世	1			1				2
近代		1						1
計	2	2	1	15	1	2	2	25

⑶土師質土器（第16表、第43図）

52点出土した。皿、焼塩壺、鉢などがみられる。口径の計測または復元できた皿は、1区Ⅱ層出土の1点のみで（第43図29）、ほとんどが復元のできない小片であり、法量に関して全体的な傾向を知ることは困難である。図31は焼塩壺で、外面には格子叩き目がみられる。

⑷瓦質土器（第16表）

38点出土した。器種がわかるものとしては火鉢があるが他は不明である。全体に破片資料が多い。1区では、ほとんどがⅠ・Ⅱ層から出土している。2区ではKS-496の1・3層からの出土が多くみられた。

⑸土製品（第16表、第43図）

3点あり、3点とも2区KS-496の3層からの出土である。図34は土人形の天神で、頭部が一部欠損しているが、ほぼ完形である。型押し作りで、底部に孔がある。胎土から堤人形と考えられる。他の2点は破片資料のため、種類は不明である。

⑹瓦（第21表、第43、44図）

総計1,430点出土し、このうち丸瓦が287点、平瓦が961点で併せて全体の87％を占める。区毎の出土傾向をみると、1区では多くがⅠ・Ⅱ層から出土している。2区でもKS-496堀跡の1・3層から多く出土している。丸瓦2点と平瓦1点を図示した（図41、42、45）。丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦、伏間瓦、熨斗瓦、輪違い、平板類など多様な瓦が出土している。

①軒丸瓦　22点出土した。瓦当文様の判別可能なものは15点である。1区から九曜文1点、三引両文1点（図37）、三巴文4点（図35）、珠文三巴文5点である。2区からは九曜文1点（図36）、三引両文1点、三巴文1点、珠文三巴文1点である。三引両文以外の3点はKS-496の3層からの出土である。3層から1点出土しているが文様は不明である。

②軒平瓦　16点出土した。瓦当文様の判別可能なものは9点である。文様構成は、1区が菊花文1点、花菱文2点、三葉文1点である。2区は菊花文1点（図38）、桔梗文2点、花菱文2点である。KS-496の1層からの出土が多く、Ⅴ層から花菱文が1点出土している。

③軒桟瓦　14点出土し、いずれも瓦当文様の判別可能なものは９点である。文様構成は、１区が三巴文６点、江戸式が２点（図39）、無文１点である。２区からの出土はない。Ⅲ層から三巴文が１点出土している（図40）。

④棟瓦　主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。24点出土した。内訳は、１区から伏間瓦11点、熨斗瓦２点、輪違い１点（図44）、面戸瓦５点である。２区は、伏間瓦１点、熨斗瓦１点、面戸瓦２点である。１・２区とも、すべてⅠ・Ⅱ層から出土している。

⑤飾瓦　１区から詳細不明の２点が出土した。

⑥その他の瓦　31点出土した。これは、平板、水切り、桟付平板、駒巴、駒付平板の総数である。１区では平板２点、水切り６点、桟付平板４点、駒巴３点、駒付平板２点が出土した。Ⅴ層から水切り１点が出土している。２区では平板１点、水切り３点、桟付平板１点、駒巴１点、駒付平板１点が出土した。この他、種別不明の瓦が７点出土した。

第21表　第18次調査出土瓦数量表

区	遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	軒桟	桟瓦	冠伏間	丸桟伏間	角桟伏間	熨斗	輪違	面戸	飾り	駒巴	平板厚	水切	桟付平板	駒付平板	袖瓦	不明	計
	表採	22	49	3	1	4	1			1	1		1			1	1		1	2		88
	撹乱	12	75				1									2						90
	小計	34	124	3	1	4	2	0	0	1	1	0	1	0	0	3	1	0	1	2	0	178
	表採			1																		1
	撹乱								1	1									1	1		4
	Ⅰ	31	86	2	2	1	2	1		1				1		5	1					133
	Ⅱ	72	302	5	3	4	33		1	1	1	1	2		2	4	2	3			5	441
1	KS-496.1	34	95	3	2	3	6	1		2			1			2					1	150
	Ⅲ	10	24		1									1								36
	Ⅳ	9	25			1	1										1					37
	KS-501.1	24	105	3	1	1	6						1		1		1				1	144
	1区小計	180	637	14	9	10	48	2	2	5	1	1	4	2	3	11	5	3	1	1	7	946
	表採			1	1								1									3
	撹乱	1			1		1	1														4
	Ⅰ	14	26					1								6	2		1			50
	Ⅱ	6	10																			16
	Ⅱa		2																			2
	Ⅱb	3	4																			7
2	Ⅱc	13	26				1															40
	KS-496・1	26	109	3	3		1				1		1		1	1	1	1				148
	KS-496・3	9	17	1																		27
	Ⅲ	1	5																			6
	Ⅳ		1																			1
	Ⅴ		1		1																	2
	2区小計	73	201	5	6	0	3	2	0	0	1	0	2	0	1	7	3	1	1	0	0	306
	計	287	962	22	16	14	53	4	2	6	3	1	7	2	4	21	9	4	3	3	7	1430

⑺金属製品（第22表、第44、45図）

83点出土した。このうち銃弾が71点と全体の85％を占める。１・２区とも、すべてⅡ層またはKS-496堀跡の１層から出土している。１区では銃弾67点、薬莢２点、煙管１点、祈祷用に使われた六器１点が出土した。銃弾は１区西部のⅡ層から65点がまとまって出土した。これらは堀跡の南側に第二師団の射撃場があったことから、軍隊により使用されたものと考えられる。うち２点（図48、49）を図示した。また、薬莢１点がKS-501石組溝跡の埋土から出土している。煙管は吸口のみである。（図46）２区からは、銃弾３点、薬莢１点、くさび１点、鉄釘４点、その他鉄製品２点である。図47はKS-496の３層より出土した薬莢で底部に「□明□一七」の刻印がある。

第22表　第18次調査出土金属製品数量表

区	遺構・層位	煙管	薬莢	銃弾	鉄釘	器	その他	計
	撹乱	1						1
	Ⅰ					1		1
1	Ⅱ			66				66
	KS-496・1		1	1				2
	KS-501・1		1					1
	1区小計	1	2	67	0	1	0	71
	Ⅱ				4		1	5
2	KS-496・1		1	4			2	7
	2区小計	0	1	4	4	0	3	12
	計	1	3	71	4	1	3	83

⑻石製品（第23表、第45図）

３点出土した。石製品は碁石１点、砥石１点、その他の石製品１点である。１区Ⅱ層から出土した碁石（図50）は径21㎜ の黒石である。

第23表　第18次調査出土石製品数量表

区	遺構・層位	碁石	その他	計
1	Ⅱ	1		1
	KS-496・1		1	1
	1区小計	1	1	2
2	Ⅰ		1	1
	2区小計	0	1	1
	計	1	2	3

⑼木製品（第24表、第45、46図）

63点出土した。１区から６点、２区から57点で、KS-496堀跡の３層からの出土である。漆器、下駄、桶等がみられる。漆器は９点であり、２区KS-496堀跡の３層からの出土した。図51は内面朱漆、外面黒漆の椀で、外面三方に朱漆による『横三引両文』がみられる。図52は外面、内面ともに朱漆の椀で、文様等はみられない。高台内に印を押したような痕がみられる。図53は黒漆の上に朱漆で伊達家家紋の『竪三引両文』の加飾が施された蓋である。図54は外面、内面とも朱漆の杯である。杯の内側には金彩で鳥と柳が描かれている。図55は外面、内面とも黒漆の椀で、内面には印判で花の文様を施し、外面にも同様に印判で三方に花弁のみの花の文様が施されている。図56は内面が朱漆、外面が黒漆の椀で、外面には江戸時代後期以降に多いスズ蒔絵による松の文様がある。図57は内面が黒漆、外面が緑漆の平椀である。特に文様はみられない。緑漆は石黄を顔料として用い、19世紀代に作られるようになる。また、サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを２回塗布）を用いたものが２点（図53、54）出土しており、優品の部類に入る。なお、漆製品の観察には東京文化財研究所の北野信彦氏のご教示を得た。

第24表　第18次調査出土木製品数量表

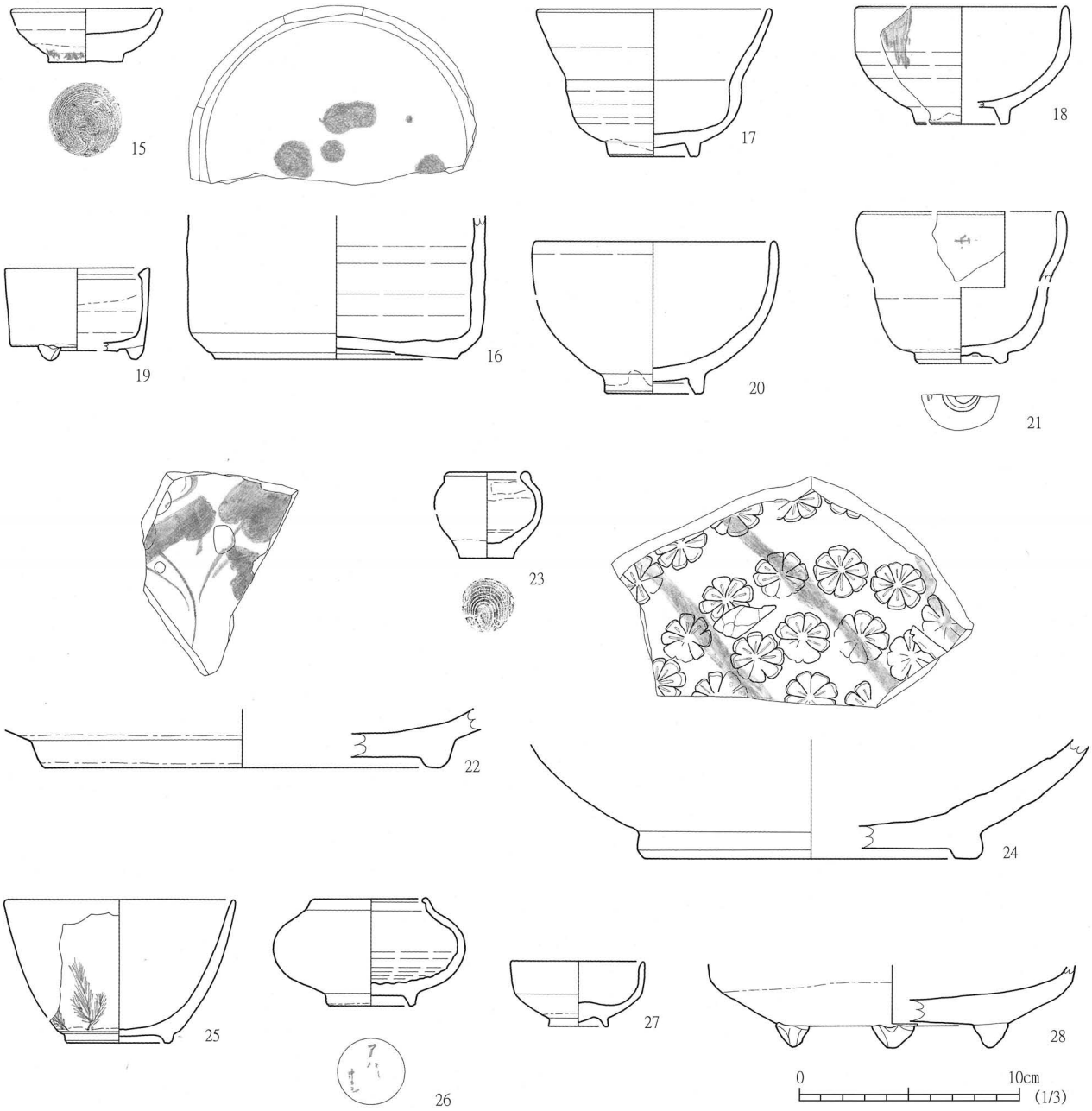
区	遺構・層位	漆器	下駄	杭	桶	その他	計
1	KS-496・1		1		1		2
	Ⅲ					2	2
	Ⅳ			1		1	2
	1区小計	0	1	1	1	3	6
2	表採					1	1
	Ⅱ					1	1
	KS-496・1		5		2	1	8
	KS-496・3	9	15		14	8	46
	Ⅲ					1	1
	2区小計	9	20	0	16	12	57
	計	9	21	1	17	15	63

図58は下駄である。図60はいわゆる提桶の側板で焼印が2箇所に押されている。図61は桶もしくは樽の一部である。

第41図　第18次調査出土磁器（S＝1/3）

第25表　第18次調査出土磁器観察表

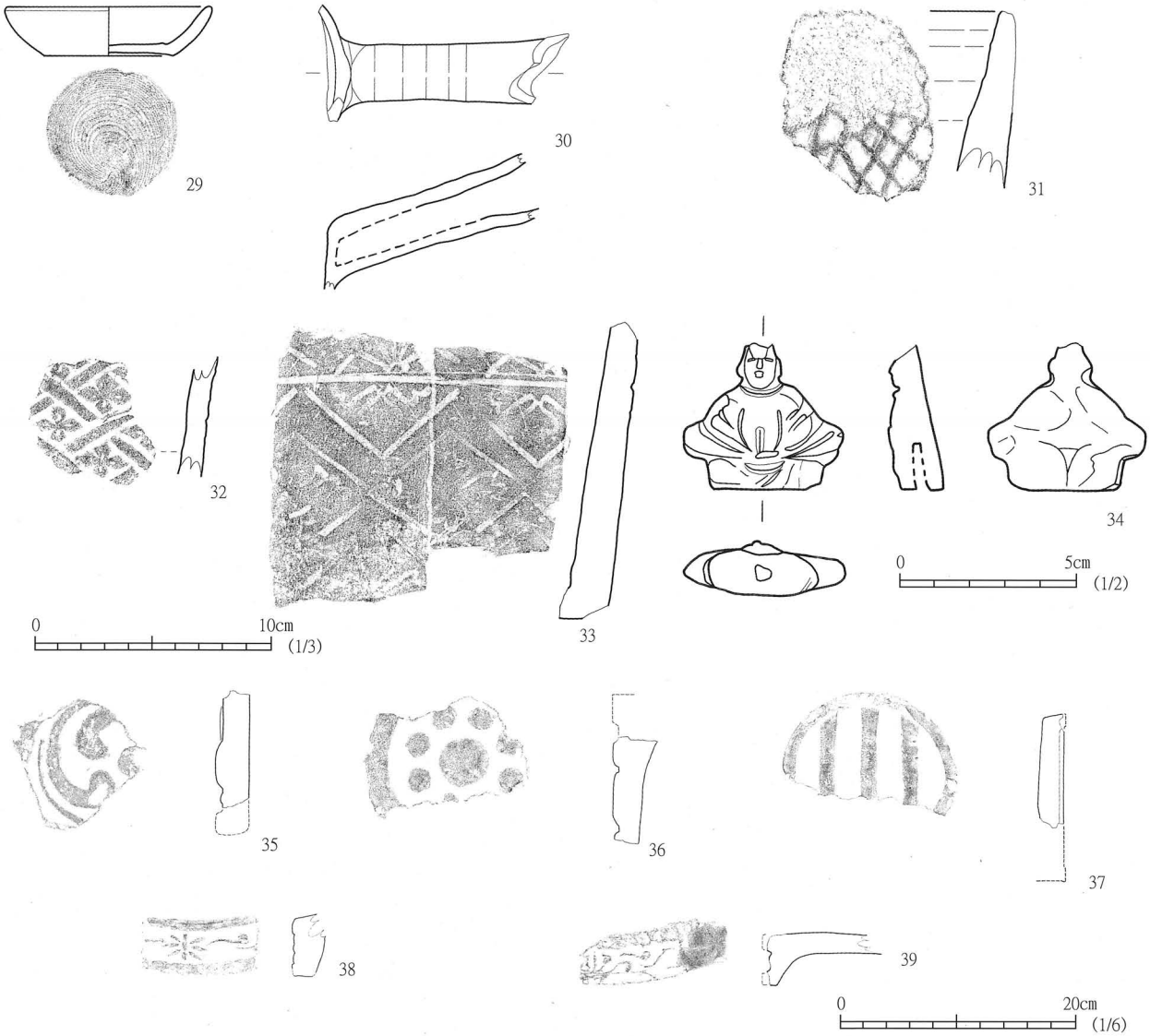
図	遺物番号	区	遺構・層位	種類	生産地	器種	製作年代	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文様等	備考	写真
1	863	1	撹乱	染付	肥前	皿	17c末～18c前	140	82	48	見込コンニャク印判五弁花　高台内一重枠の渦福	波佐見　くらわんか手	1
2	866	1	撹乱	色絵	肥前	碗	19c前	(88)	(38)	56	鷺		2
3	455	1	Ⅱ	染付	肥前	碗	18c後	(100)	50	40	二重網目文		3
4	183	1	KS-496.1	染付	瀬戸美濃	端反碗	19c前	(90)	38	49			4
5	643	1	Ⅱ	青白磁	中国？	不明	13ｃ～15ｃ？	－	(17)	－	口錆		7
6	653	1	KS-497.1	染付	肥前	碗	18c末～19c初	(102)	(40)	47	松葉文		5
7	421	1	Ⅱ	青磁染付	肥前	香炉	17c？	(66)	42	40		平高台　脚がつかない	6
8	122	1	KS-496.1	染付	肥前	仏飯器	18c	(76)	40	59			8
－	540	1	KS-496.1	染付	肥前	皿	17c後～18c前				型紙摺り絵亀甲文　高台内二重枠の渦福	有田内山窯	9
9	239	2	KS-496.1	染付	肥前	皿	18c前	104	60	20	松竹梅文　蔓草文		11
10	698	2	KS-496.1	染付	不明	碗	江戸	(62)	32	(26)			10
11	80	2	KS-496.3	染付	肥前	菊形水滴	—	－	－	21	呉須	型押成形	12
12	266	2	Ⅳ	青磁染付	肥前	菱形皿	17c中～後	－	(38)	(25)	見込菊花文型押	初期伊万里	15
13	96	2	KS-496.3	染付	肥前	鶴首瓶	18ｃ前	－	44	(102)	唐草文		13
14	15	2	KS-496.1	染付	肥前	鶴首瓶	18c前	－	－	(74)	唐草文		14



第42図　第18次調査出土陶器（S＝1/3）

第26表　第18次調査出土陶器観察表

図	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	釉薬・文様等	備考	写真
15	541	1	表採	瀬戸	小皿	17c?	(70)	34	25	鉄釉	底部回転糸切	16
16	478	1	KS-501.1	瀬戸	鉢	18c?	—	(110)	(66)	灰釉　鉄釉散し		17
17	458	1	Ⅱ	大堀相馬	碗	18c ?	(106)	(40)	68	灰釉		18
18	311	1	Ⅴ	大堀相馬	碗	18c	(98)	(44)	54	灰釉　鉄釉流し掛け		20
19	282	1	KS-496.1	瀬戸?	香炉	18c	(66)	42	(60)	灰釉		21
20	280	1	KS-496.1	小野相馬	碗	18 c	(110)	45	70	淡青色釉		19
21	868	1	Ⅴ	志野	碗	17c初	(96)	(42)	(70)		口縁部に朱書　高台内墨書か	22
22	209	2	KS-496.1	唐津	皿	16c後	—	(118)	(27)		漆継ぎ痕あり	27
23	29	2	KS-496.1	大堀相馬	豆甕	19c前	(40)	24	40	白濁釉		23
—	28	2	KS-496.1	堤	灯明皿	19c前	(54)	(32)	16	鉄釉		29
—	635	2	KS-496.1	堤	灯明皿	19c前	—	(44)	—	鉄釉		30
25	62	2	KS-496.3	堤？	鉢	19c後～	—	156	(55)	鉄釉　内面に印花文		26
26	110	2	KS-496.3	大堀相馬	蓋付壺	19c前	54	40	50	黒釉	高台内墨書 「アハ　オシ」か	25
27	81	2	KS-496.3	大堀相馬	杯	18c後～	(61)	27	30	白濁釉		28
—	21	2	KS-496.3	京・信楽	碗	18c後	(106)	(48)	66	白濁釉　若松	小杉碗	24
28	269	2	Ⅳ	岸系	鉢	17c後	—	(116)	(38)	鉄釉	見込みに目跡2つ　底部回転糸切	31



第43図　第18次調査出土土師質土器、焙烙、土製品、瓦１（29～33：S＝1/3、34：S＝1/2、35～39：S＝1/6）

第27表　第18次調査出土焙烙・土師質土器観察表

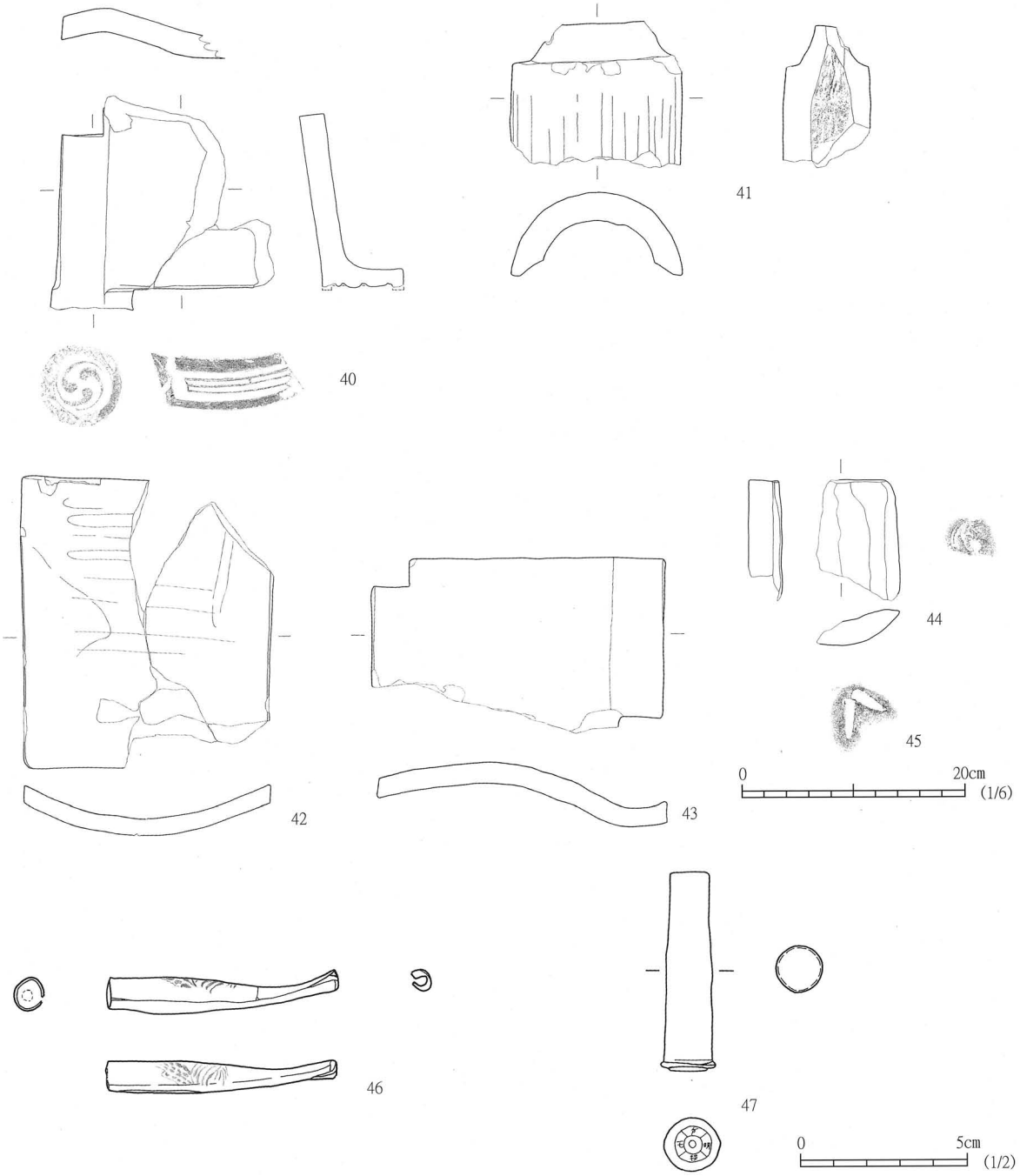
図	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	口径（mm）	底径（mm）	器高（mm）	備　考	図版
29	423	土師質土器	Ⅲ	1	Ⅱ	88	56	21	底部回転糸切	32
－	664	陶器	焙烙	1	Ⅰ	(150)	(141)	40	鉛釉　底面回転ヘラケズリ	35
30	460	陶器	焙烙	1	Ⅱ	－	－	－	鉛釉　把手部のみ	34
31	256	土師質土器	焼塩壷	1	KS-496.1	－	(75)	－	外面体部格子タタキ	37
32	51	土師質土器	鉢	2	KS-496.3	－	(128)	－	花菱文	33
33	594	土師質土器	鉢	2	撹乱	－	(52)	－	花菱文	36

第28表　第18次調査出土土製品観察表

図	遺物番号	種　類	遺構・層位	区	法　量（mm）	備　考	写真
34	139	天神	KS-496.3	2	高さ（21）　幅33	型作り　頭部一部欠損　底部に穿孔	38

第29表　第18次調査出土瓦１観察表

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文　様	計測値（mm）	重量(g)	備　考	写真
35	801	軒丸瓦	1	Ⅰ	三巴	瓦当径（118）　文様区径（87.8）　周縁幅20.6	329.4		41
36	178	軒丸瓦	2	KS-496.3	九曜	瓦当径（138）　文様区径（110）　周縁幅25.2	421		42
37	146	軒丸瓦	1	KS-496.1	三引両	瓦当径142　文様区径119.8　周縁幅11.8	376.9		43
38	736	軒平瓦	1	Ⅰ	菊花		191.1		39
39	806	軒桟瓦	1	KS-496.1	江戸式	－	438.5		40



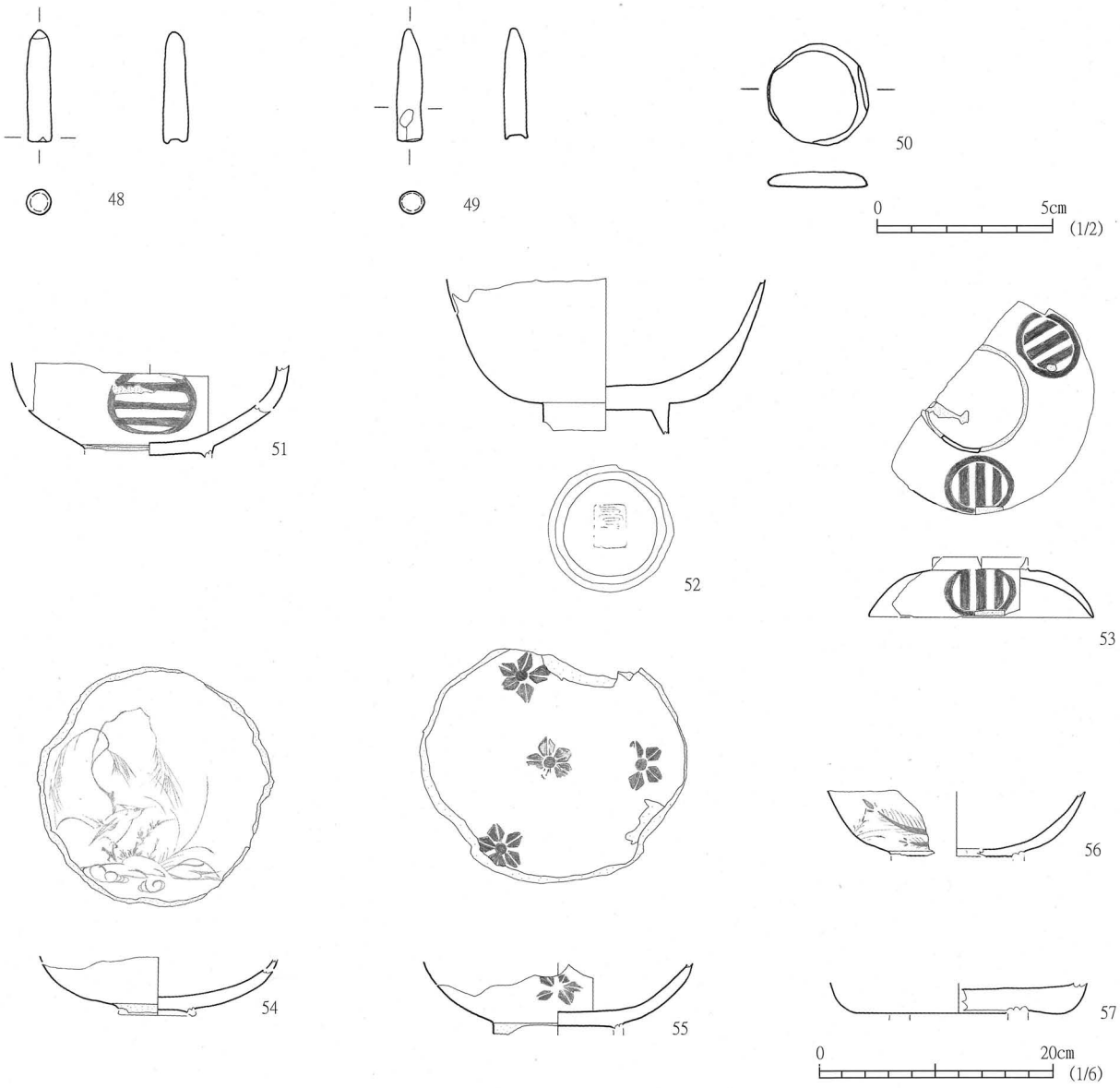
第44図　第18次調査出土瓦２、金属製品１（40～45：S＝1/6、46・47：S＝1/2）

第30表　第18次調査出土瓦２観察表

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文　様	計測値（mm）	重量(g)	備　考	写真
40	786	軒桟瓦	1	KS-501.1	三巴	瓦当径75.9	694.5		44
41	105	丸瓦	2	KS-496.3	－	全長（132）　幅155　厚さ26	914.4		45
42	725	平瓦	1	Ⅱ	－	全長264　幅224　厚さ16	1532.5		49
43	796	桟瓦	1	KS-496.1	－	全長（160）　幅（264）　厚さ（19）	1002.0		50
44	739	輪違い(刻印)	1	Ⅰ	－	全長（109）　幅（74）　厚さ（21）	185.3	圧痕	46
45	623	丸瓦(刻印)	2	撹乱	－	全長（164）　幅（137）　厚さ23	547.8	線刻	47

第31表　第18次調査出土金属製品１観察表

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	写真
46	667	煙管（吸口）	1	撹乱	全長69.0　吸口直径6.0	7.1	鳥文レリーフ	51
47	181	薬莢	2	KS-496.1	全長60.0　径14.0	12.6	底面に刻印「□明□一七」	52



第45図　第18次調査出土金属製品２、石製品、木製品１（48～50：S＝1/2、51～57：S＝1/6）

第32表　第18次調査出土金属製品２観察表

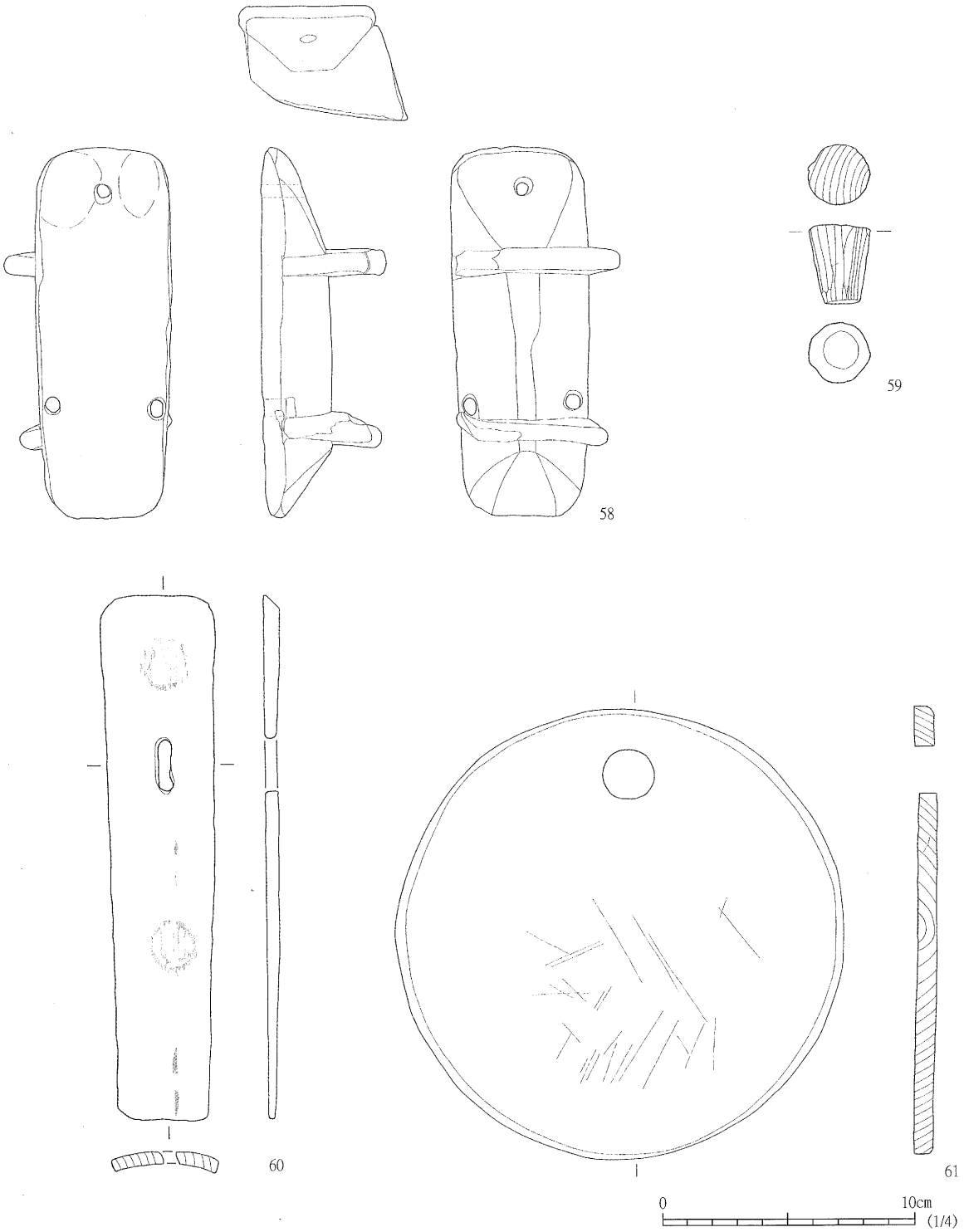
図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	写真
48	626	銃弾	1	KS-496.1	全長32.2　幅6.5	10.1		53
49	700	銃弾	1	Ⅱ	全長32.6　幅7.3　厚さ5.9	5.9		54

第33表　第18次調査出土石製品観察表

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	写真
50	230	碁石	1	Ⅱ	径21.0　厚さ6.0	3.1	黒石	55

第34表　第18次調査出土木製品１観察表

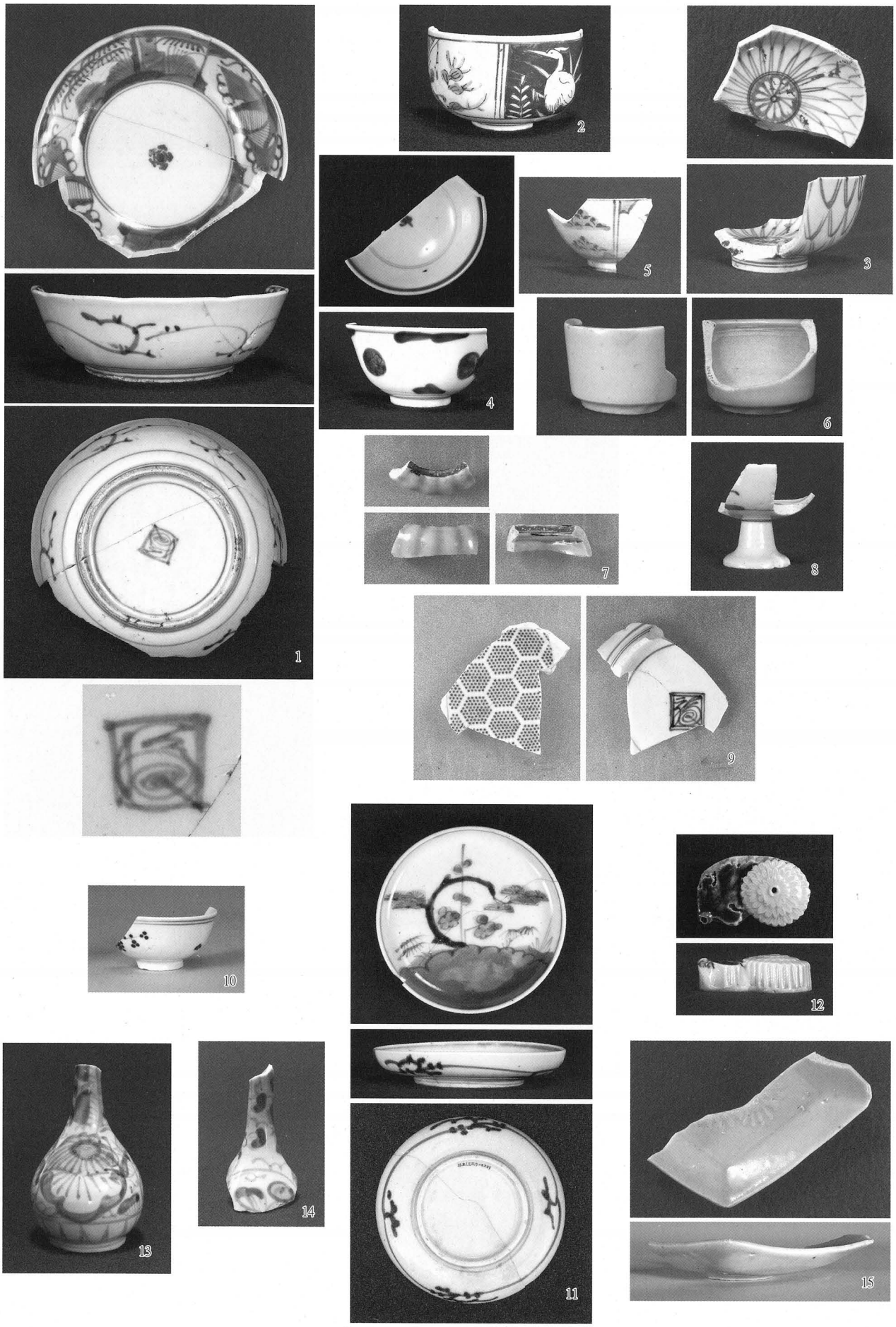
図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	写真
51	77	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径135　底径54　残存器高66	178.9	内外面黒漆　外面三方に朱漆による竪三引両文	56
52	85	漆器（蓋）	2	KS-496.3	残存口径96　残存底径41　器高20	22.9	内外面黒漆　高台内に刻印	57
53	5	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径118　残存底径55　残存器高39	53.2	内面朱漆　外面黒漆　外面三方に朱漆による横三引両文	58
54	115	漆器（杯）	2	KS-496.3	残存口径100　残存底径32　残存器高25	44.2	内外面朱漆　金彩による鳥と草木文	61
55	116	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径114　残存底径65　残存器高31	53.4	内外面黒漆　外面三方に朱漆の印判による花文	62
56	87	漆器（椀）	2	KS-496.3	残存口径110　残存底径57　残存器高28	17.3	内面朱漆　外面黒漆　外面にスズ蒔絵による松文	59
57	100	漆器（平椀）	2	KS-496.3	残存口径110　残存器高120	41.9	内面黒漆　外面緑漆	60



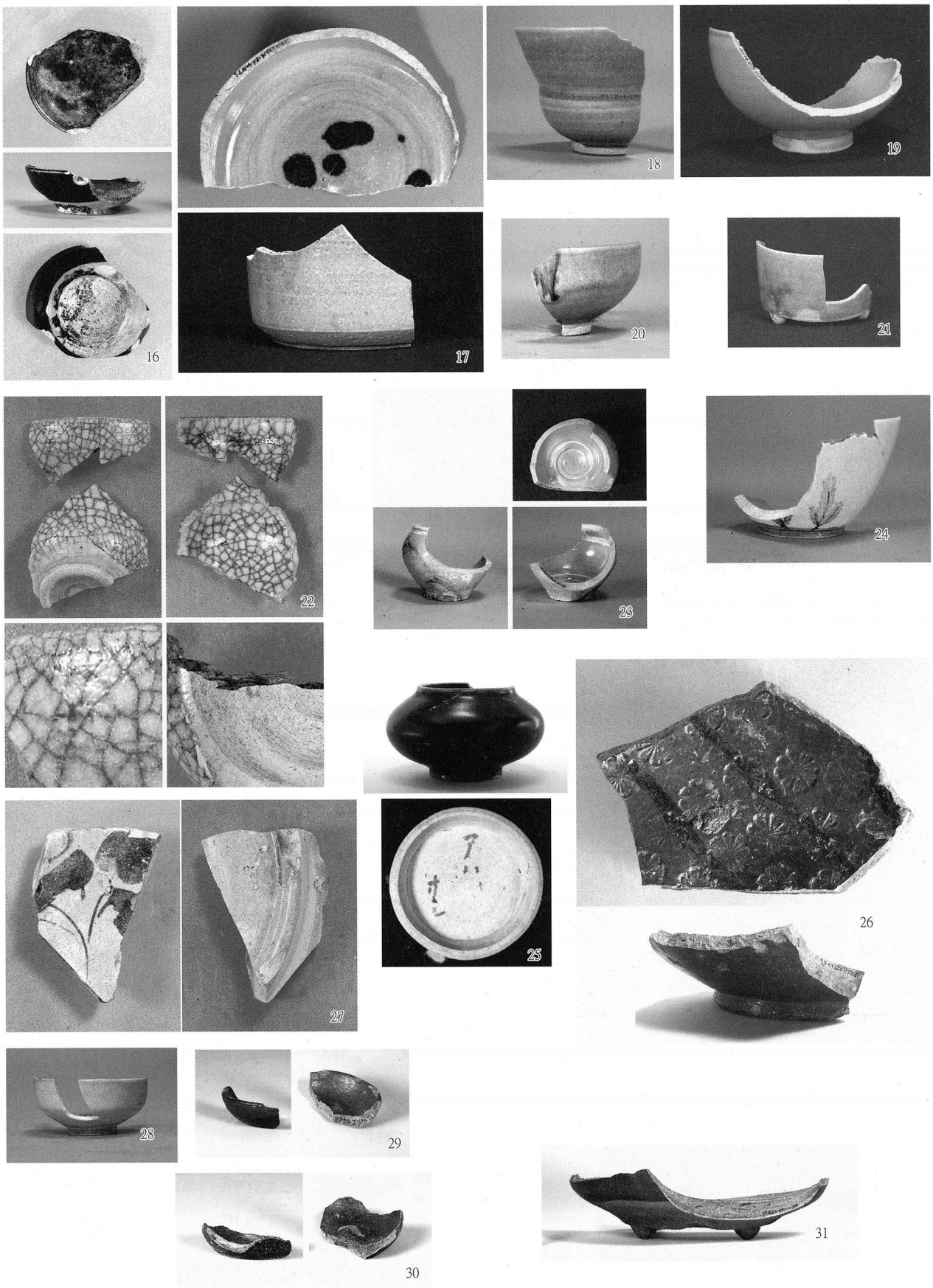
第46図　第18次調査出土木製品２（S＝1/4）

第35表　第18次調査出土木製品２観察表

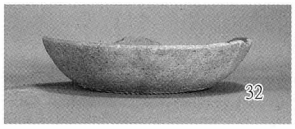
図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量（g）	備考	写真
58	64	下駄	2	KS-496.3	全長236　幅86　高さ75	602.6	陰卯差歯	63
59	65	桶（枠）	2	KS-496.3	全長51　径38	40.7		64
60	861	桶（側板）	2	KS-496.1	器高335　厚さ9　孔33×15	176.1	外面2箇所に焼印	65
61	89	桶（天板）	2	KS-496.3	径287　厚さ12　栓口径31	784.0		66

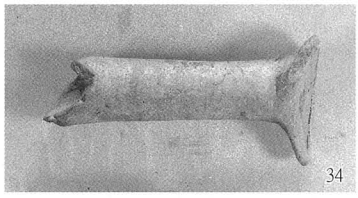


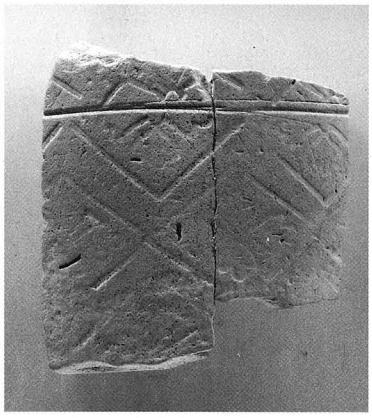
第47図　第18次調査出土磁器

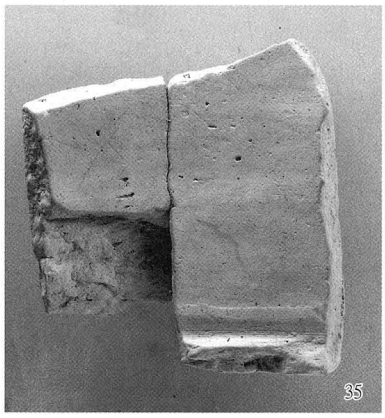


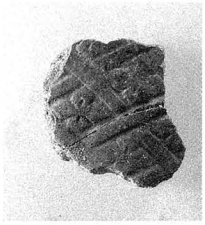
第48図　第18次調査出土陶器

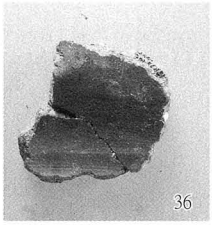


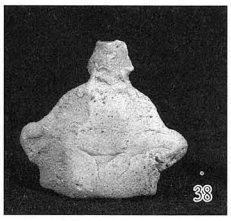


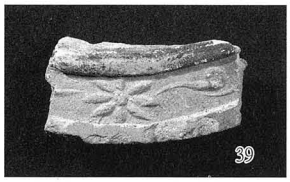


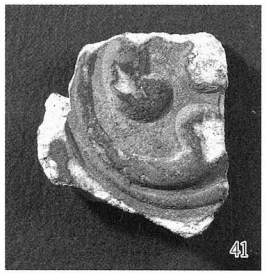


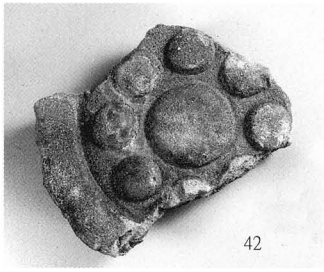


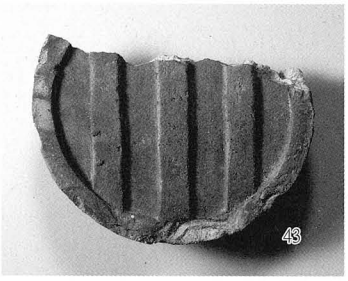




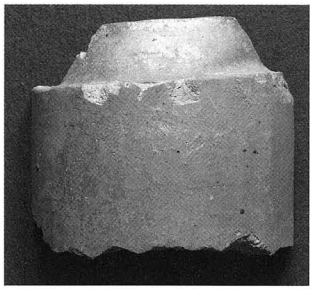


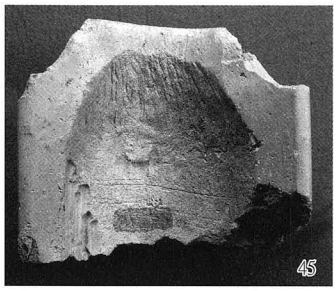


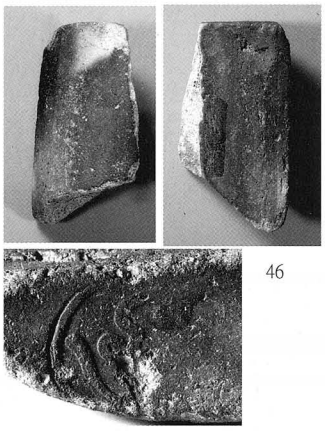




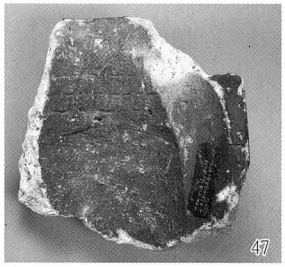
第49図　第18次調査出土土師質土器・焙烙・土製品・瓦１

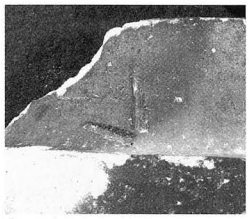


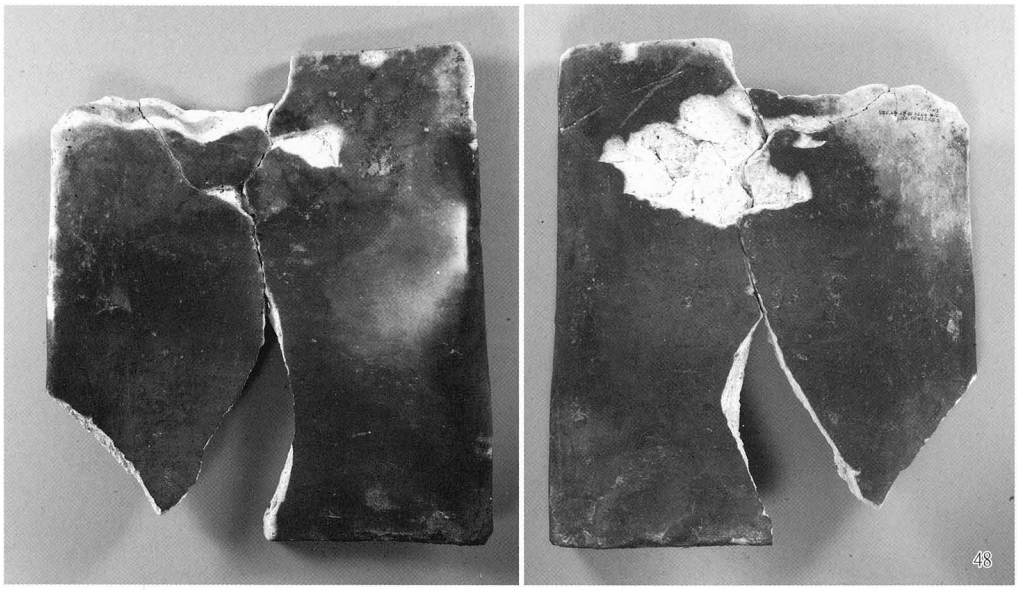


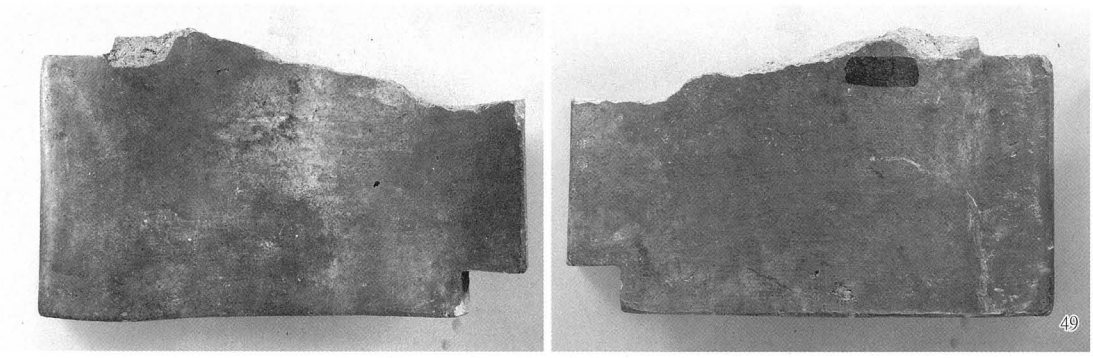


46

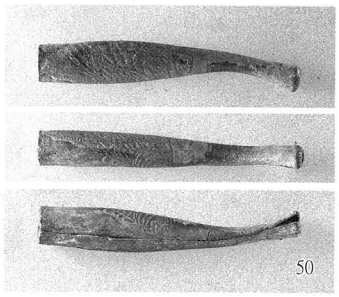


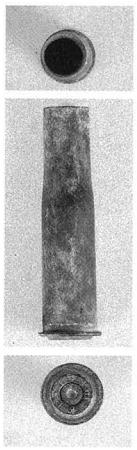


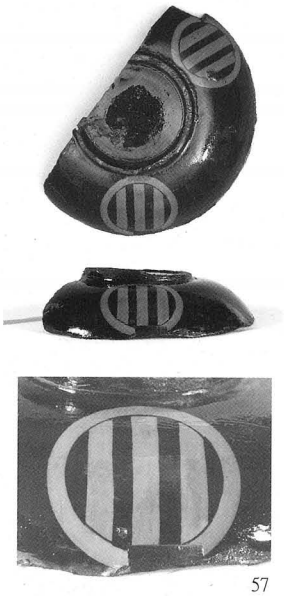


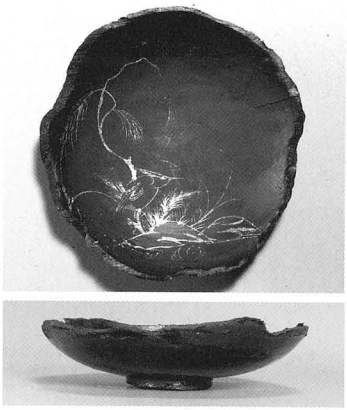


第50図　第18次調査出土瓦２



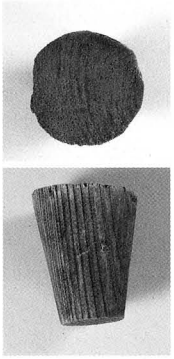




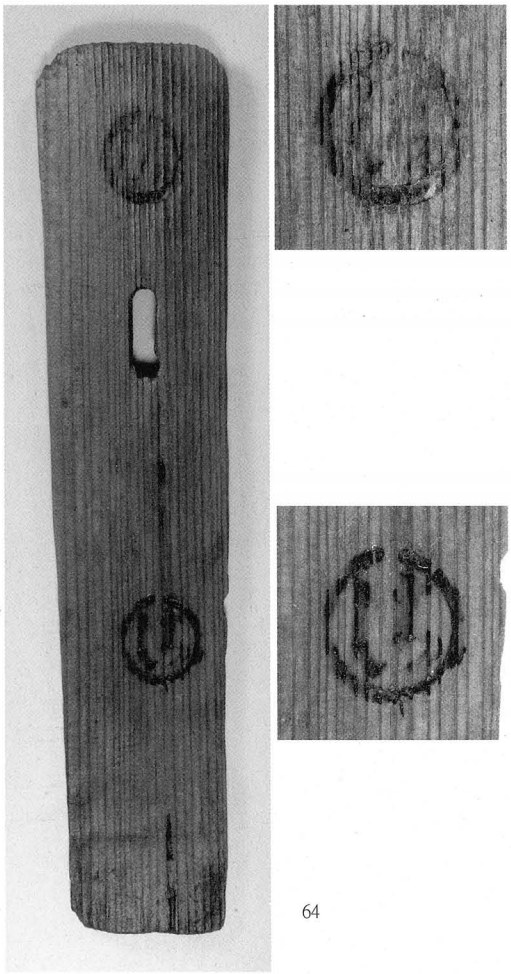


第51図　第18次調査出土金属製品・石製品・木製品 1

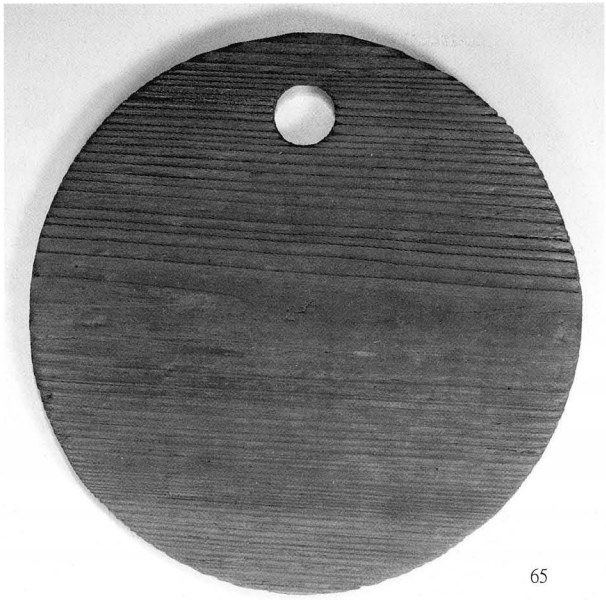
62



63



64



65

第52図　第18次調査出土木製品 2

５．まとめ

第18次調査では、以下①～⑨の成果が得られた。

①KS-496堀跡の調査では、堀の南岸および南西角部を検出した。これにより堀の規模は、南北幅が35～40mとなることが明らかとなった。

②堀跡南岸は、新・古２時期の盛土が確認された。また、これら盛土に伴って３列の杭列を検出した。杭列６，７，８は南岸の検出ラインにほぼ平行し、南岸盛土（Ⅲ層）に伴うものとみられる。機能的には土留めの杭と考えられる。

③堀跡の南西角部付近では堀が機能していた頃と同時期の木樋跡１条を検出した。木樋が堀に向かって傾斜しており、堀の外から堀への導水を目的として造られた施設と考えられる。

④堀の水位に関して、南岸盛土の直上にのる水性堆積層（KS-496・１層）の最上位レベルをみると、29.750mになる。今回の調査および絵図、地図の検討から、明治以降、山側からの土砂が湧水とともにが石組溝を通じて堀内に流入し、自然埋没していったものと考えられる。

⑤杭列６・７・８を直接覆う堆積層（KS-496・３層）からは17世紀末から19世紀の陶磁器が出土している。堀はこの頃までには機能していたものと推定される。

⑥絵図からの検討として、正保２年［1645］の奥州仙台城絵図には「長二十間、口八間、深二間」と東西に長い堀が描かれており、一間を６尺（約181cm）とすると、それぞれ約36m・14m・3.6mとなる。「口八間」を堀の南北幅とした場合、今回確認された堀の幅は20m以上も上回ることになる。この理由としては江戸時代を通じて再三堀の改修が行われ、次第に幅が広くなったなどと推測されるが、堀の改修は幕府の許可が必要な工事であることから、文献や絵図等の史料調査も含め今後も十分検討する必要性がある。

⑦１区西部で確認されたKS-498溝跡は山からの湧水を遮断するために掘削されたと考えられる。また、KS-499集石遺構、KS-500しがらみ遺構ともに、遺構上面に盛土（Ⅴ層）があることから、整地に伴うものと考えられる。

⑧遺物は、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦、鉄製品、石製品、漆器、木製品などが出土した。

⑨盛土層直下の1区Ⅴ・Ⅷ層、2区Ⅷ層からサンプルを採取し、放射性炭素年代測定を行った。それぞれ補正14C年代値で500±30yrBp、29660±150yrBp、12960±50yrBpの結果を得た。これらの年代値を暦年較正すると１区南部西壁Ⅴ層の試料は概ね15世紀となり、１区東部西壁Ⅷ層と２区東壁Ⅷ層の試料については、紀元前13200～27870年となる。１区Ⅴ層が、政宗の築城期遺構の盛土層とした場合これより古い年代であり、１区東部西壁Ⅷ層と２区東壁Ⅷ層についても完新世の堆積物と推定していたが、これよりも古い年代が出ているので、当該地区の地形形成については、さらに検討する必要がある。

Ⅵ　理化学分析

放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

第18次調査1区南部西壁Ⅴ層、東部西壁Ⅷ層、2区Ⅷ層中より採取した土壌サンプル3点についてAMSによる放射性炭素年代測定を行った。1区南部西壁Ⅴ層、東部西壁Ⅷ層、2区Ⅷ層は近世整地層の下層であり、近世の人為的堆積層かそれ以前の自然堆積層かを明らかにするため、考古学的手法のみならずその年代決定にはあらゆる手段を用いるべきとの判断から実施するものである。

1　測定対象試料

測定対象試料は、1区西部南壁Ⅴ層の土壌中の木片（No.C-1: IAAA-72373）、1区東部西壁Ⅷ層の土壌中の木片（No.C-2: IAAA-72374）、2区東壁Ⅷ層の土壌中の木片（No.C-3: IAAA-72375）、合計3点である。

2　化学処理工程

①メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

②AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

③試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

⑥グラファイトを内径1㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

3　測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

4　算出方法

①年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

②^{14}C年代（Libby Age:yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値である。

③付記した誤差は、複数回の測定値について$\chi 2$検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。

④δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000$　(1)

$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB}) / ^{13}A_{PDB}] \times 1000$　(2)

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に（加速器）と注記する。

⑤$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$(‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。

(1)式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1+\delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000$(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

⑥pMC（percentModernCarbon）は、現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合を示す表記であり、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$(‰)

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$(%)

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、^{14}C年代が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

⑦^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

⑧暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代の計算では、IntCal04データベース（Reimeretal2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（BronkRansey1995　BronkRansey2001　BronkRamsey,vanderPlichtandWeninger2001）を使用した。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（$1\sigma = 68.2\%$）あるいは2標準偏差（$2\sigma = 95.4\%$）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。

5　測定結果

^{14}C年代は、1区西部西壁Ⅴ層の土壌中の木片（No.C-1: IAAA-72373）が500±30yrBP、1区東部西壁Ⅷ層の土壌中の木片（No.C-2:IAAA-72374）が29660±150yrBP、2区東壁Ⅷ層の土壌中の木片（No.C-3:IAAA-72375）が12960±50yrBPである。暦年較正年代（$1\sigma = 68.2\%$）は、No.C-1が1410～1440AD、No.C-2が27870～27560BC、No.C-3が13490～13200BCである。試料の炭素含有率は45～60％程であり、十分な値である。3試料には年代差があるが、化学処理および測定内容に問題なく、妥当な年代と考えられる。

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA－72373	試料採取場所 ：宮城県仙台市青葉区川内追廻 仙台城跡 試料形態　：土壌 試料名（番号）：No.C－1	Libby Age（yrBP）　：　500± 30 δ 13C（‰）、（加速器）＝ －27.03± 0.88 Δ 14C（‰）　＝　－59.9± 3.7 pMC（%）　＝　94.01± 0.37
#2074－1	（参考）δ 13C の補正無し	δ 14C（‰）　＝　－63.9± 3.3 pMC（%）　＝　93.61± 0.33 Age（yrBP）　：　：530± 30
IAAA－72374	試料採取場所 ：宮城県仙台市青葉区川内追廻 仙台城跡 試料形態　：土壌 試料名（番号）：No.C－2	Libby Age（yrBP）　：　29,660± 150 δ 13C（‰）、（加速器）＝ －26.13± 0.62 Δ 14C（‰）　＝ －975.1± 0.5 pMC（%）　＝　2.49± 0.05
#2074－2	（参考）δ 13C の補正無し	δ 14C（‰）　＝ －975.2± 0.5 pMC（%）　＝　2.48± 0.05 Age（yrBP）　：　29,680± 150
IAAA－72375	試料採取場所 ：宮城県仙台市青葉区川内追廻 仙台城跡 試料形態　：土壌 試料名（番号）：No.C－3	Libby Age（yrBP）　：　12,960± 50 δ 13C（‰）、（加速器）＝ －20.02± 0.56 Δ 14C（‰）　＝ －800.9± 1.3 pMC（%）　＝　19.91± 0.13
#2074－3	（参考）δ 13C の補正無し	δ 14C（‰）　＝ －798.8± 1.3 pMC（%）　＝　20.12± 0.13 Age（yrBP）　：　12,880± 50

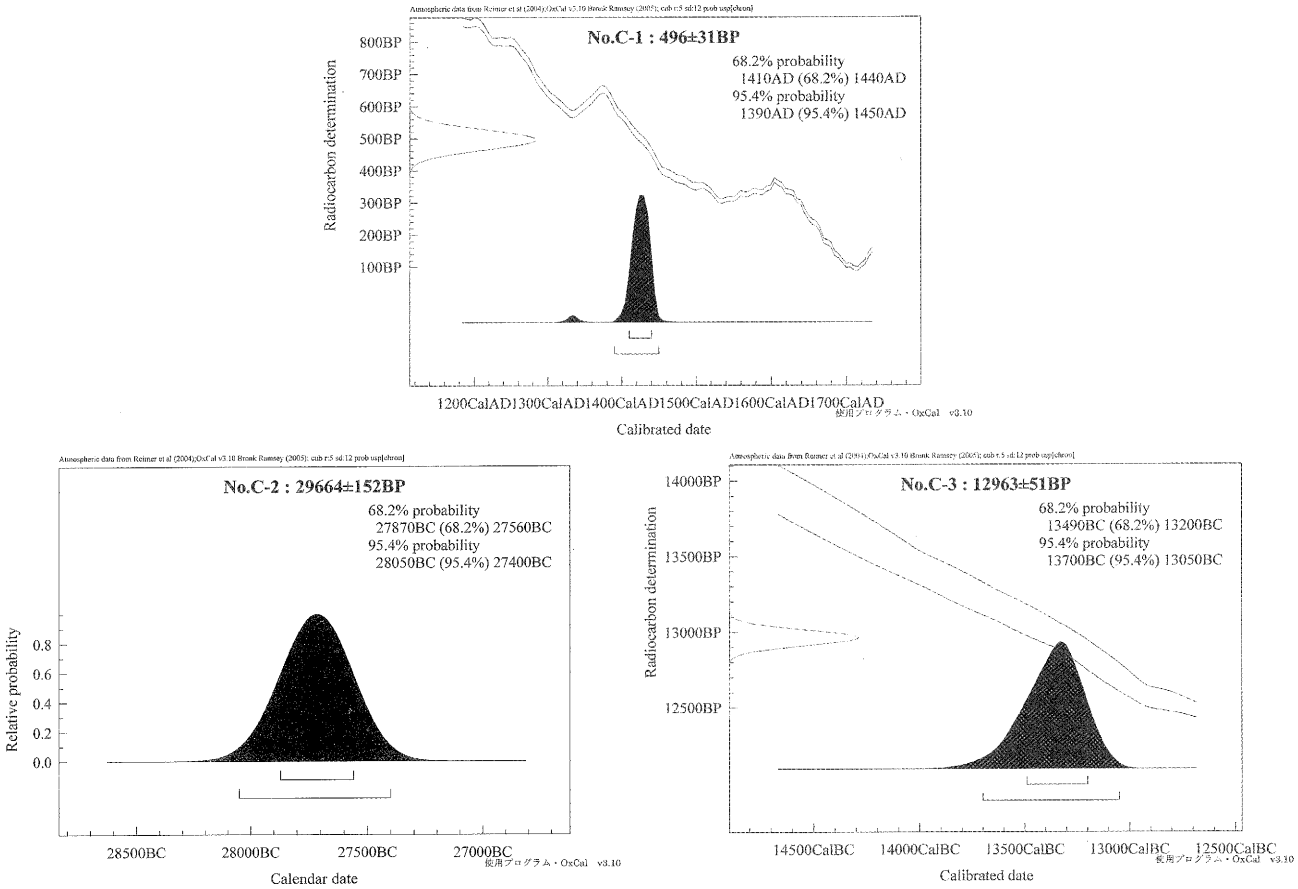
参考　IAAA－72373～72375に関しては、木片を処理し測定した結果

第36表　放射性炭素年代測定　測定結果

試料番号	Libby Age（yrBP）	
No.C-1	496	±31
No.C-2	29664	±152
No.C-3	12963	±51

上記のLibby　Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値

第37表　放射性炭素年代測定暦年較正用年代



第53図　暦年較正

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2) , 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A) , 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A) , 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

Ⅶ　石垣測量調査

1．調査の経緯と石垣の位置

仙台城本丸跡北西壁石垣は、仙台城本丸跡の北西部、詰門跡から酉門跡にかけて位置している。石垣は、交通量の多い市道仙台城跡線に面しており、現在は私有地である。調査にあたり酉門跡付近から北に向かって順にＡ面からＪ面までの地区を設け、今回はＣ面及びＤ面の測量を実施した。

平成20年１月11日より事前の石垣清掃を行ったが、交通量の多い市道に面しているため、目立つ草木の除去を行い最小限の清掃にとどめた。そのため、石材間や天端には草や苔が残り、若干、形状が不明瞭な部分もある。測量は、レーザーを用い、１月16日に基準点設置とオルソ画像用の写真撮影、１月17日・18日に測量を実施した。レーザーは、地上からのみ照射した。

第54図　石垣測量調査位置図（○は測量範囲）

2．測量結果の概要

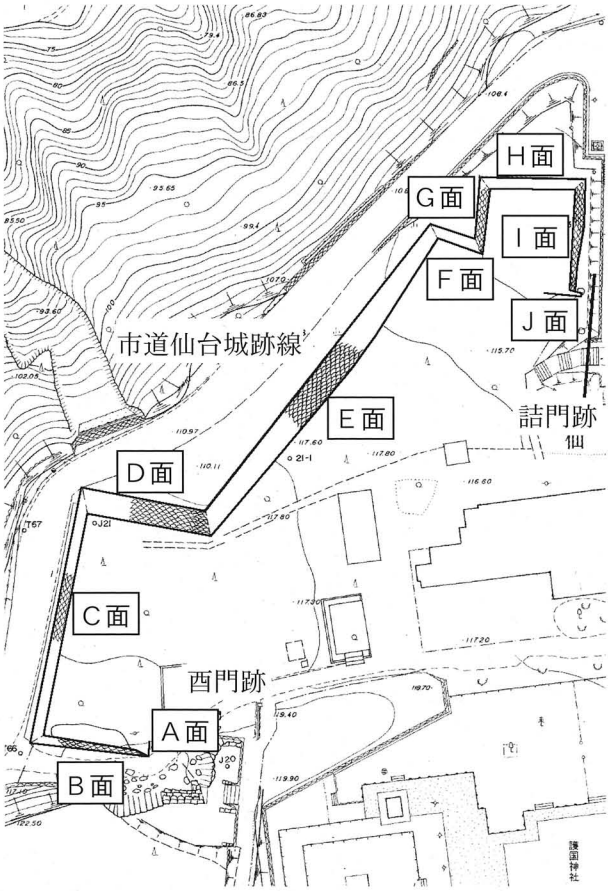
①Ｃ面

・天端の長さ：約39.15m、下端の長さ：約43.25m、Ｂ・Ｃ面出角部高：約4.20m、Ｃ・Ｄ面出角部高：約6.65m。

・切石を使った横目地が通る整層積みである。Ｂ・Ｃ面出角部の勾配は約72度で立ち上がり天端付近は約79度である。Ｃ・Ｄ面出角部の勾配は約65度であり、天端付近は約75度である。石垣全体の勾配は66～70度である。

・中央部分から下部にかけて孕みが見られる。

・天端中央部分には、石材欠損箇所が１か所あり、石材間に根が生えている場所もある。南部下端近くには２～５㎝の深さで内側にずれた石材２石を確認した。



第55図　石垣測量調査位置詳細図

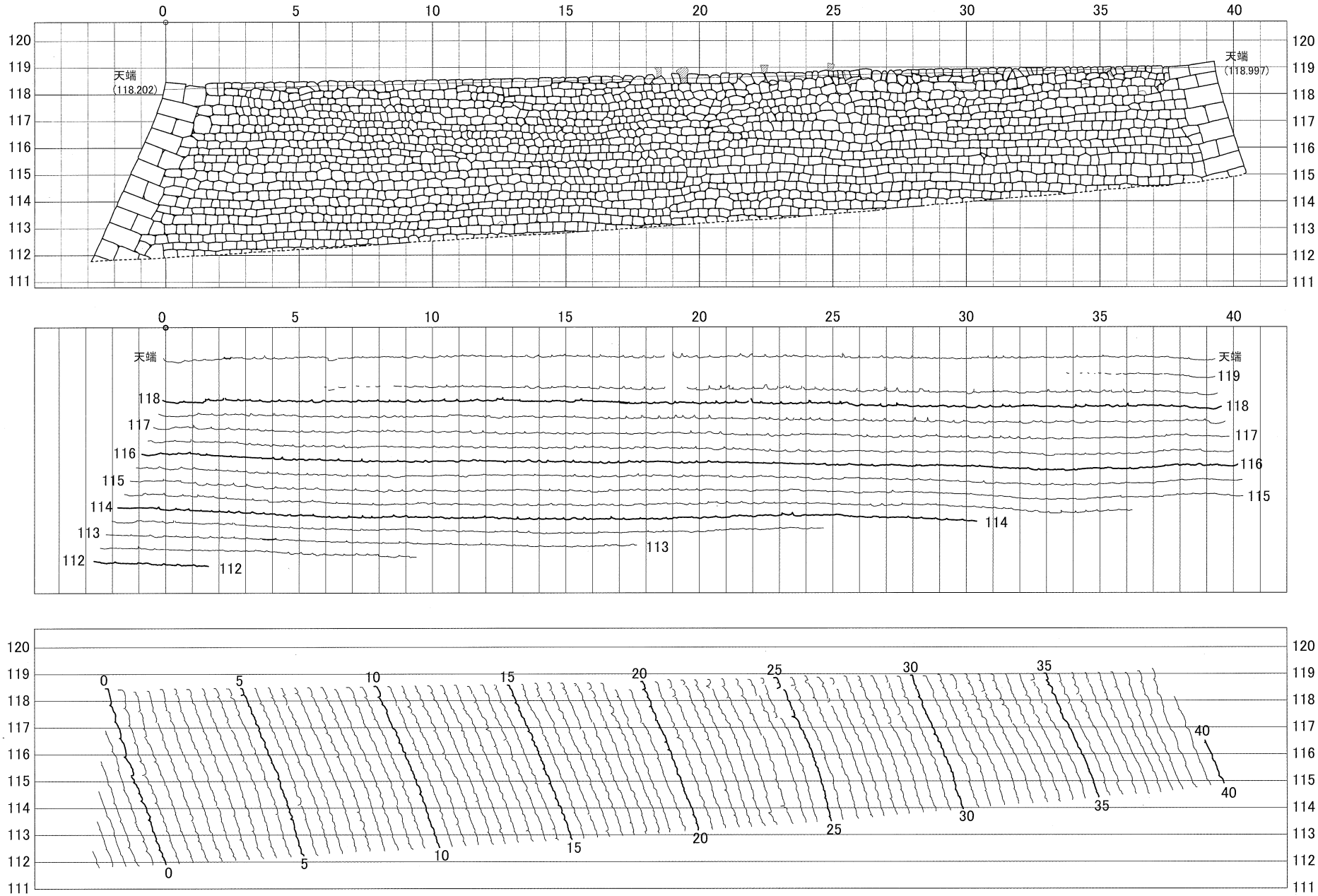
②Ｄ面

・天端の長さ：約20.95m、下端の長さ：約20.75m、Ｃ・Ｄ面出角部高：約6.70m、Ｄ・Ｅ面入角部：約7.25m。

・天端はほぼ水平である。角部は算木積みで、反りが見られる。Ｃ・Ｄ面角部をＤ面側から見た勾配は、約70度で、天端付近は約78度である。石垣西部は、切石を使った横目地の通る整層積みで、勾配は67～69度である。東部からＥ面にかけては自然石を使った野面積みで、勾配は64～68度である。中央の上部には、落し積みの部分が見られる。下部には、自然石の間詰石が多く見られる部分がある。

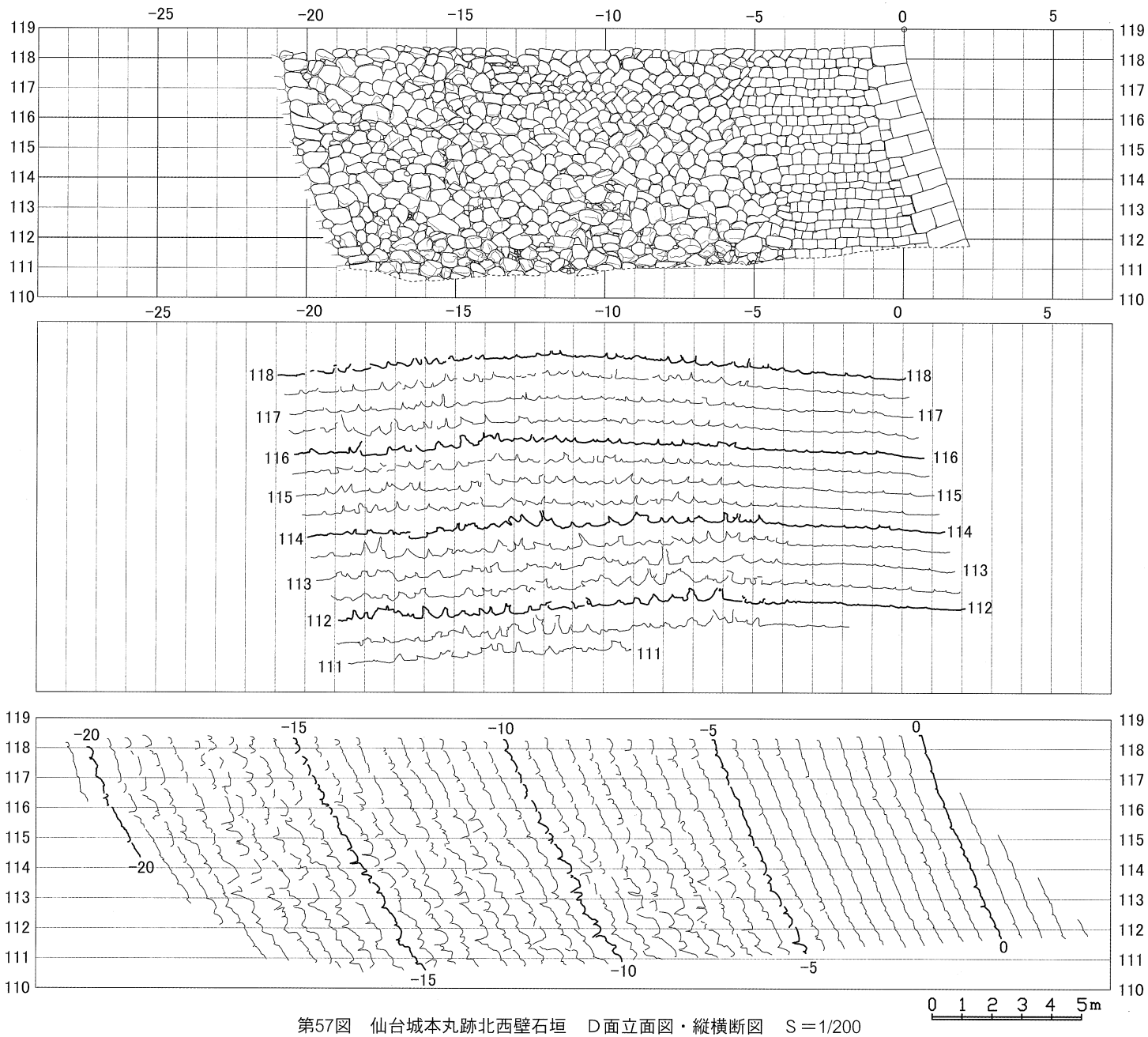
・石垣中央部から下部にかけて孕みが見られる。

・石材が突き出た箇所、へこんだ箇所が確認された。



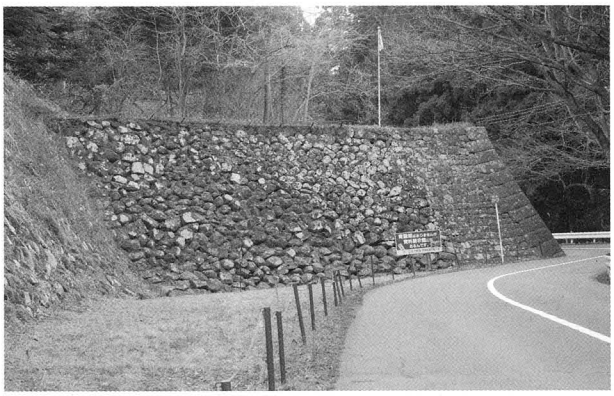
第56図　仙台城本丸跡北西壁石垣　C面立面図・縦横断図　S＝1/200

0 1 2 3 4 5m

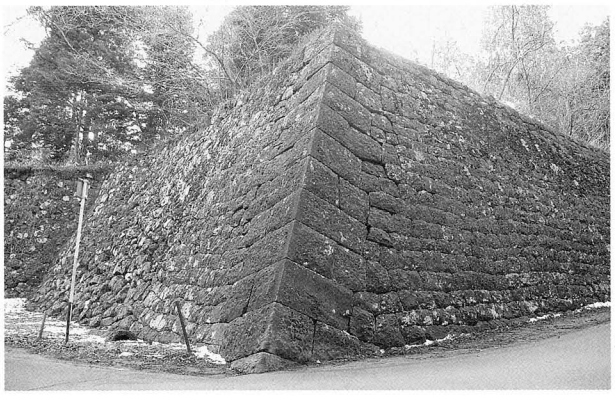


第57図　仙台城本丸跡北西壁石垣　D面立面図・縦横断図　S＝1/200

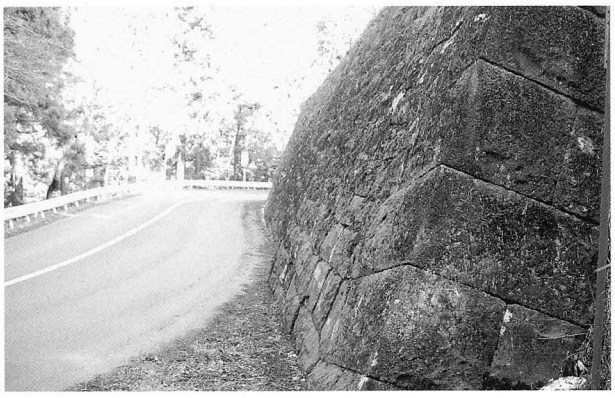
C面全景



D面全景

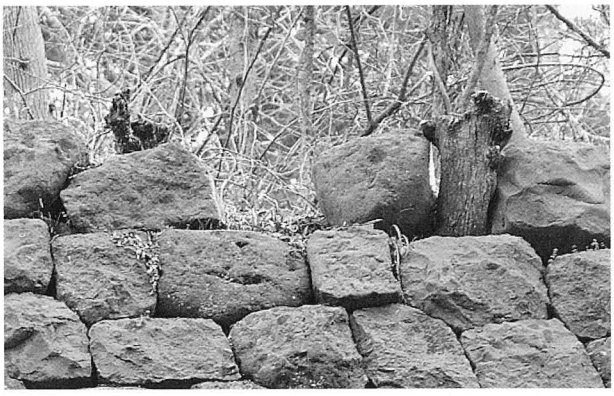


C・D面角部



B面からC面を見る

D面（切石積みと野面積み）



C面石材欠損状況

C面石材ずれ状況

レーザー測量風景

第58図

Ⅷ　絵図調査

今年度は２度、絵図調査を実施した。概略は下記の通りである。

Ⅰ．調査概要

1　絵図調査（第１回）

調査絵図：「仙台城修理伺絵図」（㈶斎藤報恩会蔵）

日　　時：平成19年５月16日（水）　　場所：仙台市博物館

調査指導：仙台市博物館　齋藤潤学芸員、菅野正道主任

調 査 者：文化財課　金森安孝、工藤哲司、渡部紀、在川宏志、鹿野仁子

2　絵図調査（第２回）

調査絵図：「御本丸大広間地絵図」（㈶斎藤報恩会蔵）、「仙台城旧御本丸御屋形図」（仙台市博物館蔵）

「青葉城御本丸之図」（仙台市博物館蔵）、「仙台城絵図」（仙台市博物館蔵）

日　　時：平成20年１月９日（水）　　場所：㈶斎藤報恩会、仙台市博物館

調査指導：仙台城跡調査指導委員会　岡崎修子委員　　仙台市博物館　齋藤潤学芸員、菅野正道主任

調 査 者：文化財課　工藤哲司、渡部紀、在川宏志、鹿野仁子

Ⅱ　各絵図について

1　「仙台城修理伺絵図」

①　概要

本絵図は、㈶斎藤報恩会に所蔵（目録番号A－Ⅲ822）されている。市史編さん室で進めていた調査に同行して調査を行った。図の全体に本丸、二の丸、蔵屋敷を描き、北東部分に寛文８年（1668)10月４日付の「去七月廿一日申之下刻地震仙台城本丸石垣所々破損覚」と題された記載がある。本丸北壁石垣に甚大な被害をもたらした寛文８年に発生した地震の修復に係る絵図とみられる。

②　観察結果

・法量は、185cm×161cmである。彩色された絵図であり、折りたたまれ保管されている。裏打ちされているが、中嶋池から二の丸にかけての範囲が欠損している。

・裏書（第61図）があり、「此絵図ハ相違有之　公儀より被相返候　公儀へ被指上候御絵図別紙有之候」と記されている。このことから、この絵図は幕府へ修復伺のために提出されたが、「相違」があったため仙台藩に返却されたことがわかる。この裏書は、現在は裏打ち紙の下になっている。

・石垣の破損範囲は茶色となって塗りつぶされ、破損範囲の長さ、高さ、面積が記されている（第59図）。

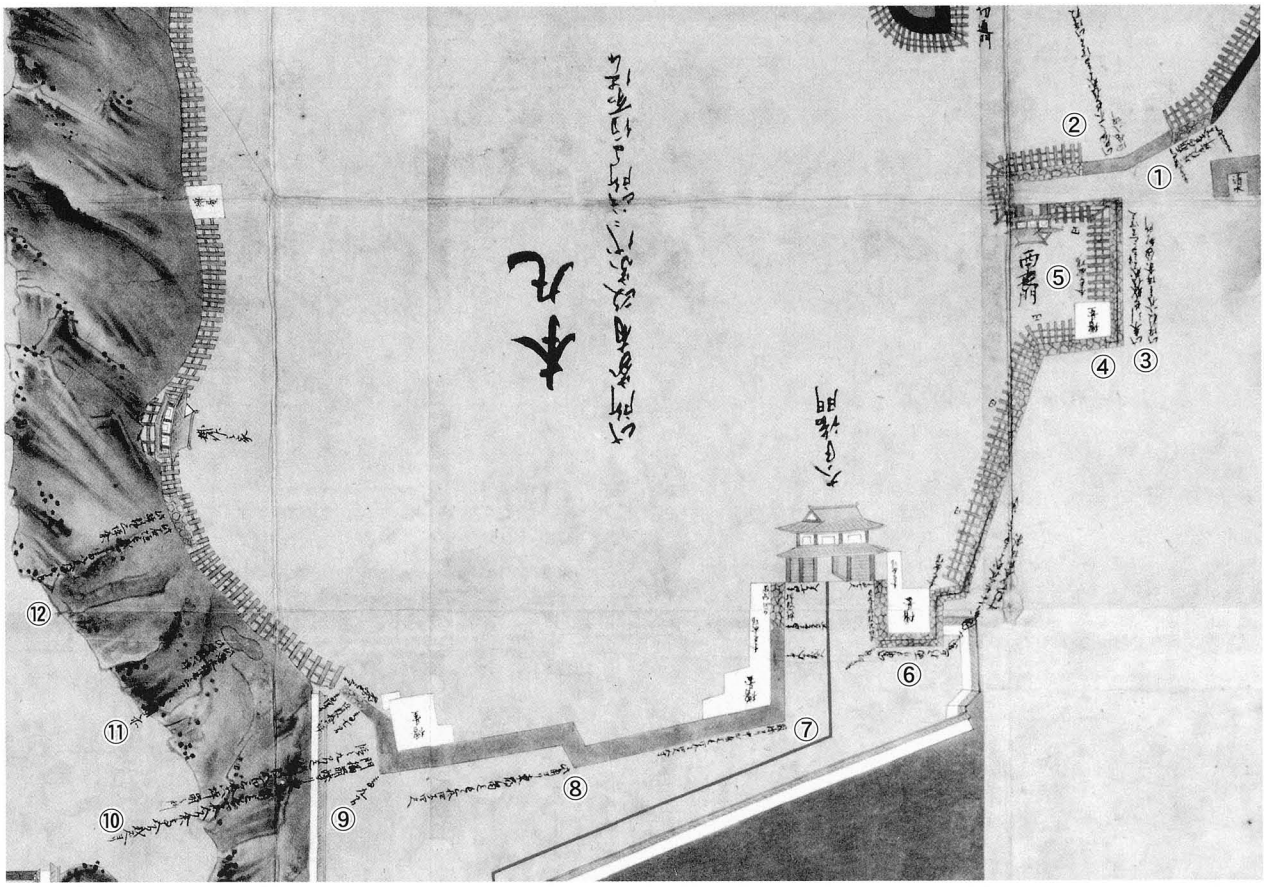
・本丸石垣の形状を前後の時期に描かれた絵図と比較すると（第62図）、正保２年（1645）に制作され幕府に提出された「奥州仙台城絵図」（正保絵図）、寛文４年（1664）の「仙台城下絵図」、寛文９年（1669）の「仙台城下絵図」の石垣形状と、本絵図の石垣形状が異なっており、天和２年（1682）に制作され幕府に提出された「奥州仙台城并城下絵図」（天和絵図）に類似している。天和絵図に描かれた石垣形状は現在の石垣形状と同じであり、寛文８年地震の修復後の姿を現した絵図と考えられる。寛文８年（1668）地震の時点であれば、本来は「正保絵図」などに描かれた石垣形状であるべきと考えられるため、なぜ時代の下る「天和絵図」に描かれた石垣形状に類似しているのか、今後検討していく課題である。

③　その他

・寛文８年地震に係る経緯について図５にまとめた。修復許可の老中奉書は寛文８年10月12日に発給されているが（原本は伝わらず、治家記録に記載がある)、５年後の寛文13年（1673）９月15日に再度発給されている。な

ぜ、2度発給されたのか、さまざまな理由が考えられているが（仙台市史城館編P264:2006）、今回新たに関連史料が発見されたことで検討を進める上での一助となると考えられる。

・図に左下に記された内容は、仙台市文化財保護委員会編『仙台城』（1967）に記載され、『仙台市史城館編』（2006）近世城館関係史料一仙台城の沿革　史料77（P467）に転載されたものと同一である。

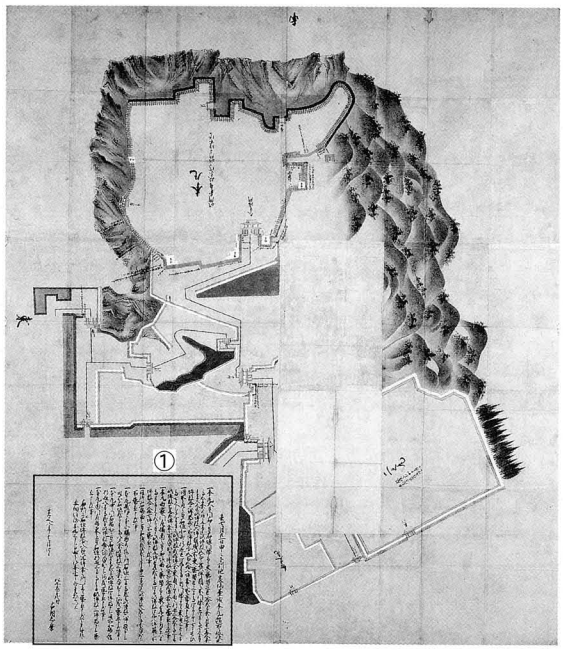


第59図　「仙台城修理伺絵図」（本丸部分）

①崩残壱間、坪数九坪
②此□之所長拾弐間高四間此坪数、四拾八坪
（崩）
③此朱引長弐拾弐間半高三間四尺、此坪数八拾壱坪余孕申
候所
④櫓臺
⑤本長家場
⑥此角ヨリ西折廻南迄孕出候所長三拾弐間高三間半、此坪数
（百拾壱）
「　」坪余
⑦崩際ヨリ中出角迄長四拾間四尺五寸
⑧此角ヨリ東築留迄長三拾四間四尺
⑨高九間
⑩門際崩残ヨリ東築留迄長七拾五間余高五間弐尺ヨリ、段々
九間迄此坪数五百三拾六坪崩之所
（落）　（崩申候）
⑪此悪水□長三間高弐間「　」所、此坪数六坪
⑫此石垣長弐間半高八尺孕出申候、此坪数三坪余

翻刻文(1)

第60図　裏書



第61図　「仙台城修理伺絵図」

1660	万治３・８．25		亀千代、家督相続が認められる
1668	寛文８・７．21		地震
		９．12	幕府へ報告
［松平亀千代より島田出雲守・大井新右衛門へ　※9.18付］（治家記録）			
		10．４	「破損覚」絵図［松平亀千代内古内志摩より］
		10．12	老中奉書発給（治家記録に写し）［老中より松平亀千代へ］
		10．12	奉書受け取りの記事（治家記録）
1669	寛文９・12		亀千代元服、陸奥守に任ぜられる
1671	寛文11		寛文事件
1673	寛文13・９．15		老中奉書発給［老中より松平陸奥守へ］
		12．２	奉書受け取りの記事（治家記録）
		12．３	奉書の御礼（治家記録）
1675	延宝	３・９	綱村、初入国

寛文８年地震前後の経緯

①

去七月廿一日申之下刻地震、仙台城本丸石垣所々破損覚、

一、本丸大手門右之方石垣門際より東築留迄長八拾弐間余之内、長七拾五間余、高五間余より段々九間迄、此坪数五百三拾六坪崩之所、門際長四間、高七尺より壱間六尺迄、此坪数六坪崩残之所、東築留長三間高四間より七間迄、此坪数拾六坪崩残之所、坪数合五百五拾八坪余之所築直申度事、

一、同所左之方石垣北西へ折廻長四拾壱間之内、門際より東角迄長九間、高七尺より三間半迄、此坪数弐拾坪余、東南より西へ折廻三拾弐間、高三間半、此坪数百拾弐坪余之所孕出申、坪数合百三拾弐坪余之所築直申度事、

一、本丸西裏門左脇南之方石垣西之築留より東長拾八間之内長六間、高半間より弐間半迄、此坪数九坪、長拾弐間、高四間、此坪数四拾八坪崩之所、坪数合五拾七坪之所築直申度事、

一、同所右脇西之方石垣弐拾弐間半、高三間四尺、此坪数八拾壱坪余孕出申候所築直申度事、

一、本丸掛作之家北脇悪水落之所、石垣三間高弐間、此坪数六坪崩申候、同所石垣弐間半、高八尺余、此坪数三坪余孕出申候、何も築直申度事、

一、本丸中門右脇北之方石垣弐間高弐間、此坪数四坪崩申候、同所北脇石垣折廻八間、高弐間、此坪数十六坪孕出申候、何も築直申度事、

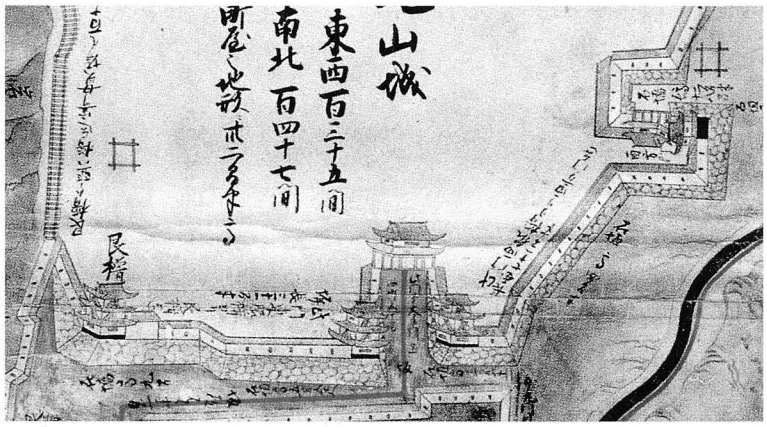
一、本丸南門左脇東之方石垣折廻三間、高一間、此坪数三坪崩申候、築直申度事、

右所々石垣坪数合八百六拾坪余之所、以連々築直申度奉存候、委細注絵図指上申候、被成下御奉書候様奉願候、以上、

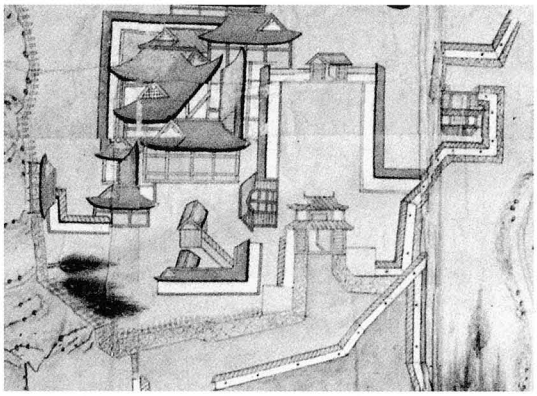
寛文八年十月四日　　松平亀千代内

古内志摩

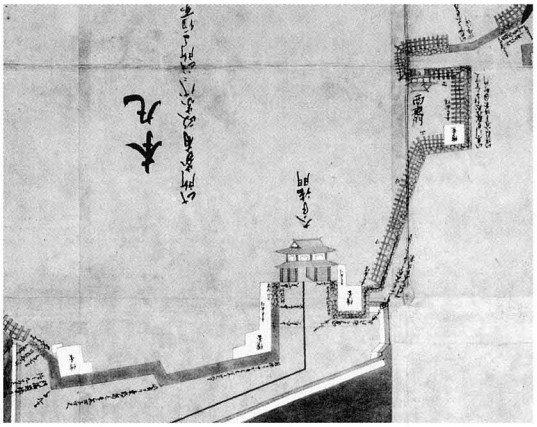
翻刻文(2)



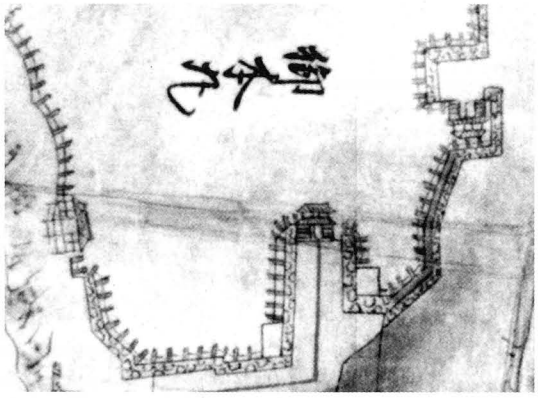
1　奥州仙台城絵図　正保２年（1645）㈶斎藤報恩会蔵



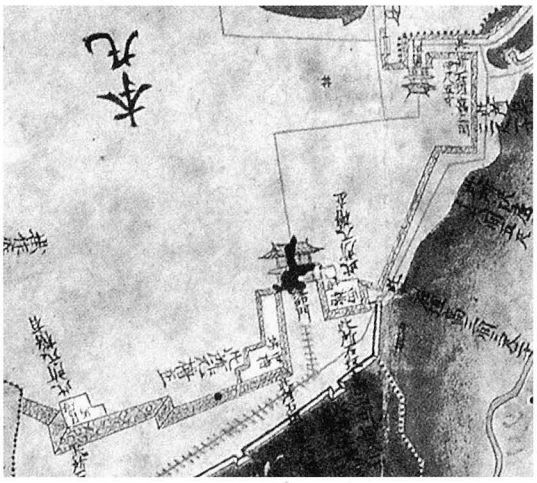
2　仙台城下絵図　寛文４年（1664）
宮城県図書館蔵



3　仙台城修理伺絵図　寛文８年（1668）
㈶斎藤報恩会蔵



4　仙台城下絵図　寛文９年（1669）
宮城県図書館蔵



5　奥州仙台城并城下絵図　天和２年（1682）
宮城県図書館蔵

第62図　本丸北壁石垣の描写の比較

２．「仙台城絵図」

①　概要

本絵図は仙台城の本丸・二の丸・東丸等を描いたもので、仙台市博物館に所蔵されている。制作年代は不詳で

曲輪内部の建物が描かれている。全体の表現方法や内部の建物の描き方は、寛文４年（1664）の「仙台城下絵図」（宮城県図書館蔵）に類似している。

② 観察結果とまとめ

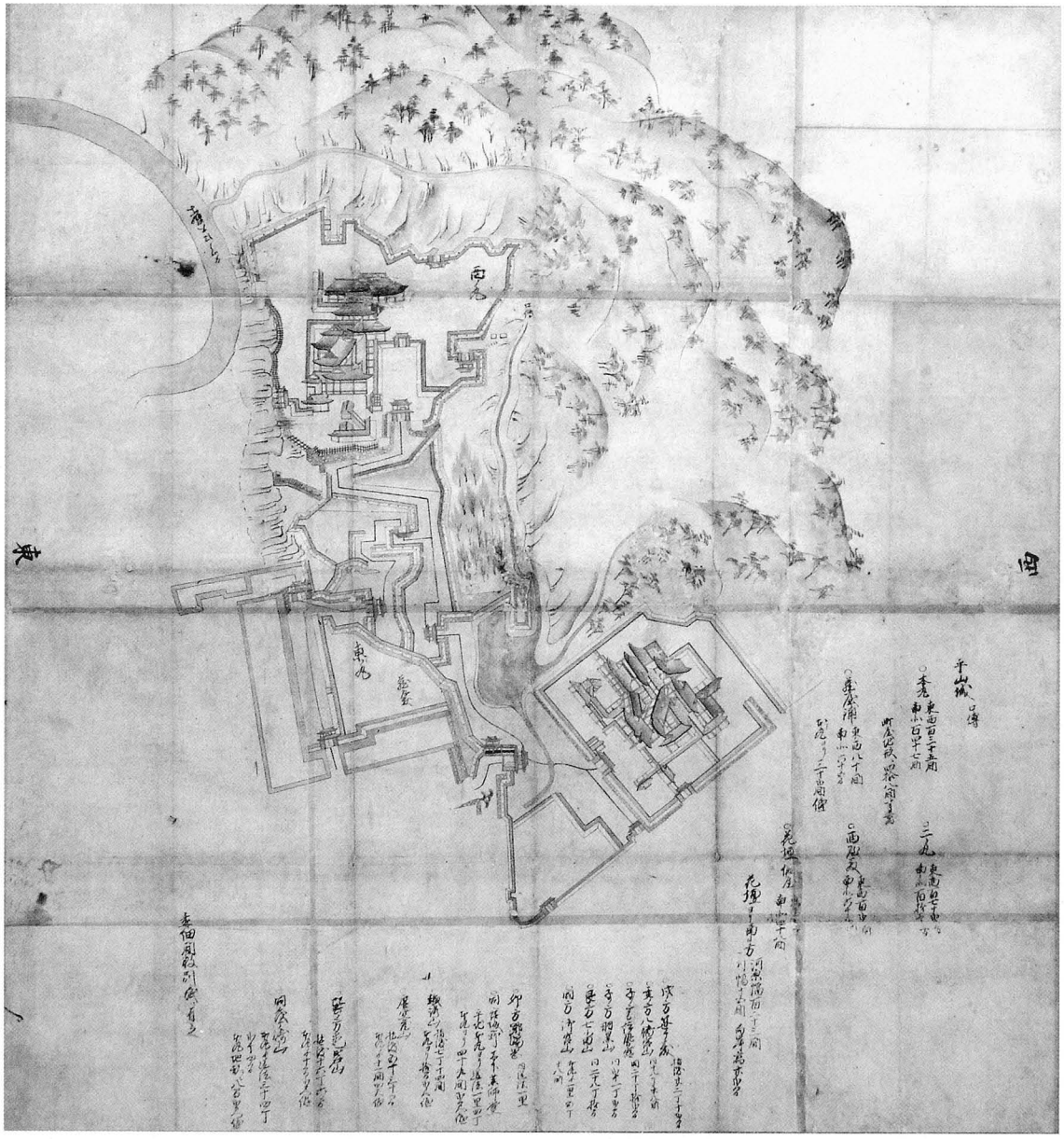
・法量は、101cm ×94cm である。南側の一部が切れている。現状は掛け軸に仕立てられている。

・「本丸御殿南半」（第64図）と「中嶋池兵具蔵」（第65図）の２箇所に描き直した跡がある。

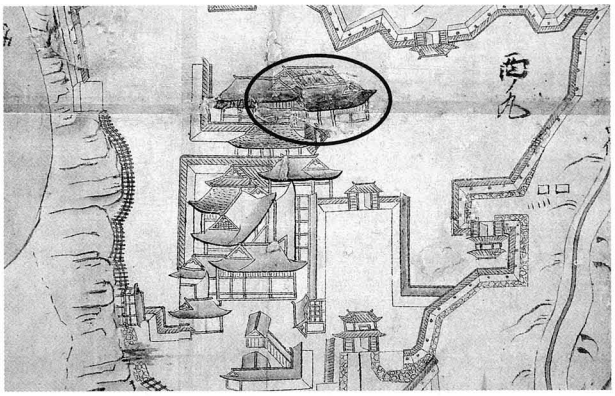
・寛文４年の「仙台城下絵図」と比べると、本絵図には「口伝」の記載があるが、寛文４年の「城下絵図」にはないといった違いが見られる。本丸部分では、本絵図には「西ノ丸」の表記があるが、城下絵図には「御本丸」と表記されている。二の丸部分では、本絵図には、詰門の脇番所・二の丸東部の塀に続く建物が描かれているが、城下絵図にはそれらはなく、城下絵図のみ「御二丸」の表記がある（第66図）。

・本丸北部付近を本絵図と寛文４年の「仙台城下絵図」・寛文９年の「仙台城下絵図」と比較すると（第67図）、本絵図の石垣の形状は寛文４年の絵図と類似し、本絵図で柵が描かれているところは寛文９年の絵図と類似している。このことから、本絵図はこの二絵図を参考にして作られた可能性が考えられる。

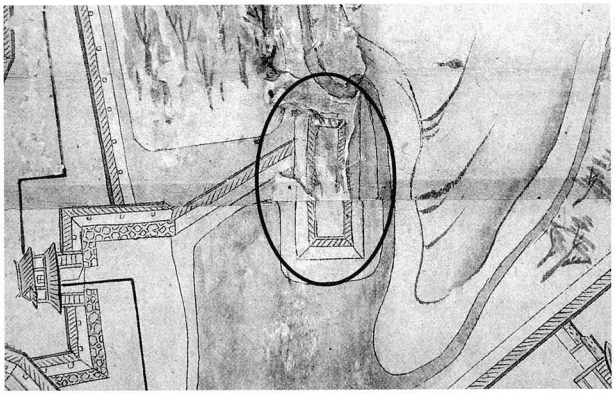
・正保２年（1645）の「奥州仙台城絵図」と比べると、本絵図には「平山城」「町屋地形四拾八間半高」と記載されているが、「奥州仙台城絵図」には「本丸山城」「三拾二間半高」と記載される等の違いがある（第68図）。



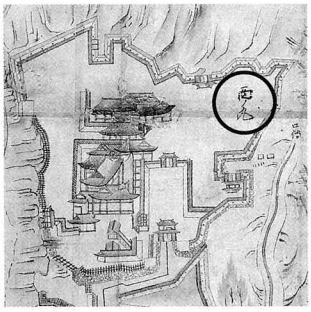
第63図 「仙台城絵図」 仙台市博物館蔵



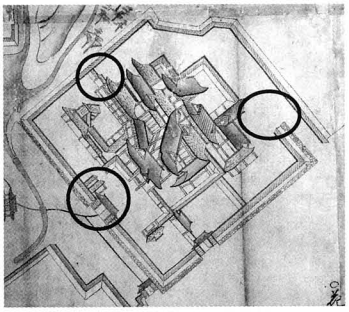
第64図　描き直された箇所（本丸部分）



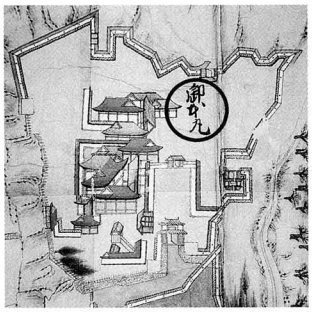
第65図　描き直された箇所（中島池・兵具蔵部分）



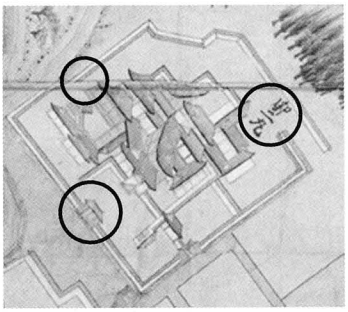
「仙台城絵図」（本丸部分）



「仙台城絵図」（二の丸部分）

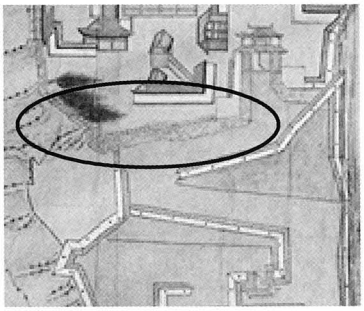


「仙台城下絵図」（本丸部分）

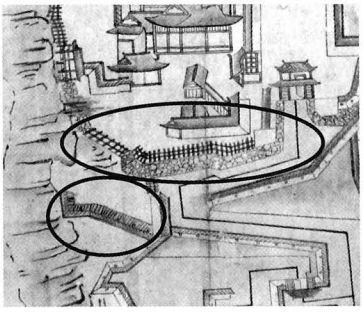


「仙台城下絵図」（二の丸部分）

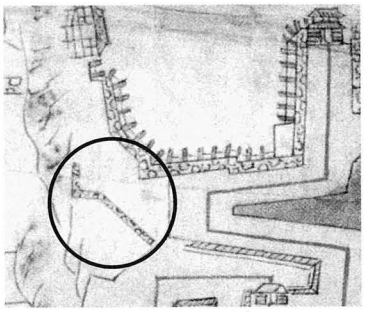
第66図　「仙台城下絵図」寛文４年（1664）との相違箇所



「仙台城下絵図」寛文４年（1664）

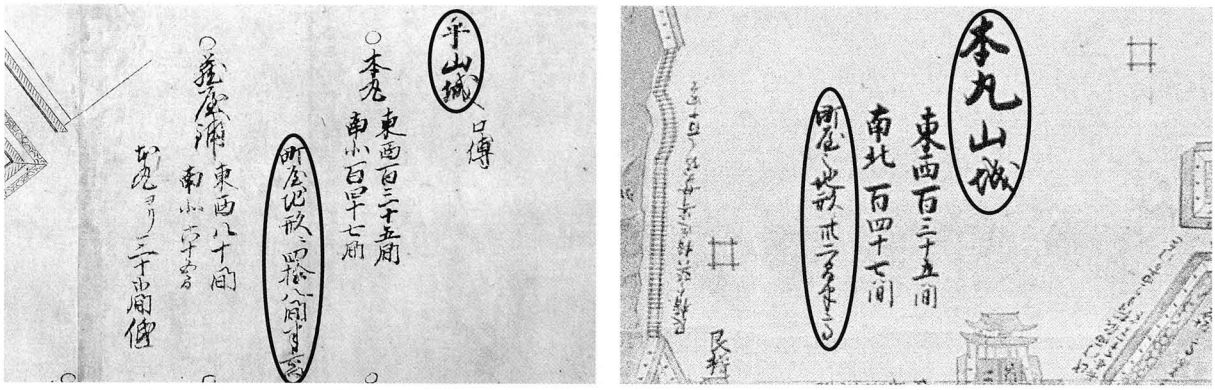


「仙台城絵図」



「仙台城下絵図」寛文９年（1669）

第67図　「仙台城絵図」と二絵図との類似箇所



「仙台城絵図」　　「奥州仙台城絵図」

第68図　「奥州仙台城絵図」正保２年（1645）との相違箇所

3．「御本丸大広間地絵図」

①　概要

本絵図は、㈶斎藤報恩会に所蔵（目録番号（「郷土資料図書分類目録」　其二（常盤文庫）Ｔ－346　絵図名は、斎藤報恩会目録による）されており、その製作年は不詳である。本丸大広間の平面図であり、部屋割り、部屋名、寸法、しつらえ等が記されている。

②　観察結果とまとめ

・法量は75.7cm ×87.3cm であり、裏打ちはせず、６枚の紙（楮紙）をついで作成されている。絵図の北東角には「御政体」の紙が貼られている。

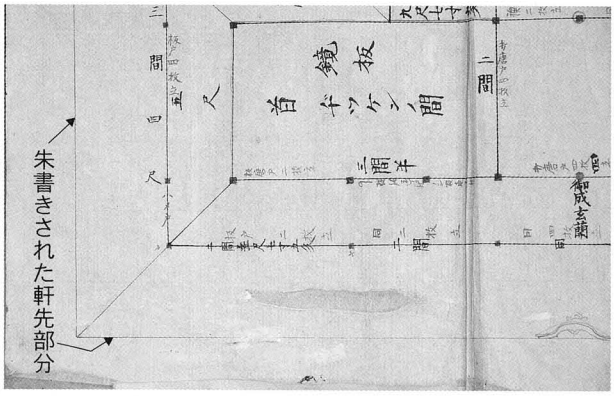
・下書きの痕跡は見られない。絵図の線や文字は墨書きと朱書きの２種類で書かれており、部屋を区切る実線、部屋名、寸法、柱（四角形）等は墨書きで、しつらえ、いくつかの柱、柱の囲み（円形）、軒先のライン等は朱書きで書かれている（第69図）。

・墨書きされた柱（四角形）と朱書きされた柱の囲み（円形）は、判を使用している（第70図）。

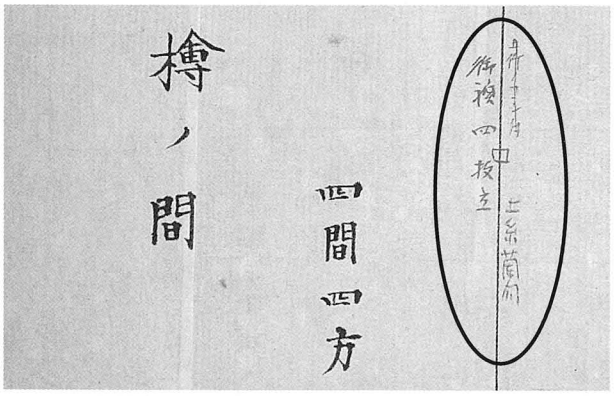
・いくつかのしつらえについては、縦線で消し、改めて書きくわえている部分が見られる。「檜ノ間」と「寅ノ間」の境には、「上竹ノフシ付」としつらえについて記載されているが、それが一本縦線で消されてあり、その下に「上糸蘭間」とある（第70図）。

・「上段の間」のかまち等、段差があると考えられるところは二重線で表記している（第67図）。

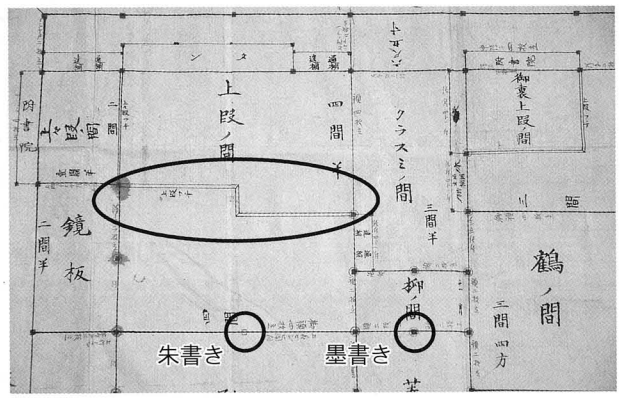
・等間隔で表記されるべき柱間は正確に記されており、くるいはない。「鹿ノ間」の北西角には６尺５寸と表記されており、実際の長さは「１寸２分」であることから、１間を「１寸２分」の縮尺で表記している。このことから、この絵図は実寸の約60分の１の絵図と考えられる（第72図）。



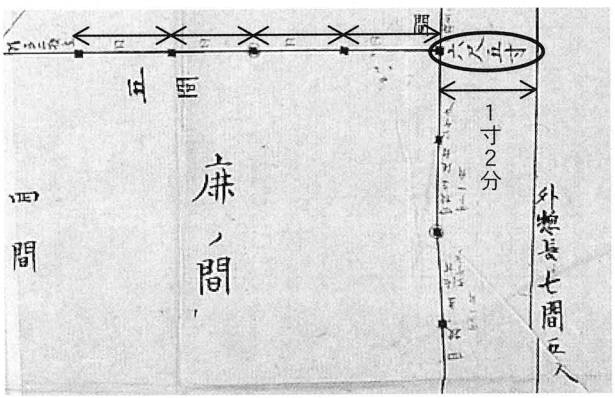
第69図　墨書きと朱書き



第70図　しつらえの訂正箇所。
（「檜ノ間」と「寅ノ間」の境）



第71図　柱(墨書きと朱書き)、かまち(二重線)の表記。



第72図　1間を「1寸2分」で表記。
(「鹿ノ間」南東角)

4．「仙台城旧御本丸御屋形図」

①　概要

・本絵図は、明和4年（1767）藤博兼が作成した絵図を、遠藤允信が明治26年（1893）に書写し、朱筆の部分を書き足したもので、仙台市博物館に所蔵されている。大広間やその周辺の様子（例：眺瀛閣（ちょうえいかく）［懸造り］）を伝える貴重な資料である。

・本絵図以外にも、同じ藤博兼作図のものを書写したという絵図として、「御本丸御屋形大略之図　明和四年丁亥秋八月　藤博兼写」（『仙台城の建築』小倉強著　昭和5年発行)、「仙台城旧本丸屋形図　約六拾分之一　明和四年藤博兼原本縮写」（『仙台藩祖尊王事蹟』矢野顕蔵著　明治32年発行）がある。両者とも本絵図とは異同がある。前者は本絵図に描かれなかった西側の建物が描かれており、中庭も描かれているが、懸造りの記載はない。後者も本絵図に描かれなかった西側の建物が描かれている。

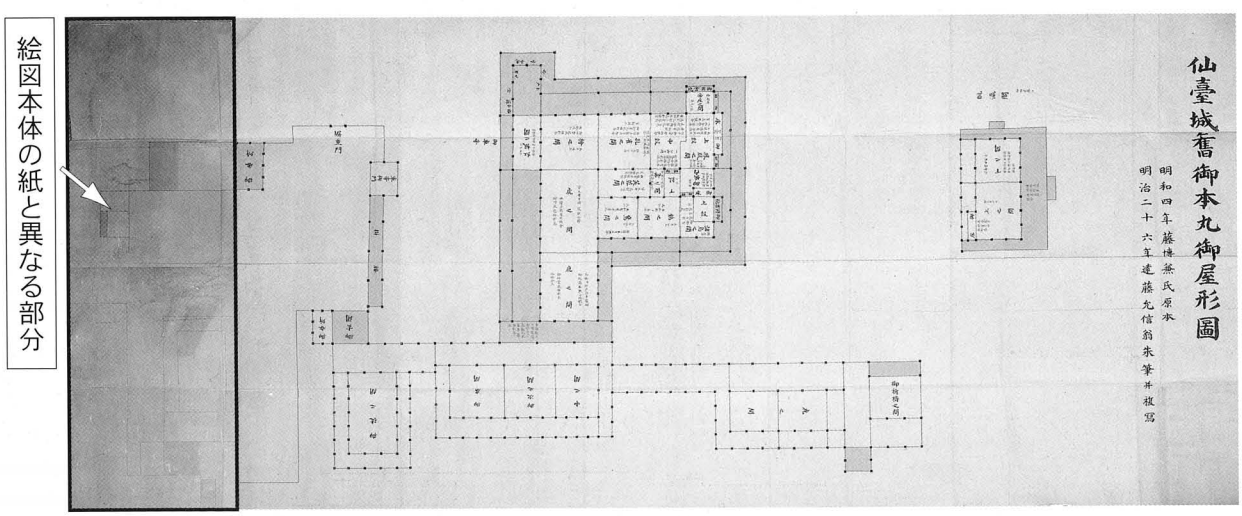
②　観察結果とまとめ

・法量は、106cm ×262cm である。紙には雲母が散らされている。裏打ちされており、裏打ち部分に文字が書かれているが判読は難しい。絵図左側の部分は、絵図本体の紙と異なり、部屋の間取りのようなものが見える。この部分については、絵図作成当時からのものなのか、後世の修補によるものかは判断できない（第73図）。

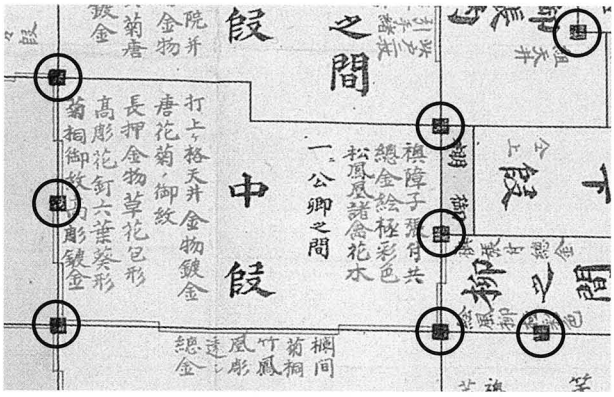
・墨書きと朱書きの2種類で書かれており、部屋を区切る実線、部屋名、柱（四角形）等は墨書き、しつらえ、扉（引き戸、押し戸）等は朱書きで書かれている。

・墨書きされた柱（四角形）は、判を使用している（第74図）。

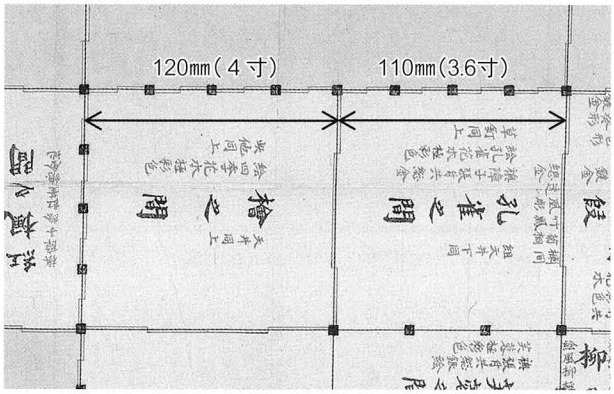
・柱間の寸法がそれぞれ違う。「孔雀之間」、「檜之間」は共に四間であるが、前者は12cm（三寸六分）、後者は11cm（四寸）となっており、同じ四間でも実寸では差がある（第75図）。



第73図　「仙台城旧御本丸御屋形図」



第74図　判で押した柱（「中段」部分）



第75図　柱間間隔の違い

5．「青葉城御本丸之図」

①　概要

本絵図は、仙台市博物館に所蔵されており、製作年は不詳であるが、料紙から明治以降のものと判断される。本丸大広間の主要部分の平面図であり、部屋割り、部屋名、寸法、しつらえ等が記されている。

②　調査結果とまとめ

・法量は、62.5cm ×46.5cm であり、西洋紙を使用している。

・基本的には墨書きだが、大広間南西角には、鉛筆で書かれたような箇所がある（第76図）。

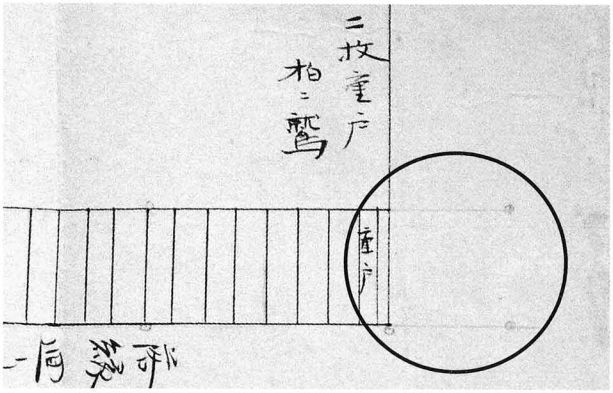
・誤って記した線を消した跡が見られる（第77図）。

・「北」「南」「東」の方位が記されているが、「北」は「南」、「南」は「北」、「東」は「西」の間違いである（第78図）。

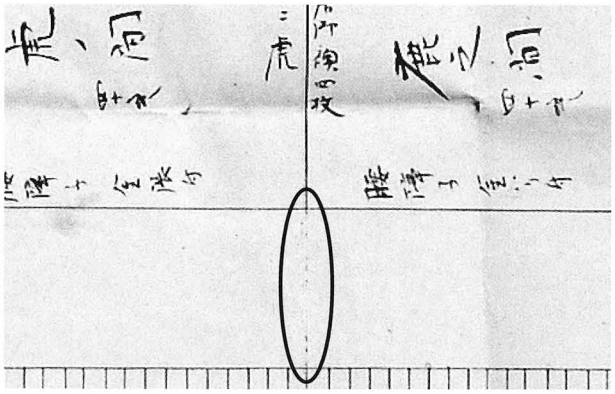
・等間隔で表記されるべき柱間は正確に記されており、くるいはない。四間四方の「孔雀ノ間」「檜之間」は２寸４分で、「虎ノ間」「鹿之間」はともに３寸で表記されている（第79図）。

・「上段の間」のかまち等、段差があるところは二重線で表記されている。

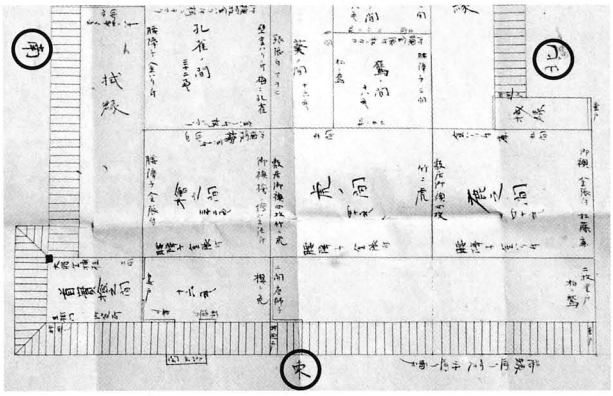
・大広間西側に並ぶ「上段（「御座ノ間」）」「鶴ノ間」「鷹ノ間」「虎ノ間」南側のラインは一直線であり、前述した２点の絵図（「青葉城御本丸之図」「御本丸大広間地絵図」）とは様相が異なる（第80図）。そのため、絵図によって「虎ノ間」と「鹿之間」の部屋の大きさが異なっている。「虎ノ間」の広さを比較すると、本絵図では40畳、前述した２点の絵図では48畳である。絵図の信憑性とともに各種絵図との比較検討を含め、慎重に検討を重ねていく必要がある。



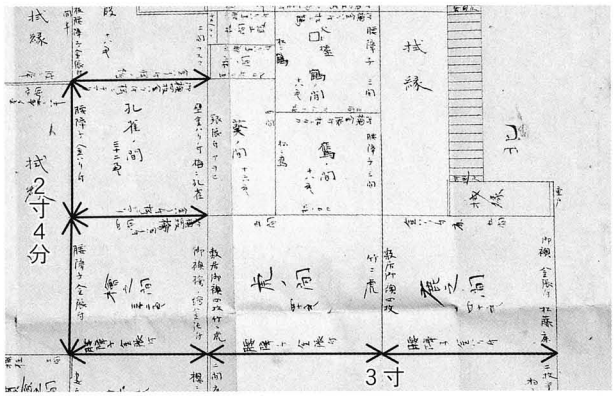
第76図　鉛筆書きの箇所（大広間南西角）



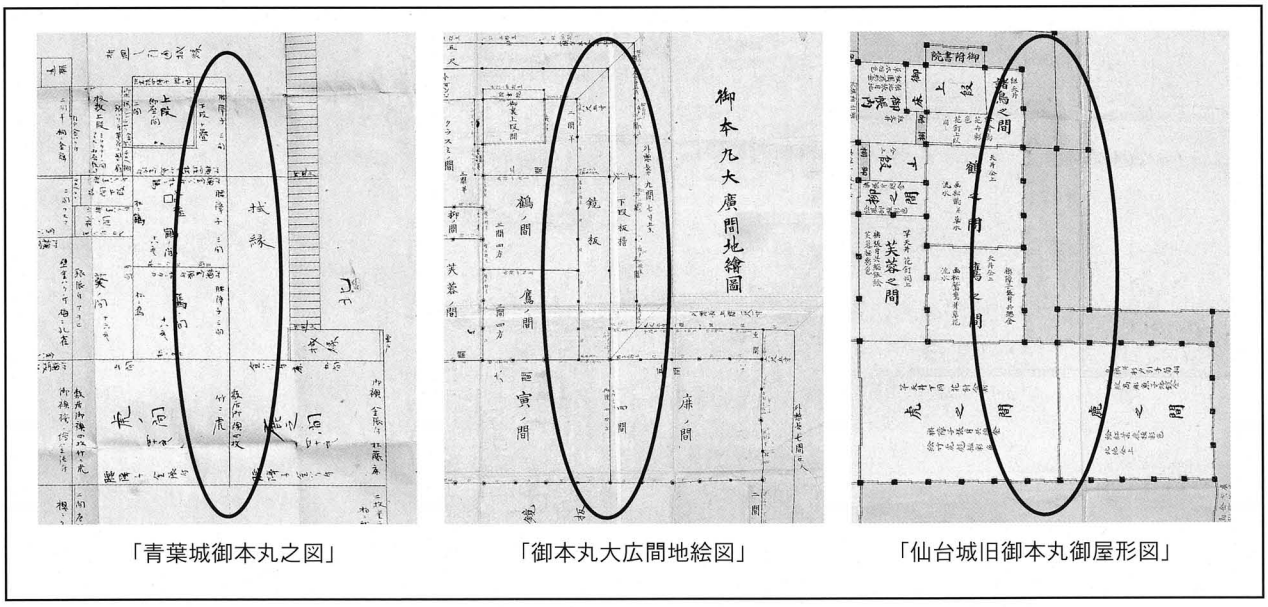
第77図　誤って記した線を消した跡



第78図　誤った方位が記された箇所



第79図　部屋寸法



第80図　「上段（「御座ノ間」）」「鶴ノ間」「鷹ノ間」「虎ノ間」南側のラインの比較

Ⅸ　総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第２期５ヵ年計画の２年目であり、本丸大広間内部北半の遺構確認調査（第17次）、三の丸巽門東堀跡の遺構確認調査（第18次）を行った。

これまで大広間跡の調査では、その位置や規模、柱間（６尺５寸基準）等を確認している。平成16年度の第10次調査では、通路の可能性がある、大広間車寄付近から御成門付近へ延びる石敷き溝状遺構を検出した。また、御成門跡の現存する礎石が門の北東角にあたる事をほぼ確定した。

平成17年度の第12次調査では、大広間雨落ち溝跡北辺の北約３mで石敷きを伴う礎石建物跡を１棟検出した。礎石は４石がL字形に並び、東西の軸線は大広間跡東西軸線より北へ20°振れる。大広間跡北側周辺は能舞台の推定地であったが、この建物跡の全体形状、規模が不明である点やその建物が大広間に先行する事実から、能舞台との関連性を指摘するには至らなかった。この建物跡の評価は、今後大広間跡に先行する遺構の拡がりを明らかにし、周辺遺構全体の位置関係の中で行っていく必要がある。また、雨落ち溝が改修を受け、それに伴い新たに暗渠状遺構が取り付くなど遺構の変遷が明らかになった。

平成18年度の第15次調査では大広間雨落ち溝跡および礎石跡の北東角、南東角を確認した。両角の礎石跡については、隣接してそれぞれ２基検出され、南東角においては直接の切り合い関係が認められた。北東角についても時間差のある可能性が高いことから、大広間の建替え等を含めた可能性について今後更なる検討が必要である。また、大広間の北東周辺では古い順から、南北溝跡、整地層、東西塀跡、暗渠状遺構等の変遷が明らかとなった。大広間とその東側に展開する建物、庭園との位置関係や本丸御殿全体の配置、それらの時間的変遷を検討していく上で重要な成果である。今後、大広間の北側（第12次調査）や西側（第５・７・10次調査）における遺構の変遷と総合し、本丸北側における御殿構成の時間的変化を検討していく必要がある。

同年実施した第16次調査では巽門東堀跡、土塁に関連する遺構を検出した。堀跡の調査では、それぞれ３列、２列の杭列を伴う北岸、西岸を確認した。また、西岸では斜面に貼り付いた階段状の集石を検出した。堀跡の南岸の確認には至らず今年度第18次調査への課題となった。三の丸跡の土塁については、版築状の積み土を確認した。

今年度の第17次調査は、大広間内部北半における遺構確認を目的として実施した。大広間内部北半にあたる礎石跡および礎石を16基検出した。建物の中心付近で東西に並ぶ礎石跡や調査区北側でもこれに並行する礎石跡などを確認し、大広間のや各部屋の位置や配置を検討する上で重要な成果が得られた。今回の調査で検出された礎石跡について、礎石間の距離を測定した結果、「６尺５寸」が柱間寸法の基準となっていることを再確認した。また、調査成果と『御本丸大広間地絵図』が、礎石跡の検出位置と絵図が示している柱位置が概ね一致していることが検証された。

昨年度に続き、大広間に先行する石敷き遺構にあたるⅢd層を検出した。検出レベルが近似しているが、石敷きを伴う礎石跡は確認されなかった。大広間に先行する建物に伴う石敷き遺構もしくは、大広間建築時の整地に関わる地業の可能性が想定される。石敷き遺構以外にも整地層下において遺構が検出されており、大広間に先行する遺構群については今後とも検討していく必要がある。

第18次調査は、KS-496堀跡（１区・２区）の西部と南部の範囲についての把握と、これに関連する遺構の確認を目的として実施した。１区では、木樋を伴う堀跡の南西角部、２区では、３列の杭列を伴う堀跡の南岸を確認した。また１区西部では山からの湧水を排水するための溝跡を検出した。堀跡の規模は、第16次調査で確認された北岸からの南北幅35～40m、深さが現地表面より6.35m以上となる。南岸は盛土により形成されており、新旧２時期の盛土が認められた。絵図等で確認される堀の形態上の変化と、どのように対応するかは今後の検討課題である。

参考文献

小倉強　「松島瑞巌寺と仙台城大広間」『仙台郷土研究』第２巻第12号　昭和７年（1932）

小林清治編　『仙台城と仙台領の城・要害（日本城郭史研究叢書２）』　昭和57年（1982）

小林清治　『伊達政宗』　昭和34年（1959）

佐藤巧　「仙台城居館の変遷とその構成・機能」『近世武士住宅』　昭和54年（1979）

西和夫　『建築技術史の謎を解く（続・工匠たちの知恵と工夫）』　昭和61年（1986）

西和夫　『図解古建築入門』　平成３年（1991）

仙台市教育委員会　『仙台城』　昭和42年（1967）

仙台市教育委員会　『仙台城三ノ丸跡』　昭和60年（1985）

仙台市教育委員会　『仙台城址の自然』　平成2年（1990）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター『年報１～18』　昭和60～平成17年（1985～2005）

『仙台城跡石垣修復等調査指導委員会　第１～９回資料』　平成９～12年（1997～2000）

仙台市建設局　『仙台城石垣修復工事専門委員会　第１～15回資料』　平成13～16年（2001～2004）

仙台市教育委員会　『仙台城跡調査指導委員会　第１～18回資料』　平成13～19年（2001～2007）

仙台市教育委員会　『仙台城跡１～７』　平成14年～19年（2002～2007）

『奥州仙台城絵図』　正保２年（1645）（斎藤報恩会蔵）

『仙台城下絵図』　寛文４年（1664）（宮城県図書館蔵）

『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』（仙台市博物館蔵・千田家資料）

『御本丸大広間地絵図』（斎藤報恩会蔵）

『青葉城御本丸之図』（仙台市博物館蔵）

『御本丸御家作御絵図』　明治元年（1868）（宮城県図書館蔵）

『仙台城旧御本丸御屋形図』　明治26年（1893）遠藤允信追記（仙台市博物館蔵）

『伊達治家記録』（貞山公治家記録）

『仙台古文記』　慶長７年（1602）（伊達家御給主　高梨家文書　平成５年（1993）　所収）

『御本丸拝見覚書』　安永４年（1775）安倍彦右衛門記（仙台市史　昭和４年（1929）所収）

矢野顕藏『仙台藩祖尊王事蹟』　明治32年（1899）

伊達邦宗『伊達家史叢談　巻之五』大正10年（1921）　復刻版『伊達家史叢談』今野印刷　平成13年（2001）

第二師団司令部『仙台城沿革』第二師団司令部　大正15年（1926）

小倉強『仙台城の建築』仙台工業高等学校　昭和５年（1930）

阿刀田令造『仙台城下絵図の研究』㈶斎藤報恩会　昭和11年（1936）

小倉強「仙台城大広間絵図に就て」『仙台郷土研究　第十二巻第十一号』仙台郷土研究会　昭和17年（1942）

高倉淳ほか５名『絵図・地図で見る仙台　第一輯』今野印刷　平成６年（1994）

仙台市教育委員会『仙台市文化財パンフレット第45集　仙台城下絵図の魅力　杜の都のうつりかわり』
平成13年（2001）

仙台市博物館『仙台城－しろ・まち・ひと－』　平成13年（2001）

吉岡一男ほか６名『絵図・地図で見る仙台　第二輯』今野印刷　平成17年（2005）

仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編７　城館』仙台市　平成18年（2006）

森田克行『近世初頭の枠工法護岸施設』季刊考古学102　平成20年（2008）

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと
書名	仙台城跡８
副書名	－平成19年度　調査報告書－
巻次	8
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第330集
編著者名	渡部　紀・在川宏志・鹿野仁子
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区国分町3丁目7-1　TEL022-214-8544
発行年月日	2008年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	調査地点	コード 市町村 04100 北緯	コード 遺跡番号 01033 東経	調査期間	調査面積	調査原因
仙台城跡（せんだいじょうあと）	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし）青葉区川内地内（あおばくかわうちちない）	大広間跡（７次）［第17次調査］	38°15′02″	140°51′35″	2007.5.28～2007.8.4	263㎡	重要遺跡の遺構確認調査
		三の丸跡（３次）［第18次調査］	38°15′07″	140°51′41″	2007.8.29～2007.11.27	468㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・雨落ち溝跡・堀跡	陶磁器・瓦・金属製品・石製品・木製品	第17次調査では、大広間跡内部の礎石跡を確認し、大広間の間取りや各部屋の配置が明らかになった。 第18次調査では、杭列を伴う堀跡の南西角部、南岸を検出した。

仙台市文化財調査報告書第330集
仙　台　城　跡　8
— 平成19年度　調査報告書 —
2008年３月
発行　仙台市教育委員会 文化財課
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　TEL 022（214）8544
印刷　株式会社 建設プレス
仙台市青葉区折立三丁目2－10
TEL 022（302）0177